進歩と教育

序

今日歐米の思想界に於ける著しい傾向は主行主義の實行である。卽ち哲學も科學や文學も宗教も長い間の軌轍を脫し、互に提携して人生の進歩に貢献する事を以て唯一の目的とするに至つたことである。

科學と哲學、哲學と宗教の相容れず相爭ふた時代は既に過去である。從來の學問は學問の爲めの學問で、極めて無味乾燥なものであつたが、今日は人生に直接應用することを目的として科學も哲學も研究さられるのである。彼の米國の富は今や學理應用によりて諸方面に成功し益々膨脹するではないか。

教育の如きも形式のみを重んじてはならぬ。活ける教育を施し、有用なる活人物を養成せねばならぬ。教室に於ける教授訓練も輕んずることは出來ないが、家庭、社會、自然の三要素を包容する適當なる境遇と機會を與へて感化教育及び自然教育を施すことを忘れてはならぬ。卽ち人格の修養も知能の啓發も、みなこの實際の境遇や實際の人生に接觸した活ける教育によらなければならぬと信するのである。

わが日本女子大學校が教室以外の家庭的寮舍あり、銀行部、雜貨部、製菓部、園藝部、購買組合、其他生徒の自修、自學、自活の諸機關を設けて居るのも、つまり實際の境遇、實際の人生に接觸する機會を與へんと欲するの趣旨に外ならないのである。

斯書は予が疾くから著述を思立つては居たが、何分にも平素校務多端の身で殆んど寸暇をも得られない、幸ひ萬朝報に居られた加藤敎榮氏が專ら編纂の勞を執られ、漸く發行を見るに至つたのである。而して予が斯書に於て述べた多くの言論は、世の大勢の趨く所、時の思潮の動く所を顧み、進歩を競ふ世界の情勢に明應すべき教育に就て平素の

所懐の一斑を説いたものである。

明治四十四年十一月

日本女子大學校にて

成瀬仁藏

第一　自己發奮

年頭所感

力と知識の有る限り。

人の天賦に相違あり。

力のあらん限り、知識のあらん限りを盡しても、猶滿足の結果を見る事が稀であるとは多くの人々の云ふ所である。今もし此の常套の語を破つて、何人も一旦計畫を立つれば必ず何物か滿足するに足る結果を見なければ止まないと云ふ習慣を養うのには何うしたらば好いか、之れ人々の一年中の計畫を立つると共に熟慮を要すべき點であらうと思ふ。一體物の構成發表と云ふ事は、實際に於ては非常に困難なものであつて、もし之を以て困難でないとする人があるなら其の人はまだ構成發表を試みた事がない人と云つてよい。然し世には時々非凡なる天才が現はれる。かゝる天才は如何にも容易に事を爲し遂げるやうに見える。例へば彼のカントの如きは、僅かな時日に於てよく後世（空闕ママ）億の人をして仰がしむるやうな大部の著書をなした。これを一頁、二頁を數日書き澁る者の眼から見ると、人の天賦の才能には、かくまで相違があるかと疑はしむるのである。勿論此の天才なるものは、教育によつて附與する事の出來ないものであることも亦事實である。然し人は各々皆一種の天才を有してをつて、其の種類こそ異れ、大小の差こそあれ、何物か一つの潛伏力を有してをる。一旦此の力が發輝さるゝや、恰も土中に埋もれた種子の春に遇ふて萠芽を發するが如く、暗檐たる室内に瓦斯の光りの輝くが如く一瀉千里の勢をもつて人格を作り、學識を修め、事業を（經カ）營することが出來て、必ず其の希望する彼岸に到着して、完全なる結果を見ることが出來る

のである。

この非常なる力は何處に、求むべきか。自然に待つべきものでもなく、他人によるべきものでもない、たゞ我が心の奥に求むべきものであつて、其の原動力となるものは、實に Concentration（適當なる譯語はないけれども暫く勢力集中と云つて置かう）によるのである。

Concentration 卽ち精力集中

この Concentration 卽ち精力集中は一の技術であつて、たゞ語をもつて理解しても、實際自分の經驗によらなければ我が有となす事は出來ない。私は幼時常に「若し父親の學識を其の儘讓り受くる事が出來たならば幸福であらう」と考へて居たが、もとよりこれは到底望んで得べからざる事である。然るに今日の學生は一般に教師、先輩の學識を手を拱いて讓り受けんことばかりを望むで居るから眞の知識を得らるゝ事ができない。眞に學識を得やうとならば何故それを我が有と爲すの法を講じないのであるか。若し精力集中を實驗することが出來れば茲に始めて驚くべき力を發し、凡ての知識を同化して、己が人格學識を作ることが出來るものなることは恰も凸レンズによつて散漫せる微弱な光線を集中して、焦點を作り、其の焦點から發する熱に薪炭を加へて、如何なる烈火をも發することの出來るのと同一である。我等が精力集中を試みんとするならば先づ凡ての障害物を破壞し、凡ての關係を統一して心に焦點を作る事に努力せねばならぬ。この努力は、意志、卽ち知識と感情との一つに結合したものである。斯く意志によつて精力集中をする時は、人各々の特性は發揮されて、此處に卽ち天才が現はれる。換言すれば天才とは彼の西哲の言の如く努力の力强きものを言ふのである。然るにこの精力集中は現時の我國民に於て最も短とする處である。こゝに至つて我等は如何にしたなら此の力を養ふことが出來るか。

生存の興味。

第一　内に其の源を求むべきことである。其の源といふは卽ち心に起る Interest である。Interest も亦

適當の譯語はないが、利益とか、興味とか言ふので、畢竟必要であり、要求である。この要求は、實に人に非常なインテレストを起さしめて、精力集中をなさしむるのである。例へば、彼の日露戰爭の際の我國民の驚くべきほどの一致協力は畢竟國民が敵を亡ぼして以て我が國家、我が主義を生存せしめやうといふ生存の興味に起因するのである。

第二　四圍の境遇。卽ち外部の刺戟によつて暗示を得ることである。恰も平穩な海上に、一波高く揚れるが如く、時に吾等の胸中に高い波動の起る事は精力集中の爲めに大切な事である。之れ境遇に順應せんとする興味といふてもよいのである。

第三　內に發するものと、外に起るものとの關係を作る我等の意志。

精力集中を欲するものは以上の三要素に留意すべきである。我が理想、我が主義、我が意志のコンセンツレードする時は、前述の三要素が關係よろしきを得た時である。其處で吾等はこゝに新年を迎へて如何なる事に精力を集中すべきか。

一、知識、品性を養はんが爲め。卽ち己れの身體の爲めに、己れの腦力の爲めに、己れの心靈の爲めに、之れを健全とし、また完全にしようとして、精力集中をしなければならぬ。之れ內に起れる必要であり興味である。

二、物質的境遇と精神的境遇。卽ち萬有と精神との關係である。例へば、今年は日蝕もあらう月蝕もあらう。天文學に興味をもつたのは、この自然の時期を利用して、學習すべきことを忘れてはならぬ。其の他凡て社會の出來事によつて何物かを印象すると同時に、何物かを發表しなければならぬ。

三、其の目的を達せしむる意志の修養を怠つてはならぬ。而して自分の修養と、外部に向つての活動と

人類に對する本務。

今後の我國の武器は卽ち富なり。

が一致して、眞の人格、學識は養はれ、家庭、國家、社會、人類に對する本務は集中すべく、更にかゝる人々の一家、一國は集中してそこに偉大な國力の發展はあらはれ、以て社會人類に貢献することが出來るのである。

過る明治二十七八年に於て、我國家は日清戰爭に國力を集中した。明治三十七八年には世界的戰爭に集中した。而して今四十年に於ては如何なる方面に集中しやうとするのであるか。其の集中點を見出すことが出來なければ各自の方針を定める事が出來ない。方針のない活動は片々たるもので無効である。

四十にして惑はずといふことがある。國家も四十年の經驗を積みて、漸くにして此の發展を見るに至つた。然し更らに異る行路に困難は横はつてゐる。而してこの難關を越え得るや否やは、全く國家の存亡に關するものである。この難關といふのは卽ち商工業の戰爭、經濟的戰爭のことである。經濟と言へば、精神上に於けるものほどに、大切でないと考へるものもあるけれども、經濟は國家の身體であるから、國家は其の健全を待つて、始めて健全なる精神を養ふことが出來るのである。「武士は喰はねど高揚子」といふ我が古來の思想の遺傳は金錢を重んずるの念に乏しいけれども、今後我國力の發展を致さうとするの武器は實に國家の經濟である。而して教育もまた經濟の力の伴ふにあらざれば其の發達を計り難いのである。彼の米國に於ける私立大學の大勢力を致した原因も其の經濟の力多きによるのである。試みに思へ、教師が生活難に追はれて研究の時もなく、書物を買ふの餘裕もない時は果して完全なる教育を施すことが出來やうか、又學校に於ても、圖書館、實驗室其の他諸設備の完備を見ずして効果ある教育を施さんことは望みうべき事であらうか。我教育界の不振は我國家の富力の乏しきによることが多いのである。

前述の如く今後の戰爭に於ける我國の武器は卽ち富であつて、田地山林鑛山等富力を產み出す所にあ

る。而してそれを使用する軍人は國民である。國民が經濟を運用するの力によつて、其の精鋭と否とは判別される。

然らば我富力はどうであるか、最近の統計によれば凡そ百八十億で、しかもこれは國民の不動產を加へたものである。然るに日露戰爭によつて負はなければならぬやうになつた負債は、金圓を以て算して實に廿億である。其の上今年の議會に提出せらるべき豫算を見るに歲入は四億であつて、歲出は實に六億の多きを示してゐる。世界列國の富力に抵抗するに、この微弱な富力を以て而かも此の多額の負債を負ひ、多事多端なる戰後の經營に對して我國民は、如何なる覺悟を要するか。節儉も勿論必要であるけれども、其の樣な消極的態度のみでは不可能である。國民はよく社會に於ける現象を看破して、國民社會と自己との關係よろしきを得ること、卽ち精力集中と云ふ事が大切である。夫故に國民一般をしてよく商工業の戰ひに耐ゆることの出來る人に教育しなければならぬ。今後日本は商工業的知識、品性を備へた國民によつて、能く其の强敵に打ち勝ち、國力の發展をきたす事が出來るのである。然るに從來の教育は、却つて此等戰士の勇を挫くとも、力づくることをなし得なかつたのである。彼の試驗制度を嚴ならしめた結果、每年數萬の青年は失意の極、多くは厭世、悲觀に陷り、墮落、放蕩の淵に沈むのである。國家が國民の意氣鎖沈を慨嘆する如きは、寧ろ源の濁りを淸めざるの迂を難じなければならぬ。今に於て其の弊風を改めなければ、五十年或は百年の後をも待たずして、世界の競爭場裡に到底立つ能はざるの敗北を招く事は明かである。一年の計は元旦にあり。我の勝利は先づ初陣に於て之をなすることが出來る。明治四十年!!! これ經濟的戰爭の難關に向ふの初陣である。人々は先づ自己と社會の現象との關係をつけ、次に國民との一致協力を計り、日露戰爭當時にもまさる國力の集中をなすべきである。

青年男女の確信如何にあり。

活動の福音

ゲーテ曰く、「一國運命は二十五以下の青年の輿論の上にかゝれり」と。換言すれば一國の運命は其の國青年男女の確信如何によりて定まるものなりと言ふのである。然るに現今の我が國家社會が青年男女に向つて放つてゐる嘆聲は何か。曰はく煩悶、悲觀、厭世、腐敗、墮落は其の極に達してゐると。少くても社會にしかく映ずるからには或は其の事實は青年男女の上に存するかも知れない。果して然りとすれば我が國の前途これより大に憂ふべきものはないのである。

斯る重大な問題を、徒らに聲高く發くのみであつて、敢て其の救濟の術を講ぜざる者は、我が新日本の國辱を表さんとするものであつて、又國家、人類の至寶である青年男女を殺す者である。この頃英國に於て、『日本青年男女の墮落、腐敗を救はんが爲めには、我々宣教の職にあるものが、其の方法を考究しなければならぬ。而して之れ等青年學生の爲めに適當な寄宿舍を設置する事は、目下の急務である』と、云ふて人々から金圓を詐取したものがあつたと云ふことである。また先き頃米國の有力なる一新聞記者は余を訪ねて、種々教育上の意見を問ふ所があつたが或る問題について云ふには『日本は活氣滿々たる新進國と思つてゐたのが、豈計らんや其の最も盛んなるべき青年男女の意氣が著しく銷沈してゐると云ふ輿論があるのは何事であるか』と、余は之れに對してかう答へた。『そは實に皮相の觀であつて、社會が針小棒大に傳へる結果に外ならない。無論、青年男女の中には煩悶しつゝある者もあれば、自殺した者もあつた。然し之れは決して我が國にのみ特別に認むべきことでもなければ、また現今のみの現象でもなく、東西古今を通じて屢々聞く所の事實ではないか。特に前世紀の遺物なる古き宗教の信仰個條を以て、二十世

青年の煩悶。

紀の青年男女の頭腦を束縛しやうとする歐米に於て青年の煩悶に苦しんでゐることは私も亦見聞した所である』と、この答へは余の日頃の意見であつて青年の煩悶を以て、或は多少の自殺を以て、社會がかくまで悲觀してゐるのを却つて怪むのである。單に悲觀するのはまだしも其の原因の那邊に存するかを究めず其の救濟の術をも講ぜずして、徒らに攻擊の矢を恣にするの慘酷は實に憎むべきの極みである。

私情の僕、私欲の奴。

然しながら、翻つて今日の青年男女の意氣は如何ととはれたならば殘念ながら遂に薄志弱行の詞を以て答へるより外はない。これを實例に徵するに、青年學生が休暇なるものに所する方法を見よ。彼等は休暇を以て、遊惰、安逸、娛樂に耽るの時と心得て居る。卽ち正月盆等には日頃の嚴肅を破つて、踊り、唱ひ、戯るゝことを怪しとしない風習である。また夏休には大磯、鎌倉、輕井澤等の避暑地に出かけて、貴き時と金を費し、却つて惡習を購つて來るのである。これ實に彼等が未だ休暇の意味を解せず、閑暇の時の用ひ方を知らないからである。休暇は休養し、心身の疲勞を快復させるために日頃とは稍々趣を異にすべきであるけれども、また一つの働に就くべきものであることを知らないのである。かくて彼等は心身を働かせないから閉居して不善を爲すの譬にもれず、私情の僕となり、私欲の奴となつて、思想は沈澱し、身體は墮弱となつて、遂に精神的に經濟的に死せざるを得ないのである。また彼の試驗勉强を以て卒業證書を握つて社會に出た青年を見よ。彼等は常に廣き門を求めて止まない、其の上勞せずして貪らん事を欲し、戰はずして昇らん事を希ふてゐる。爲めに一つの困難に遇へば忽ちに僻易し、一つの失敗を招けば立どころに悲觀して了ふ。しかも彼等の目的とする所は、富貴名譽に過ぎずして、之れに達するためには、他人の地位を羨望し、權謀術數を逞うするのである。是は獨り學生のみでなく、各階級の青年に於ても同樣である、彼等は遊んで食はんことを欲するのであるからもとより勤勞を喜ばない、不平を鳴らし、遊惰

を事とし、己のが職務を顧ず社會の秩序を紊すが如き事をして貴重な光陰を空費してゐる。これら各階級を通じての弊風は、何に原因してゐるか、また如何にしてこれを救濟すべきか。

青年の弊風を救ふの福音

この青年の弊風は勿論、家庭や社會に基するのであるが、先づ家庭、社會の潮流を作る可き學校は、大に其の責を負はなければならないと思ふ。而して是は決して文部省の訓令、或は學校の規則をもつて矯正し、救濟し得べきものではない。今日の學校教育の弊は、實に青年男女に確信を與へることが出來ない。不撓、不屈の精神を與ふる福音に接しめることが出來ない。

然らば何をか福音とは云ふ。彼のカーライルの言つた働らきの福音がそれである。十九世紀以前の社會人心の傾向は「汝自身を知れ」といふ事であつた。そして十九世紀の傾向は、エマーソン曰へる「萬有を學ぶ」事であつて、最近の福音は「汝の爲すべき仕事を見出して、之れを實行せよ」と言ふ事である。卽ち實行する事、活動する事が、眞に吾人の人生を導く燈臺である。活動しやうとするならば先づ己れの仕事を見出さなければならぬ、己れの仕事を見出すには萬有卽ち人世をも、宇宙をも學ばなければならない。況んや汝自身を知らなければならないことは論をまたない。

カーライルの言。

今日我が國の青年男女は如何、彼等は實行卽ち心身を勞働する事に、大なる福音の存する事を知らないのである。そして徒らに讀書し、冥想し、不健全な理想を夢み、大言壯語を弄して大に學べりと誇つてゐる。これが爲めに却つて學問が敵となりて精神的に、經濟的に、否遂に生理的に殺さるゝに至るのである。この危險極る狀態より、青年を救ふ福音は、「汝の働を知り、そして之れを實行せよ」と、云ふ事を信じさせるにある。而してこれは啻に青年男女のみに與へられた福音にあらずして、老年者にも、病者に

大なる手一米國人の。

も、同じく與へられた福音である。人生はそれ活動である。奮闘である。そして此の經驗を誤まらず向上する者こそ、運命の最寵兒たりうるのである。

嘗て一米國人が碓氷山中に天幕生活を試みんとしつゝあつた或富豪の令息に會して、徐ろに其の手を擴げて云ふには『この大なる我が手をごらんなさい。我れ等は此の手に銃を提げて南北戰爭に戰つたのです。此の手に斧を執つて草深き米國の原野を開拓したのです。女子もまたよく是を助けて衣食住を調へ、或は第二國民を養育しました。それ故我米國民は男女をとはず大きい手をもつてゐます。そして此の手は實に私共の勞働を證明すると共に榮譽を表してゐるのです』と。誠に意味深長なる言葉ではないか。この一語を以て今日の米國の隆盛をきたした原因を語つてゐる。之れに反して、國運日に衰へつゝある清國民を見よ。其の女子の如きは足を小さくし、指の爪を長くして、安逸を貪るを以て貴しとしてゐる、抑々此の勞働を卑むことは東洋一般の風習であつて、我國民の如きは早く此の弊風を脱したやうであるけれども、未だ其の頭腦は働きの福音を解することは出來ない。若し吾人が手を動かす事を好まない時は、頭を作る事も、品性、健康を築く事も、經驗を得る事も、國民を向上せしめ、確實なる人類となす事も不可能である。手の教育をせずして品性の教育を望み得べからざることである。然しながら手を働かす事が、やがて智力を働かす事である。勞働の意味には、頭の働きも共に含んでゐる。卽ち思考力なくしては、「汝の仕事を知り、そしてそれを實行せよ」との福音を實行する事が出來ない。この働と言ふ事によつて、始めて力も健康も、品性も築かれるのである。働く事は己れを支配する唯一の法である。勿論過度の勞働は罪であつてまた徒勞は避く可きものであるから。一つの大なる目的を以て働かねばならぬ。そうすると必ず煩悶も少なく、不平も無く、墮落の淵からも遠ざかることが出來る。余は今日の青年の弊風は、畢竟、

閑暇の結果であつてこれに對する有力なる救濟の策は勞働の福音を彼等に傳ふることであると信ずる。

苦痛より逃るゝ勞働。

斯はまた人類の福音

勞働の福音は獨り血氣盛な青年の爲めばかりでなく、性來頭腦、身體の弱き人も、臆病な性質の者も、之れによつて健全となり、また希望、勇氣に滿つることも出來る。吾人がもし不治の病に罹り、或は臨終に際した時、如何にして其の病に克ち、死の苦痛より逃れて平然たることを得るか。勞働！　之れ實に唯一の福音である。

余の生涯に於て、最も強い感化を與へられた人は、澤山保羅である。彼れは常に云ふた、「余は疊の上で死なゝい、戰場で死ぬ。人生の戰場に倒れる迄戰はう」と、之れ只だ口の上ばかりでなく、彼の生涯は實に終生奮鬪の連續であつた。卽ち十幾年片肺のみで生息を續けて居り、また、其病床に横はつた時は一言を發すれば、三十分間位も咳が出て息がはづみ、いかにも苦しげに見えたけれども、彼の口より發する言語は實に健康の人を奮起せしむるに足り、其の容貌態度は實に青年も耻づかしい位に活氣に滿ちて居つた。故に彼に接した者は、一人として未だ不平を聞いた者はなく、皆其の活氣を受け新らしい光りを得て歸るを常として居つたのである。病革るや、各友人に宛てゝ記念品の用意をなし、別れの手紙を認めて、悠々として眠るが如く瞑目した。彼は終世病の内にありながら而かも、心身の勞働を忘れなかつたのである。その勞働は無上の福音として、彼を病に克たしめ、死に克たしめたのではないか。また彼の詩人ハイネは、巴里のアテツクと云ふて、物置き同樣の二階、否寧ろ屋根裏とも云ふべき所に住んで八年間半身不隨の病を以て、病床の中に生息してゐた。彼曰く「今や我には目も無く、耳も無く、肉も無く、力も無く、只殘れるものは聲のみである」と。しかも此の聲を以て見舞に來る友人に向つて、其の詩人たり、哲

學者たり、諧謔家たるの特色を發揮したと傳へられてある。又彼の眼は窓掛を隔てたる樣に曇り、眼瞼の緊張は衰へて指を以て僅かに之を開けば、朧ろげに物を認めうると云ふほどであつたが、尙ほ筆と原稿紙とを取つて、彼の死後寄邊無き妻の爲めに、はた人類一般の爲めに、其の豊かに、美しい思想を餘念もなく書き續けてをつたのである。かゝる境遇にありながらなほかつ斯の勇氣を與へたものは卽ち彼の活動精神である。此の活動精神は、吾人に天職を見出さしめ、如何に病身、臆病の人にも、犯す可からざる勇氣を與ふるものである。余は活氣盛んな青年を救ふにも、死に襲はれつゝある病者にも、此の福音は必要であると信ずる。今日の我が學生の意氣銷沈を救ふの良藥は活動である。積極的の活動、換言すれば自動である。

汝の働を知り之れを實行せよ。

働の福音を見出す方法

吾人は「汝の働を知り、そして之れを實行せよ」との福音を聞いた。然らば何によりて働を學ぶべきかと言ふに、是には方法がある。畢竟見出したる働を實行する事が出來て、後明らかに理解し得べきものであつて、何事も必要によつて學ぶ事が出來るのである。

北米に住んで居つた人が南米に來て地理、風土を始めいろ〳〵の研究をしたが、南米は北米に比して、氣候が溫暖であつて、四時花を絶つことなく、且つ花の中には多量の蜜を蓄へてゐる。然るに蜜蜂は此の蜜を取つて運ばうともせず、蜜に飽きては花に眠つて居るのであつた。之れを見た彼は、若し北米にあるやうな勤勉な蜜蜂をこゝにうつしたならば、必ず多大の利益を納め得らるゝだらうと考へ、やがて北米の蜜蜂を持ち來つて、其の花園に放した所、初めの程は、小さい羽根を終日動かして南米の蜂に勝ること何倍の蜜を採集した。然し夏も去り秋も逝いて、冬來るも花園の花は絶えることがないので、蜜蜂は蓄へず

とも可いと思つたのか、終にまた蜜に飽きては花に眠る南米の蜜蜂と撰ぶ所がなくなつた。こゝに至つて彼は實に必要より働くといふ眞理を、斯の蜜蜂の上に見出したといふて居る。人世に於ても、金持は三代續かずといふが、彼等富豪の徒は多くは働らく必要を見出す事が無い、僅かに働らいても只虚榮に過ぎないのであるから、とても彼等の品性を築くことが出來ないのみか遂には其の財産をも失ふに至るのである。

働きの福音！　余は現社會を救ひ、意氣銷沈せる青年に活力を與へるものは實にこれに外ならないと信ずるのである。

主行主義管見

主行主義者の最重んずる點は其の態度である。然らば其の態度は、何れの方向に向つて立ち、何に背いて働きつゝあるか。先づ第一に背いて居る方面の事を擧げて見ると、

（イ）　抽象的にして効果なきもの、
（ロ）　言語的解決、
（ハ）　極端なる先天的理論、
（ニ）　固定せる主義、
（ホ）　完結せる組織、
（ヘ）　空理的絶對及抽象、

これ等のものを遠ざけて、我れ〳〵は如何なる方向に向いて進むかといふと丁度夫れとは反對である所

の、

（イ）具體的、（ロ）實用的、（ハ）事實、（ニ）實行、（ホ）實力、

これ等が我れ〳〵の求めて居るものである。斯くの如き態度は、我れ〳〵に如何なる影響を與へるかと云ふと、

時間と精力との經濟。

第一は時間と精力との經濟になるといふ利益がある、從來の主理說が陷り易き弊の抽象的思想、或はどうしても經驗する事が出來ない、到底解決する望みのない問題を考へる程我れ〳〵の心を害するものはない。無益に時間を費し、無益に腦力を消耗するのみならず、遂には煩悶に陷るのである。今日の青年は實利主義に走るに非らざれば、卽煩悶に陷るといふ有樣であるが、此の煩悶と云ふ事は人間の能はざることを仕やうとする事から起るのであって、主行主義は、斯る徒勞を救ふ事が出來る。つまり主行主義の方法で考へれば、考へた事は皆實際の力になるのである。

老衰せず。

第二は、主行主義を自分のものにして居る人は、老衰せず、元氣を永久に續け、限りなく進歩する事が出來る、何となれば、出來上つた眞理や、組織を信仰せずに、眞理は進歩するのであると信じて居るからである。

固定せざる進歩。

第三の利益は、主行主義による時は、我れ〳〵の信仰が動的になる利益がある。何故ならば主行主義の特性は萬事未だ完全せず、終結しないといふ考へである。主行主義の或人は此の主義は未だ完全でない、固定して居らないと云って居る。夫れであるから、事物も、眞理も、限りなく進む事が出來るので、我れ我れは只先導者に導かれて、其の後ろに從ひ、先輩の發見した眞理を受ける事が出來るのみならず、我れ我れ自身が創始者となる事が出來るので所謂動的である。此の態度は如何なる時代にも必要であるが、殊

に今日の如き過度の時代に於ては、此の態度を以て、今日の境遇に適合する事を經營するのは最も大切である。

研究力に就て

模倣と創始は違つたものにあらず。

模倣、創始といへば、全く異れるが如く聞えるものである。勿論、兩者は同じものではなからうが、要するに程度の問題である。絶對に模倣と創始は違つたものではない。されば世に決して絶對的模倣と言ふものが無いのと同時に、絶對的創始もないのである。模倣とは已に表現せられたるもので、他に習ふの分子の多いものを指して言ふ言語である。彼の研究なども此の模倣と創造の動らきに外ならぬのである。

人を傲慢にする恐あり。

△研究と申せば容易ならぬ、何か至難のものゝ如く考へられたり、最も高き教育を受たる大學の學生の外は、能はぬものゝやうに考へるのは、是は大に間違つた事である。のみならず、研究の進歩發達を妨ぐるものである。卽ち頭腦の進歩しない人や最も發達を遂げた國民の頭腦があつて始めて世に改良進歩と言ふものが行はれる。彼の婦人なるが故に研究が出來ぬ、年若きが故に能はないといふは實に大なる誤である。見よ研究的能力は幼稚園の兒童に最も多く表はるゝものではないか、然し是を抑壓したのは、從來の教育の最も重なる弊と言はねばならぬ。兒童や學生などには成可く斯の研究的精神を充分に發達させるやうにしたいのである。教師としては出來る丈け學生等の個性を現はさん事に注意したいものである。人が人として今日の命を保ち世に存在する意義は、只研究の力があるからである。この力を養ふこそ眞に教育の任務があるのである。

△研究と言ふことは、人を傲慢にするの恐がないかと云ふが、是れ又杞憂である。眞の研究の主義に生く

本能と興味。

る人は却つて着實なもので且つ謙遜の心がある。此の種の人は、只物を多く知り度いと云ふのみではなく學びたる知識を世に實現することを目的としてゐる。一度學びたる知識はよく味つて凡て己れに同化せしむるのである。即ち同化しなければ決して表現することが出來ないからである。故に學ぶことも着實になつてくるし、知識もまた正確となつて決して空理空想を喜ばない、その結果自然謙遜の心を有してゐる。

△或はまた研究創始する人は、教師や他人の說を取らない、頑固一點張の人のやうに考へるなども、事實大なる相違である、却て是等の人こそ獨斷を喜ばず、何事も廣く人の說を容るゝ筈のものである。

△研究する事、創始する事は、彼の感情教育に害がなからうかと言ふ人があるが、決して斯の如き害がある可きものではない。のみならず、之れ又正反對であって斯の研究創始の方法によるは、最も人の感情趣味の發達を遂るものである。即ち研究創始する爲には己の本能と興味を基とせねばならぬ。其の本能と興味は感情に基いてゐるのであるから、自然感情を教育するものと言わはねばなるまい。されば研究的精神は、感情を養ふ今日の文學の骨董視せらるゝ弊を敗るには唯一の方法と云はねばならん。

△研究を爲すものは常識を缺くの恐があるまいかと云ふに、物事を表現するには、最も常識を要するものである。如何となれば研究と言ふ事の動機は、常に人の爲め、社會の爲め、その需要に應ずるに外ならぬのである。されば研究、實現を爲すの人は、最も己を知り、人を知つてゐる人である、己を知り人を知ることは、常識により適當の判斷を下さねばならんのである。

△次に研究は經驗を重ずるを以て、讀書を厭ふに至らざるかと言ふに、最も多くの書を最も有益に用ふる人は、實に研究の心に富む人なのである。「吾人はたゞに書物を味ふのみならず、之れを食し、之れを消化せよ」とは、正に研究を重ずる人の讀書法である。

婦人に對する嘆聲。

女子の賢愚

婦人に對する嘆聲は、西洋の古書の屢々載する所で、古へのヒブリユー、グリーキの聖賢も屢々嘆聲を發せられてある。東洋に於ても孔子は言つた。「女子と小人とは養ひ難し」と。然し是決して輕蔑の意にあらずして、其の人々が女子を養ひ、悟道を教へたが終に失望落膽に終るの止むを得ないからである。こは獨り昔のみでない、今日文明の中心たる英、米、獨等の國々の、學者、教育家、宗教家、政治家の中にも、往々婦人に就て嘆息されてゐる。彼のカントは『余の婦人から受けた感化力はその説をさへ變化せしむるに至る』と、カントは嘗て年若き婦人と結婚して十八年間同棲したが、終に團欒を知らないで、別居の慘狀を呈した、僅かに交通、往復位でカントの心には聊かの光明もなかつた。聊かの愛情もない、然るに圖らず晩年に及びて一賢婦人と遇ひ、二年交際をしてゐたのみであつたが、その感化を蒙つた事が、實に大にして、妻があつても、妻のないのも同じいカントは姉妹、子供を欲したれど、まだ嘗て斯くの如きものに遇はなかつたので、此の婦人を稱して、

The changeless friend: my saint Celotilda! thou who art to me in the stead of wife, of sister, of child: fare well, loved pupil, true fellow-marker,

「この天使の如き感化は、わが殘生を支配する、わが子よ。わが愛する生徒よ。わが其の働き人よ」とは、此の婦人の臨終に於てのカントが言辭である。實にカントの生涯は二大別をするのである。初めは學理研究の時代で、終りは宗教生涯で、この一賢婦と遭ふに及びて、この心情に少なからぬ光明感化を得た、宇宙に横はるヒューマニテイを見出した。カントのヒューマニテイは卽ち宗教である。カントは實理

賢婦は、稀なり。

婦人の弱點は救はる可し。

的哲學を發見したる位であるから、其の說く所は決して空論でない、初めて賢婦人に會して宇宙の大眞理を知るやうになつたのだと叫んでゐる。かゝる賢婦に會つた男子は幸である。その新生命を開拓することが出來た。然し賢婦は稀である、賢婦に遇つた男子も亦少ないのは人々の經驗に調して明かである。然し賢婦は此の世にあり得べきもので、また爲り得べきものである。たゞ爲し得ない原因は、女子に二三の弱點があるからである。その弱點とは何であるか、耳に馴れて、しかも行ふに難きものがある。

（一）己れを解せず、

（二）人を解せず、

（三）社會の實際を解せず、

殊に我國の女子は、教育あるものさへ、己を解せず、人を解せず、社會を解しないものがあるのは、現に之れを社會の實驗に照して確かな事實である。彼の障碍横はり、困難迫れば、忽ちにして昨日の人でなくなる婦人が多いのである。寄る邊なき夫の遺子をさへ、打捨てゝ其の身の樂を得んが爲めに再緣するものがある。たゞ身の樂を得んが爲めに耻を忘れ、人情を拋つ言語同斷な所爲は、畢竟、己を知らず、人を知らず、社會を知らざる爲である。己れを若し知つたならば何故一旦負ふた責任を盡さないのか。人を知つてゐたらば何故斯かる人非人の所爲に出るのか。社會を知つてゐたらば何故次代の國民ともいふべき其の愛子を打捨てるのか。嗚呼、己れの一身の區々たる樂を求めて、この大罪を犯すを知らないか。今の多くの我國の婦人が、此の傾向を持つてゐるのは嘆ずべきではないか。然し之を救ふ道を講ぜずして、徒らに悲觀するのは愚の極である。

其處で眞の價値ある教育は婦人の弱點を救ふに足るものである。神學的、形而上學的教育は過去に屬す

るもので、最近文明國に價値ある教育として認らるゝは實際的教育、卽ち生活と教育とを結び付けたものでなくてはならん。徒らに讀書し、聽講し、空想し、空論に耽つてゐる輩にして、何うして實際を知り、眞相を穿つことが出來やうか。若し農學の著書はするけれども、演說はするけれども、嘗て一粒の米だに作つた事のない農學博士、學士の橫行する世ならば、其の國の農業の運命が思ふべきではあるまいか。獨り農業のみでない。社會百般の事業は皆說くは安く、行ふは難いのである。孔子も我れ田畑の事は農夫に及ばずと云はれて、いかに經驗は貴重であつて眞を敎へるものである事を說かれた、この貴き經驗は學術の指導があつて、始めて長足の進步、繁榮をなすのである。長足の進步、繁榮を欲しない人は無からうけれど、從來の敎育が人をして斯る迂遠な空理空論家となした罪である。今、明かに弊を知り、之れを矯むるの道を知つて、何故人々は實行を急がぬのであらうか。余の婦人に向つて嘆聲を發する所のものはこれである。

彼我の體格に就て。

人の體格

近來英米其の他の諸外國より賓客が續々と來遊し、我國民はこれが歡迎に多忙を極めてゐる。此時こそ實に我が國民の團體心を鼓舞し愛國心を促す時である。否我が國民の心をして、一變せしめんとする時である。國民は各其の責任を感ぜしめらるゝ時である。彼等多數の外國の賓客を迎へて國民は如何なる感じを持つであらう。必ずや有形、無形ともに種々の刺戟を受け、種々の感化を受けることゝ思ふ。その一として余は常に彼我の體格に就て感ずる所が多い。彼等は實に其の體格に殆と我に勝る事が著しいのである。見よタフト卿といひ、ルーズヴエルト孃といひ、ノーウエル大將といひ、またブライアン氏といひ、

國民の體格を改造する責任。

體育の目的は眞善美にあり。

我等の目に映ずる所の彼等はみな長大肥滿の體格を備へてゐて、眞に大國民として雄飛するに足る力は、かゝる身體にこそ宿るべきであらうとうなづかれるのである。また彼れ等の表情の活々として、巧みである事は、よく大國民たるものゝ資格を添へて居る。彼等の傍に於て見る、我國民は凡てに於て、實に小である。劣つて居る。ブライアン氏が來遊せられた時の演說中に、「神は貴きものを特に小さき器を撰びて入れ給ふ」と例の巧妙な話振で、かゝる賛辭を呈せられたが、つくづくと我國民の小さいことを感じたからであらうと思ふ。

然らば此の國民の體格は誰れが進歩せしむるのであらう。誰れが改造の任に當るのであらう。第二の國民を作る權利を持つものは卽ち女子ではないか。その大責任ある女子は運動や衛生を閑却してならないことは論をまたない。外國の大學などでは、運動の選手など云ふものは、日頃、居室も、最も光線の通しの好い、空氣の流通の好い、快濶なものを與へられてあつて、規則正しく起臥し、食物を材料に於て、分量に於て、最も適當なものばかりを撰ばれて居る。しかも內外の珍書を集めて體育を研究し、有名な體育家を聘して、其の說を聞き、其の技を見るばかりでない、自ら日々一定の練習を怠らぬのは元より、實に選手の赫々たる技量は、かゝる準備につまれて次第に、僥倖の勝利をたのむと云ふやうな淺墓なことは決してないのである。學校の運動會なども全部選手の如きものでありたいと思ふ。また運動會より得た習慣は、自己の品性に加へて進んでゆかねばならぬ。一體學校の運動會によつて如何なる習慣が加へらるゝであらうか。それは精神上に、身體上に、多々あらうが、まづ總じて、體育の目的とする所を、幾分なりとも實現し、その實現さるゝ丈け、自らの品性に加ふる事が出來るのである。體育の目的とは、卽ち眞で、善で、美であつて、また興味をもつて、身體の健康、教育、休養を計るのである。これが如何ほど實現さ

れ、如何ほど個人の品性となつたかは、多くの運動に注意し見聞するものゝ證する事であると思ふ。

生活の制度

家庭と學校と社會の三關係。

家庭、學校、社會の三者は、各自密接の關係を有するもので、之の三者は各、互に共通の性質を備へてゐる。卽ち家庭は吾人の經べき最初の社會で、何人と雖、必ず經驗する處である。この家庭はやがて延長して學校といふ社會となる。一層延長して國家社會となる。また、家庭は最も大切な人生の基礎となる學校である。そして學校を出で國家社會の人となるとも、そこに大學も、教師もある。人は家庭を離れて學校に入つても、學校は一つの家庭で、國家社會はまた一つの大なる家庭で、一つの國土のもと、法律のもとに業を營む國民は兄弟で、王者は父である。

以上の三者は社會構成の最も大切な制度で、この三の制度は各文明に貢献すべき理想の上に建てられてある。そして家庭は如何なる理想の上に建てられるものか。一言を以て言へば柔順といふ理想の上に建てられてある。人の動物的性情を化し、高尚な精神的のものに教育し、發展しゆくものである。また國家に、社會に忠良な國民となり得るも、皆、只、柔順の德によつて、己れを適應せしむるによるのである。

柔順の德を養ふこと。

この柔順の德を養ふことは、家庭の最も大切な働らきである。元來柔順は秩序を保つ上に缺くべからざるもので、宇內に一大秩序あるは、萬有悉く萬古不易の宇內の法則に柔順であるからである。斯は必然であつて別に自由の意志があるのでない。然るに人間には自由の意志がある。時に意志の撰擇を誤り、柔順の德を缺くことがある。この柔順の德は最初母に從ふことから起る。引いて父に從ひ、王者に從ひ、教師に從ひ、眞理に從ふ。この從ふということは社會を構成する最も大切な要素である。これ卽ち人に身を委

學校の理想するところは何か。

ね、心を捧るからである。

この德は、最初模倣によつて養はれる。稍々進みては暗示を受けて自ら考へる。工夫して從ふ。終に進みてはインスピレーションを受け、眞に自ら眞理と考へ如何にもして、これに自身を適應せしめんとして從ふものである。

約言すれば人の進歩、發展は柔順によるものであつて家庭は是を養ふ所である。

學校は如何なる理想の上にたつべきかと言ふに、進化或は發達の上に立つべきものである。卽ち人の自然より受けたる技能を、自然が許す限り發展せしむる所である。家庭に於ては、全く人に身を委ねたが、學校に至り、始めて、獨立心が起る。個人性が發達する。我れに附與されたる心身の力を發展し、複雜な發達を遂げて適性を發揮し、人格を作るのである。

社會を構成する基礎となる理想は、貢献、奉仕。卽ち己れを捧げて、社會を作るもので、己れは社會の生命を養ふ材料となるのである。今右の三者の關係を表示すれば、

人類生活の三制度

(一) 家庭	(二) 學校	(三) 社會
小兒	青年	大人
他人のもの	吾がもの	社會のもの
依信	獨立	救濟
感化をうく	實現	感化を與ふ
從順	進歩發達	貢献

家庭生活　學校生活　社會生活

以上の三者は何れも人類に必要で、人類の生活の三方面、進歩の三階段である。そして此の三方面の生活を終始具備しないと、人は完全な發達を遂げられない。常に幼兒の如く從順となつて、感化を受くることが大切で、一日、一時と雖、我れの進歩、發達を忽かせにしてはならぬ。換言すれば學校生活を離れてはならぬ。そして最も發達進歩した我を社會に貢献することは最後の目的である。社會に貢献するとは、所謂人道に貢献するもので、この精神と實行とは、社會の生命となるのである。個人も亦貢献によつて品性が作られる。永遠に己が精神を生かす事を得るものである、何れの人も如何なる人も、この三者の生活を離るゝ時は、人間としての價値を離れるのであることを決して忘れてはならぬのである。

人道に貢献する所あれよ。

仕事の秩序

必要なる秩序とは何か。

余は仕事の秩序につき左に必要なる個條を述べやう。

イ、人、各々己れに屬する本務がある。

ロ、物、各々其場所がある。

ハ、頭腦の倉庫に納むるに於ても然うである。

ニ、時にも各自の受持ちがある。

ホ、かるが故に、多くの仕事を比較的、少なき時間になすには、一時に於て、一事をなすことである。卽ち一つ一つ、順序を追ひ、進むにも一歩一歩、階級を昇るべきである。

△整理の方法につき注意すべき個條。

イ、仕事、或は、考へ事を分類すること。
ロ、全體の組織を立てること、卽ち總合統一すること。
ハ、取捨、撰擇すること、卽ち事の利害、先後の要、不要とを考ふるのである。

仕事の變更に就て。

△仕事の變更につき、注意すべき個條(こゝに變更といふは、調和的變更なり)。
イ、圓滿なる發達を遂ぐる爲め必要である。
吾人究竟の目的は、圓滿なる發達を遂ぐることで、若し一方に偏するならば、藝としては成功するも、人間としては完全でないのである。
ロ、身體健全の爲め必要がある。
病は身體の罪惡である、この罪惡なる病は身體全部の發達、平均を失ふより來るのである。身心の健全を得るには、三の規則がある。卽ち節制、平均、全體の調和、この三の規則を守るには、吾人の動作を適宜に平均することである、その平均に最も必要なるは、仕事を變更することである。
ハ、時の經濟の爲め必要である。

時の經濟。

西洋の諺に「一錢に注意せよ、然らば一圓以上は自然に注意せらるゝに至らん」と、之れと同じく時も一分を有益に用いねばならぬ。その有益に用ふるには、仕事を巧みに變更してゆくのである。

△時に對する原則。
イ、無意識に事物を爲し得る事は時を用ふる上に利益がある。
ロ、成る可く迅速に又成る可く善良なる習慣を作つて欲しい。
ハ、時を違へないやうにせよ。

ニ、嚴正に時を守れよ。
團體的生命を養はんが爲めには、こは缺くべからざる條件であらう。
ホ、時を躊躇せざる事。
ヘ、時を配合する事。
ト、將來を慮る習慣。
チ、敏捷。
迅速、直ちに始むる事、延引せざる事は、皆この中に含むのである。こは天性にもよるべけれど、また習慣と方法とは大に與かりて力あるものである。

遊戯と學問

無味乾燥の生涯を思へよ。

人が若し遊戯といふ事を顧ない時は、極めて無味乾燥の生涯に陷り、これが爲めに働らきは不活潑となり、精力は早く消衰し、遂には其の成長も停止するの止むなきに至るものである。努力と遊戯とは反對の如く考へらるゝが、これ我れ〳〵の活動の兩方面であって、互に助け合うて、始めて完全な境遇が出來るものである。

我れ〳〵の幼時の教育を想起すると、割合にこの境遇は勝つて居るやうに思はれる。卽ち實際的の教育を授けられたものである。我れ〳〵は素讀を習ひ、經書の講義を聞き、手習ひをし、夜は算術を習うたが、また一方では朝は未明に霜を蹈み、雪をわけて擊劍をやり、晝からは農業をもした。餘暇には獵にも出かけ、馬に跨つて、山野を跋涉するやうな事をもしたのである。これによって心身ともに非常に鍛練せ

常識の缺乏。

遊戯は子供の社會事業か。

らるゝの機會が多かつた。而してこれは余獨りの經驗ではなくて、當時の一般の風習であつた。然るに爾後の教育が却つて境遇に重きを置かなくなつたのである。近年青年の意氣消沈を嘆じ、實力の不足を訴へ、常識の缺乏を歎くのは、畢竟、境遇に重きを置かぬ誤まつた教育の現象と見ても、敢て不當ではないのである。卽ちこれ等の青年は、たゞ机上の空理、空論に、其の腦力を徒費し、實際の仕事を賤しむるのである。從つて其の知識の不確實であり、また人生に應用する事が出來ぬものである。殊に遊戯する境遇、卽ち學校でいへば運動會、文藝會等を教育上無益なりとし、或は有益なりとして排けて居る、運動會は、全國何れの學校にもあるが、これをして興味あるやう擧行する事を却つて批難する、これ果して教育上、如何なるものであらうか。かのフレーベルは子供の天性を研究して、遊戯を以て子供の社會事業とした。卽ち子供の知識も、德性も、また身體も、遊戯の間に全く養はるゝものとしたのである。我れ〳〵はもし人の教育期を生涯繼續せしめ、終生進んで止まざらんとならば、この兒童期を命のあらん限り延長する事が大切である。卽ち子供になつて、遊ぶ時には大に遊び湧き出づる興味の內に、奮鬪の疲勞を癒さねばならぬ、而して常に新らしき力に充ちてゆく事が大切である。ゲーテは曰はく「種々なる活動を以て、多くの想像を以て遊びし、人形芝居は彼れが少年の時うけし形式的教育の或る部分より、彼れの眞の教育に對して必要であつた。壯年になつての仕事の爲めには、青年期の教育よりも大切であつた」と云つて居る。余は生涯の仕事をする上に於て、克己し、奮鬪し、努力する事が大切であると思ふ。然し眞の人生の價値はやはり自由の意志に從はしめ、高尙なる精神界に逍遙し、思ふが儘に活動する間にすゝむのである、そこに文藝があり、生命があるのであると考へる。天地萬物を觀察しても如何なる時でも、成長するものであらうか。春風駘蕩たる三四月の頃に延び、冬に於て、固まるのである。我れ〳〵も冬のみの境遇

スピノザ氏曰く。

遊戯が如何に成長に大切なるか。

に居らば、決して育つものではない。愉快に、自由に、遊ぶ事によつて、積極の力が延びるのである。是等のことは余の獨斷ではなくして、古來の教育家の認めて居るものである。スピノザは「我れ〳〵の憂鬱を退くる事が、何故饑喝を退くる事より、もつと大切であらうか。余の虚弱なる事、又惡事、心配等を喜ぶのは誰れであらうか。さる神はゐまさぬ、然し只一つ、我れを嫉む人これなり。……涙と嘆息とは、我れの弱き徴である」と、云つた。何時も涙なく、悲しみなく、恐れなく、心配なく、働らく事の出來ない人は成長は出來ぬ。其の他道德心を養ひ、人と共に調和し、好意を以て社會をなす上よりもまた非常なる熱望を以て向上しゆくに必要なる研究心養成の上よりも、また發表の習慣を養ふ上よりも遊戯は大切な事である。わが校の如きも時には何か事情の爲め運動會を見合はした事もあつたのであるが、これは教育上損して居る事が多い事を、今日見出すのである。卽ち本校の主義である一致、團結、もしくは自動的活動、犧牲の精神等を最もよく認めて、これに同化するは運動會の時である。また非常なる實際的興味を以て、自ら研究し、觀察し、組織し、發表するといふ事が出來るやうになるのもこの時である。そこで今遊戯が如何に成長に大切なるかを示せば、

第一、智力の健全なる發表となり、

第二、想像と感情とを育つる上より、

第三、我れ〳〵の創造力を育つる上より、

第四、評價の力を養ふ上より、

第五、社會的調和を作る上より、

必要缺くべからざるものである。善く遊ぶ人にして、始めて善く學ぶ事が出來る。然し教育上學ぶ事を

夏季と周圍の自然。

爽かなる頭を以つて修養せよ。

重んずるほどに遊ぶ事を大切と考へぬ事は一大缺點であると信じ、こゝにこの言をなす所以である。

利用すべき夏季休暇

夏季は一年中でどんな時であるかと云ふに凡て自然の風物が戸を開いて、人の來り交るのを待つに似て居ると思ふ。山は積雪を解いて、人の登るに都合よき道を啓き、海は水を溫めて、浴みるに心地よい。加之太陽は充分の光線を與へて、樹木を非常の力を以て成育せしむる。蜜峰や、蟻は終日外に出でゝ、年中の食餌を蓄へんが爲めに、孜々として働いて居る。人も亦小さき屋根の下よりは戸外を慕ひ、樹蔭に涼風を呼んで、半日の勞を慰し或は歸省したる子女を圍んで、月夜に語り更かす等、一年中でこの時ほど人が自然物に親しむ折の多い時はないであらう。人はこの自然に接して如何なる感興を催すであらうか。かの詩宗テニソンが、壁の裂隙に咲く花を歌うて、「小さしとも根をも持つ全き花よ。吾れもし汝の何たるかを理解するを得ば、やがて人の何たるか、神の何たるかをも知らる」と云ふて居る。海に接して世界を思ひ、山に住んで宇宙といふ念を起し、天を仰いで無限といふ感に打たるゝ時、どうして我れ我れはその意味を考へないで居られやうか、同時にこの偉大にして無限なる天地に、意味あり氣に生存して居る微弱なる人間の吾れてふ事に思ひ到らないで居られやうか。この偉大のもの、無限のものと、吾れとの交りが、やがて我れ我れが宗教的精神に入る第一歩である。換言すればかくて初めて精神修養の經驗を得る事が出來るのである。

日本の學生は隨分學ぶものが多いので、日頃はこれを咀嚼して、わが知識、學力とする餘裕がない。故に往々其不消化なる知識の爲めに、頭を惱される事がある。殊に現今の我が社會は、實に雜多な思想が入

り亂れて居るので、學生も亦これに感染せずには居られない。故にさま〳〵の疑問が湧いて、終にこれを統一する事がむづかしいので、弱き青年の頭は往々病的に陷るのである。幸に夏季の二箇月は、必身に餘裕を作る事が出來るから、心地よい早朝に、冷水で全身を摩擦し、深呼吸し、新らしく、爽やかなる頭を以て、さて徐ろに靜思して、知識を消化し、思想を統一して、健全なる理想を作る事が必要である。而しその理想に、現在の我れを比較して、足らざるを補ひ、及ばざるを進むる事が修養の要訣である。

歸省したる學生は久し振りで父母兄弟に見え、舊師を訪づれ、舊友を訪ひ、近隣親戚のものを尋ねて、眞に人との關係を學ぶことが出來る。日頃修養した精神はこの場合に鍛練せられる事が多い。學生の一擧一動は單に一身の毀譽褒貶に止まらずして、直に學校、或は教育の價値に及んで來る。この重き責任を負つて、多くの人に接する事は、餘程修養上には利益ある事と思ふ。其の他常は仕事に餘念ない者も、小閑暇を得て旅行するとか、或は山間、海邊に避暑するとかして、違つた人情、風俗に接して學ぶ事が多からうと思ふ。

正宗の名刀とか、左甚五郎の彫り物とかゞ尊ばれるのは、眞に作者がそのものに靈魂を打込んで作り上げたもので、從つて今もなほ入神の妙技に一種の生命の宿つて居るかを思はしむるのである。今日我れ我れは文明の恩惠を蒙つて、一方では大に人力が省けると同時に、一方では工藝品に技術の妙味を失ひかけて居る、獨り工藝品のみならず、人間の仕事が次第に殺風景に陷りかけて居る、私は暑中休暇等に、世の子女が、手工なり、勞働なり、機械を離れて、精神を打込んで働らく經驗を得させ度いと思ふ。暑中閑暇の時を利用して秋になつてから兄弟に送る靴足袋を編むもよい、一家の者や、自分の衣服を裁縫するもよい、子供は酸漿の赤らむのを樂しんで、朝夕、心を盡して水を注ぎ、蟲を取つてやる事等もよい。凡てわ

が精神を傾け、わが手指を動かして作つたものに、どれ丈けの尊さと趣味とがあるものであるかといふ事を知らせるのは、人の周圍にある事物に趣味を見出して、愉快に働いて行く事が出來る一助ともなるであらうと思ふ。

印象と發表

心の内外。

我が國今日の教育は、比輕的人の心に印象せしむる事には力を入れるのであるが、これを發表させる事には左程重きを置かないやうである。之れが爲めに心の内に思ふ事と、外に現はす事とが非常なる懸隔を來すやうになつて、遂には無能力者と何等異る所なき結果に終るのである。之れ實に教育の一大缺點であると共に國力の發展を妨ぐる一大弊風であるのである。この缺點を改め、この弊風を救ふに先ち、先づ充分發表の價値を認める事が何よりも大切である。

第一、發表の知的價値

知と頭。

發表は藝術の爲めに必要な計りでなく、知識を明らかにし、思想を確實にする上にも缺く可らざるものである。頭の中に組立てた所の知識を發表致すときには、其の知識は一層明らかに、且つ廣くなりて來て、其の關係も確實になるのである。理想も其の通りであつて只腦中に描いて居る計りでなくこれを發表することによつて、初めておぼろげであつたものが明確になるのである。彼のミカエルアンゼルは、或る寺院の彫刻を頼まれた時に、一つの理想は頭の中に描かれたのだが、彼れは之れを直ぐ樣、大理石には試みないで、粘土の模型にあらはす事によつて更に其の理想を明らかにし、かうして有名なる彫刻は完成せられたと傳へられてあるのであるが、斯くの如き事實は我れ〳〵の經驗に由つても明らかに證明せらるゝ

のである。發表を試みない、實行をしてみない教育は、不得要領の人間を作るばかりである。

第二、發表の道徳的價値

之れは説明する迄もない事で、我々が道徳に就いて非常に深く感ずる處があつて、強い決心をかためても、之れを實行上に現はさなければ、何等の價値もないのである。この感ずる所を發表して始めて善い習慣が養はるゝものであるのである。

善い習慣。

第三、發表の宗教的價値

ポールの云つた言に「行なき信仰には生命なし」とあるが、實に其の通りである。クリストの如く、釋迦の如く、孔子の如き行ひが出來て、始めて其の信仰は尊くもあり價値もあるのである。

尊き信仰。

第四、發表の社會的價値

只に考へ、只に議論をする計りでは、何等の價値もないのである。故に考を持つて居るならば、夫れを自分の處する所に向つて發表することが大切であるのである。

發表と人格

こう云ふ風に分けて申せば限りがないのであるが之れを統括して申せば、發表は我々の人格を作り全品性を作る上に大切なる要素である。故に印象と發表とは相並行して行はれねばならぬ。

發表は我々の人格を作れり。

我々の人格はこれを主觀的方面と社會的方面との二方に別ける事が出來る。即ち一方に於ては内に感じて自らを修養し、進歩せしめると同時に他方に於ては社會に向つてこれをあらはして行くのである。然るに人格と云ふと形に現れた所の肖像か何かのやうに思ひ易いのであるが、實は人格といふものは、進行である。故に其の日〳〵が其の人の人格であり、品性であるのである。之れを以て油斷すれば後に戻るので

人は果して死を終とするか。

ある。故に始終進まねばならぬ。そこで我々の品性、人格は始終、作りつゝあり、爲しつゝある所の働らきである。故に萬一此の印象を忘れたならば、根なき木、水源なき池、原動力なき汽車や汽船の如くなるのである。又發表といふ事を疎かにすれば、意志は薄弱となり、生涯は不結果に終るのである。

そこで我れ〳〵の常に勉めなければならぬ事は、一方には充分善い印象を受けて、生命の源を養ひ立派なる感情と、高尚なる理想と燃ゆるが如き信仰とをもち同時に充分發表の力を養つて、そして内なる我と外なる我とを一致さするやうにつとめなければならぬ、此の兩者を一致せしめ得る人、此の活動力ある人をさして、完全圓滿なる人とも眞に健全なる人とも申すのである。

死の問題

人が此の世を去つた時、果して人の生命は死を以て終りを告ぐるものであらうか、五十年は人生であり、七十は古來稀であるといふが、死後は千年、萬年、續くといふ事があるものであらうか、之れは問題である。佛教などには死んでから十萬億土に往くと云ふ考へがあるが、神道では高天ケ原に、耶教では天國に行くといふ。何れも宇宙の或る場所に無限に自分を擴げるといふ表徴である。然し限り無く擴く長くといふ事が果して不滅の命であらうか、否、我々の生存せる地球は、何十萬年の時を經て居るかも分らぬ。又宇宙の星は幾億年經つて居るかも知れぬ。然長い間續くから我々はこのものを命あるものとは云はない。又精神あり、價値あるものとは云はないのである。我々が若し何かの仕方を發明して、之れから月の世界に旅立ちし、月の世界から木星、木星から何と次第に飛んで、宇宙を逍遙する事が出來たにしても、それで我々の命は擴大されたとは云へないのである。卑近の例に省みてもさうではないか、船のボー

イとなつて太平洋、大西洋を幾度も横つて、歐米の地に遊んだからとて決して大きな人間になつたとは云ふ事は出來ぬ、假令カントの如く生涯七十年間五十哩以外に出た事がないといふ人でも決して其の人の命が小さいと云ふ事は出來ない。我々の云ふ永遠不滅の生命は迷信時代に考へた地獄、極樂でも、天國でもない。もう少し確實な實在である。然らばその實在とは何か、之れは後に說く事によりて次第に解るであらう。

生命不滅とは如何。

第二に不滅の生命と云ふ事は我々の肉體の永續と云ふ事であらうか。たとへ我が身は死しても、我が血を繼げる子孫が永く生き存らへて居る、それが永遠の命であらうか、またこれが宗教で云ふ未來の復活といふ如きものであらうか、決してそうではない。我々はとかく自分の血を續けると云ふことが大切であると思ふものであるが、然し單に血を續けると云ふ丈けならば、下等動物でもして居る。しかのみならず、今日の發達した科學によれば、普通親の血肉が子孫に傳つて居ると思ふのは誤りで、我々の身體には一塊たりとも、一滴たりとも、親の血肉は無い、否我々の一身でも、七年前の血肉は新陳代謝して少しも止つて居らないのである、子供は母の乳を飲むが牛の乳でも生きて居られる、その子が必ず親のもので生きて居るとは云はれない。我々の肉體を分析すれば土と何等の差がないので、もし一旦死すれば土に歸して、またもとの姿になる時期はない。然らば何を子孫は享け繼ぐのであらうか。只身體を組織する型式、それを繼ぐのみである。

意識の有無に就て。

然らば永遠の生命とは、我々の意識、心靈を意味するのであらうか。

これは大分むづかしい問題である。我々が自分と云ふ事を意識するのが自分である。意識は何かと云ふに我々の經驗である。この經驗を二つに分けて間接の經驗と、直接の經驗とにする。一方は經驗の目的物

空間を超越したる生命。

卽ち客觀物體であり、一方は經驗をする主觀である。間接なる經驗によつて知りうるそれを自分で知ると云ふのである。意識はまた無意識になる時がある。然し意識にうつるものは實驗したものゝ實在を實驗したものといふ事が出來る。ライプニッツは「我々の意識は宇宙の鏡なり」と云つて居る。又或る學者は「意識は萬有を見る事が出來る」と云つて居る。故に意識は實在の一部であり、永遠の生命の一部である。然らば個人的意識、個人的經驗が果して永遠の命であらうか。否必ずしもそれが永久の命であり、不滅のものゝ全體ではない、宇宙卽ち本體を見渡せば時に醒め、時に眠る事がある、生があり、死があり、動があり、靜がある。この波瀾は宇宙卽ちその實在が無限の生命に進んでゆく階段である。一段づゝより、完全に進む階段である。そこで我々が眠つたからとて實在は眠らぬ、我々の意識が無意識になつたとて、實在はそのまゝに存在活動して居る。故に永遠の生命は我々個人的の意識ではないと云ふ事が確定せらるゝのであると思ふ。

然らば果して無限の命とは如何なる要素を云ふのであらうか。時と空間を超越した無始無終の永遠無窮たる生命の價値である。その無限不朽の生命の價値は之れを大人格に見る事が出來る。その大人格の價値と云ふのは、卽ち我々の意志であり我々の心の態度である、我々の正しき判斷である、我々の最も深き處にある原動力である。その人格は物體の如く知覺する事が出來ぬ、併し乍らその人格の意義、目的として悟りうるものである。其のものは我々が原因結果を以て說き明す事は出來ぬ。その擴さと重さとを量りうる事は出來ぬ。然しその價値を定める事は出來る。永遠不朽の生命とは畢竟價値の永續保存に外ならぬ。我々が人格を發現するとか、又は文學を研究して美を發揮するとか、科學によつて眞理を發見するとか云ふのは、之れ皆價値を探し、之れを育てゝ居るのである、やがて宇宙の價値に出遇ふ事が出來る、この時

を指して小人格と大人格とが調和統一したとも、人格と國家、社會之れを更らに大くして人道或は神と合致したとも云ふ事が出來るのである。

かうなれば國家、社會の意志は自分の意志であり、宇内の意志も亦我が意志の向ふ所と同一である。プラトーンの云つた樣に、「我々の意志は宇内の大潮流を流れて居る、滔々として流れて居る、宇内の潮流は依然として動いて居る。」或人は「我々の意識は太陽の光をプリズムが分解して赤綠紫のさま〳〵に分けた如きものである」と。その色の光線となるのである。我々の生命も今一つの色を表はして居るが、我々が實體に歸れば、他の多くのものと調和合體して一つになるのである。我々は七色の光線が合して白色になつたからとてその光りの實體が無くなつたとは云はない、分れても合しても依然として光りは光りである。たとへ我々の小人格は肉體と共に消ゆる事があらうとも大人格＝人道＝眞如＝神に其の價値は歸して、決して消滅するものではない。なほその考へが明瞭となる爲めに、無限の生命は無限の意志であると云ふ事を申して置きたい。其の人の意志を兩方面から見れば、其の人の人格は解るであらうと思ふ。卽ち意志の一方面を理性と云ひ、他の一方面を情緒と云ふ、これは二つであるが分つべからざる一つの實體である。我々の理性は思想であり、行爲であり、活動である。この思想、行爲、活動が我々の精神の實在である。我れといふ者は骨でも肉でもない。我々の思想、行爲、活動にあるのである。而して永遠の生命は我々の頭に無理に作らねばならぬものではなく、衷心からの願望であり、命である。人々はその爲めに生き、その爲めに働いて居るものである事は誰れも首肯する所であらう。

大人格は消滅するものにあらず。

宇内を支配して居る意志と衷心冀ふものと融合して居るその意志は、時と所とを超越して居る。例へばクライストの大人格、釋尊の大人格は二千餘年の昔現はれたものであるが、今日我々はかゝるお方から遙

クライストと釋尊の大人格。

愛の活動は人生に無窮なり。

かに隔つて居ると云ふ感じはしない。否今尚生きたる人格に接する感があるのである。我々が世界の歴史を學んで、成る可く早く自分の考へにしたいと云ふのは何の要求か、早く過去幾萬年かの命に這入りたい、卽ちその意志に這入りたいといふのである。何が爲めに生涯を立派にし、修養し、力を養ふのであらうか、決して學者になりたい月給を取りたい家庭を營みたいといふ爲めではない、理想を實現したいからである。學者になるのも金をとるのも、家庭を營むのも、理想の實現といふ大なる目的を果さんが爲めである。而してその目的は生涯かゝつても果されぬかもしれないが、其の意志が時間と空間とを超越して、少しも屈することなく、全體と共に働らいて居つたからである。

使徒ポーロは「天地は廢り、豫言も方言も止むであらう、然し廢れないものが只一つある、それは愛であり、仁である」と云つて居る、今日では聖書の中にあるものが悉く眞理とは認めない、然しその中にあるクライストの說く眞理卽ち仁愛は少しも減らぬ、經文の言葉は古びたとはいへ、釋尊の大慈悲大人格は廢たらぬのである。愛は永遠無朽である。クライストも神は愛であると云はれた。愛は神である。この愛が活動して居るから人生は無窮である。クリスト敎が歐洲列國の人心を收め、終に世界の全面に其の感化を及ぼしたのは、何の力であらうか、佛敎が東洋を支配し、我が日本にも入り來り、千何百年間人心を維持したのは何の力であらうか、クライスト、釋尊が社會の爲め、人の爲め、身を犧牲にせられた愛の力である。その力が今も死なずに人道を支配して居るのである。我々が寢ても、醒めても、病んでも、常に心を離れぬものは、父母親友の愛であらう。たとへ境遇はかはり、時は隔つても、愛の印象は我々の記憶を去らぬものである。而して愛は愛を生み、愛は愛を合せて、宇宙の精神を生ずる。これが宇宙の完全を實現する原動力となるのである。我々は完き愛を求めて、自分は人と、自分と社會と、自分と神とが一つに

融合して、その間に自他の差別のないやうにならねばならぬ、この域に達すれば死は死でない。マーカス、オーリ、アスが「成熟したる橄欖はその木から落ちねばならぬ」と。人の人たる道に這入つて、生涯の實を結んだ人は、安き眠りに就くべきが當然である。今苔深き墓下に遺骸を埋めても其の人格、其の精神は吾人の間に存在するものである。卽ち人は此の世に來りて使命を完うして、もとの命に歸つたのである。夫が吾人の死の問題であると思ふ。

第二　社會開拓

社會の進歩

時勢の豫言。

十年を一小世紀と見れば、去る明治四十一年は、將に第五世紀に入る最初の年であった。

一年の計は新年にありと言ふ言葉は用ひ古されて居るが、よく之を實行する者が幾人あるであらうか。計畫を立つるには先づ時勢の赴く所を豫言する必要がある。之を知ると否とが計畫の成就に大關係あるものである。人は一年の豫言をも容易になす事が出來ぬ、況んや十年卽ち一小世紀の豫言に於てをやである。しかしながら十年はおろか、二十年、三十年、或は五十年、百年の豫言をもなすにあらざれば、一日の計畫さへも立つる事は出來ぬのである。この豫言は筮竹をとり或は祈願によつて、天より、神より、降さるゝ不可思議なるものではなく、過去の經驗と、現在の狀態と、而かして世界の大勢てふ正確なる事實に基き、將來を推知して、始めて云ふを得べきものである。其の將來の年限の遠近によつて、明瞭の度は異るにしても人は十年、二十年、三十年、或は五十年、百年の豫言をなし能ふべきものである。

この豫言は何人も知らなくてはならぬ。殊に將來に屬する仕事を營む教育者は此の豫言の導きによつて行かねばならぬ。社會の事々物々一として教育の門戸を潛つて成長せぬものは無い。現在の社會は過去の教育の果を結んだものと云つても、敢て過言ではないのである。從つて現在の社會の狀態を觀察する時は、教育の長所をも短所をも、明らかに知る事が出來るのである。

先進國の人々。

地方は其國の根本なり。

我が國過去四十年間の發達は、實に歐米の先進國の人々をして奇蹟なりと嘆賞せしめ、或は將來の飛躍、計り知るべからざるものありと云はしむるに至つたのである。併し吾々日本の國民たるものは、此の言を甘んじて受けんとするものであらうか、否、何人も竊かに苦痛の念に堪へぬ處であらう。

余は三十六年ぶりを以て、始めて墓參のため、山口縣に歸鄉し序を以て諸地方の狀況を觀察するの機會に接した。此の時余をして著しく歎ぜしめたものは、一般社會に於ける進歩が實に遲々たるものであるといふ事であつた。卽ち一等國の俤が、何れに存して居るかを危ぶんだ事である。余は先年米國に在つて、出來得るだけ地方をも遍歷したが、社會的の事々はともかくも、其の生活の狀態、職業の有樣等、決して文化の步調は都會に遲れては居らぬのである、否、却つて文化の根元は、深く田舍に養はれつゝある樣に見られたのである。僻村の百姓家にても、家庭の圖書室はあつて凡そ二百種位な圖書は備へてある。週間雜誌の二三種、日刊新聞の數種は必ずとつて居る。余の泊つた農家では、三人の子供があつたが、其子供は、各自其趣味によつて、植物や、動物や、鑛物の採集をして、家の片隅に小さな博物室さへ作つて居るのを見た。

一國に於て田舍は、其國の根本をなすべきものである。卽ち國家の身體たる經濟は、此處に於て增殖せらるゝものである。國民の身體、能力は、此處に於て培養せらるゝものである。たとひ都會には文華の燦爛たるものありとも、地方に於て、なを昔日の狀態を夢みる有樣では、其の國力は幾何もあらずして使ひ盡され、經濟力は疲弊せざるを得ないのである。新日本の地方の文明が、四十年間著しき進步を見ぬといふ狀態でありとすれば、誠に氣遣しき極みである。今北米合衆國に於て、四十年間に農事が如何なる進步を遂げて來たかを參考の爲め掲げて見れば左の如くである。

北米合衆國に於ける四十年前と現今との
同一仕事に要する時間の比較

仕事	四十年前の消費時間	現今の消費時間
穀物植ゑ付け	一〇、五五時	一、二二時
穀物苅入れ及粉碎	四六、四〇	一、〇〇
唐黍植ゑ付け	六、一五	一、三七
唐黍苅り入れ	五、〇〇	三、四五
唐黍粉碎	六〇、四〇	一、三六
綿の植ゑ付け	八、四八	一、三〇
綿の苅り入れ	六〇、〇〇	一二、五〇
枯れ草苅り入れ	七、二〇	一、〇〇
枯草を束にする事	三五、三〇	一一、三四
馬鈴薯植ゑ付け	一五、〇〇	一、二五
トマトー植ゑ付け	一〇、〇〇	一、四〇
トマトー苅り入れ及び束にする事	三二四、〇〇	一三四、五二

卽ち四十年前には、一日掛つた仕事でも、今では、半日も掛らないで出來る樣になって居る。其進歩は實に長足と云はねばならぬ。米國の農產物の產出高は、近頃に於て十四億圓の巨額に上り、每年蟲の爲め

現今の青年を見る。

に害せられる額だけでも、實に六億の巨額に上ると云ふことである。我國の農產物の大部分は米であるが、明治三十五年の調査に由ると、其の產出高は四千六百萬石餘で、之を一石拾七圓としても六億餘圓で、僅かに米國が蟲害で失ふものと同額である。尤も米國と我が國と面積に於て比較にならないが、然し世界の競爭場裏に於ては同樣に一等國の面目を保たなければならないのであるからこの日本は、彌よ時間と勞力とを省き、土地を經濟に用ゐなければならぬのである。然るに四十年間農耕の業に更に著しき改良進步を見ず、しかも現今耕されて居る土地は僅かに全國の十分の六に過ぎぬといふ有樣で、どうして農業國たる日本の國力が保たれやうか。如何にして世界に於ける經濟的戰鬪に、戈を交ゆる事が出來やうか。之れが未だ出陣の準備さへも出來たものとは云へぬのである。

飜つて社會の弊風を矯め、國家の急務に赴かんとする現今の青年は如何なる有樣であらうか、唯物主義にあらざれば、煩悶に陷つて居る。彼等には理想がない、只目前の小利に汲々して自己の物質の欲を滿たせば足りるものとして居る。然らざれば誤つた疑問に解決を求めて苦しんで居る。偉大なる國民は偉大なる理想によつて作られる。われ〳〵を育つる外界の境遇の要素である水や、空氣や、光線は、何億年の昔も今も變らぬものである。然し內界の境遇である理想は、時々刻々、擴大せられて行かねばならぬ。萬一理想の進步が止まれば、吾々の發達は止まるのである、理想の光りを失へば吾々は滅亡するのである。もしこの活躍たる理想の光りに生きたならば、其知識は非常なる勢を以て活用せられ、其品性は驚くべき感化力を以て、社會を向上せしむるであらう。この力さへあれば、吾が日本の現在の狀態の如きも、決して憂ふるに足らぬ。實に潛んで居る將來の國力は計り知る事が出來るのである。

青年に斯の如き理想を養ふ事は、實に今後の敎育に須たねばならぬ。其理想は如何にして求むべきであ

生存競爭と相互扶持の法則。

らうか。吾々は人類の經驗し能ふ最上のものを求めん事を希望する時、先づ廣く世界に知識を求め、且大勢を讀まねばならぬ。

かのダウヰンが生物の進化は生存競爭によりて起るものなる事を發見してより、久しく其說は信じられて居つた。然るに近來の生物學者の發見によると、生物の進化は、生存競爭にもよるが、また相互扶持の法則（The low of mutual aid）によると云ふ事が見出された。この法則は人間にも本能として働いて居るが、殊に文明と共に、この力は著しく顯はれて來るので、近世の萬國平和會議とか、國際法とかの成立は、其の思想の產物である。勿論一方には彌よ戰鬪準備を逞うして、破壞力を蓄へて居る。かれとこれとは如何にも矛盾して居るやうであるが、未だ宇宙が進化の道中にある現世界に於ては止むを得ぬのである。いつかはこの矛盾の調和を見る時があるであらう。この相互扶持の法則は世界を一家族の如くし、人類全體を愈よ完全に進めつゝ行かしむる水である。空氣である、光線である。人類の理想を作る哲學上に於ては、人道主義（ヒューマニズム）、實理主義（ポジティビーズム）が益々研究せられた結果、ゼームス、シラー等によつて主行主義（プラグマチズム）が唱へらるゝに至つた。これは人生に活用する目的の下に、慈母の如き態度を以て、あらゆる科學を統一し、確實なる知識と、寬大なる態度と、進んで止まぬ理想とを持たしむるものである。これが人間の本性たる相互扶持の目的を達せしめて、益々完全なる社會を實現せしむるものである。文學と科學、科學と哲學、哲學と宗教、若しくは宗教に於ても諸宗派互に破壞し合ふが如きは既に昔の事である。世界は今や凡てのものが相提携して、其短を補ひ、其長を延して、一大理想を構成せんとしつゝあるのである。

吾等は敢て主行主義者では無い。然し少くともこの世界の大勢を知り、この態度を持たしめたならば、現今青年の病弊たる唯物主義も改まるであらう、煩悶も消ゆるであらうと信ずる。否、この說以上の理想

が、我が識者間に見出されん事を希望する。また近き將來に必ず見出さるゝ事を信ずるのである。これ卽ち十年の豫言である。

時代の精神

時代の精神は社會一般の大勢なり。

讀めとは敢へて目に訴ふる意ではない、我れ〳〵の頭に、否、全精神に同化して、所謂、眞に理解して、我れ〳〵の人格とせよといふのである。

時代の精神は一二社會の指導者によつて生まるゝものではない。既に社會一般の大勢が其の傾向を生じ、少とも其の傾向たらんと要求する時、一二の先覺者が該博なる知識を以て、之れを科學的に證明して、社會に發表し、社會の傾向を指導し、或はその要求に應ずるのである故にこれ等先覺者の言は、社會一般の精神を代表したものと見ても差支へはない。

人若し計畫を立てんとする時に當り、時代の精神を知らなければ、恰も羅針なき航海の如く、五里霧中にさまよふであらう。我れ〳〵の理想も時代の精神によつて生きてくる、理想が生きて居るものゝ人世は實に希望洋々たるものである。

今日歐米の思想界には如何なる震動が起りつゝあるか、哲學も、科學も、文學も、宗教も、互に姉妹の如く相提携して、根本に於て調和し、人生の進歩に貢献する事を以て唯一の目的として居る。之れは哲學の新學說である主行主義がよく證明して居る。この主義は米國ではゼームス、デューエー等の學者によつて稱へられ、英國ではシエレー、伊太利ではバツピニといふやうな學者によつて主張されて居る。其の主義とする所は、凡て人生の經驗を基礎として理想をたて、この理想は悉く人世に活用せしむる目的をもつ

思想界の大なる統一。

て居る、而して慈母の如き態度を以て、あらゆる極端なる學派を調和して居るのみならず、科學と宗教、宗教と哲學、哲學と文學等、あらゆる思想をも統一し、確實なる知識と、寛大なる態度と、進んで止まぬ理想とを持たしむるものである。從つてこの主行主義の思想は、國家、社會の文化の上に直ちに影響して、商工農業等に學理應用せられて、殖產の途は著しくあがり、其他凡ての科學の上に世界の平和に人類の幸福の上に或は人道の上に、莫大の利益を及ぼしつゝあるのである。

即ち從來の科學は眞理の爲めに眞理を研究するので極めて無味乾燥であつたが、今日は人生に直接應用せんとの目的を以つて學理を究めるのであるから、その興味は津々として盡きない。例へば近頃米國で開かれた萬國動物學會の如きは、萬國から一流の學者が凡そ六百人も寄つた。歐米社會の學理應用は、實に非常なる勢力であつて、着々効果を納めつゝある。ワシントン州一州で、動植物學理應用の爲め丈けでも一年、一千萬圓は、費されて居る、然しその金は殆んど事業に投資すると同じ事であつて、殖產の上に直樣幾倍かの利益を齎らすのである。日本の蠶業の如き既に大に研究せられて、彼の地で桑を仕立つる事を試みつゝありと云ひ、樟腦の如きも之れ迄は出來なかつたのであるが、近來は盛んに栽培して、その上、葉からでも、木からでも、根からでも取る事を研究した。橄欖の如きも之れを培養する方法が研究せられた。斯くの如く萬國にあるものを研究して、直ちに之れを自國の殖產の上に應用する。蟲害の如きも撲滅の方法も講ぜられて、その損害は救はれつゝある。また國力の發展に必要なる殖民の第一の敵である病氣も、之れを打ち破らんと研究した結果、凡て動物から來るといふ事が分つた。地中海の或島の如き半數以上は常に病人であつたが、其の原因は山羊の乳にあると云ふことが分つて、救濟の道は企てられて居る。また或る島の如きは、蚊が風土病の原因であると云ふ事が明らかになつて、それが撲滅せられ、その風土

病は跡を絶つたといふ。斯くして殖民事業は成功して居る。米國の富は今や學術應用によつて、益々膨脹するのみである。科學が殖産の上に直接斯くの如き大關係を有する事は、日本等の夢にも及ばぬ事である。

其他生物學でも、從來はダウヰンによつて見出された生存競爭を以て、進化の法則として居つたが、今日は新らたに相互扶持の方則（The low of mutual aid）が其の本性にある事を見出され、從つて社會もまた利己では通過する事が出來ず、他愛主義によつて、互いに相扶持せられなければならぬと云ふ事が明かにされた。

教育は如何であらうか、實驗を尊び、從つて境遇に重き置くやうになつたる卽ち社會的境遇を與へて、凡て實驗しつゝ正確なる知識を養ひ、活用力を持たしむる事に務めつゝある。

文學も亦空想を喜ばず。

文學の如きもまた大に其の影響を蒙つて、空想を喜ばず、客觀によつて、實際の經驗或は實際の成行きを寫す事に務め、凡て實感を尊ぶに至り次第に社會的興味をも加へんとしつゝある。自然派の如きは、我が國現今の文學界には、多少曲解して行はれて居るが、歐米に於て行はるゝ眞正の意味から見れば文學が主行主義を加味して來つた傾向があるまいかと思ふ。

顧みて我が現狀を見れば、誰れか慨嘆せずに居られやうぞ、未だ科學と哲學、哲學と宗教とは相容れないのみならず、科學には高尙の理想なく、實際の應用なく、無味乾燥である。哲學、宗教は幾分か他より早く主行主義をうけんとする傾きがあるが、未だ全く覺醒したとは云へぬ。教育の如きも亦た其の宿弊甚だしく形式を非常に重んじ、學問の動機は試驗の成績にあるのである。社會の理想を養ふ文學は如何であらうか、風教に害あるものにあらざれば陳腐極まるものが多い。而して之れ等凡ての學問に一つの統一な

教育と體育

く、調和なく、活用の見るべきものがないので、社會の思想は腐敗に傾き、殖産は疲弊せざらんとするとも能はざるものである。今にして氣付かずして、どうしてか世界の強大國たる面目を保つ事が出來やう。過去の失敗は敢へて追う事を好まぬ吾人は年と共に大いに學醒して時代の精神を讀み、世界的大思潮に觸れて、以て根本からの改革を促さなくてはならぬ。我が國民には最も實行力が缺けて居る。主行主義等もその學說は既に三四年前に輸入して居るが、社會に何の反響もないと云ふのは、畢竟實行が缺けて居るからである。否、其の主義の實際を讀む事、卽ち同化する事が出來ないからである。我れ〳〵は今日只今よりその宿弊を改めて、知行一致を期し、時代の精神を讀んで、一大理想を構成し、之れを實現するに勇往邁進せねばならぬ。

體育の奬勵

今の教育にして若し體育に根據を置かなければ、それは無効となるか或は病的に陷る事は、敢て說明を要せざることである。故に教育を進めて行かうとするには、先づ體育から始めなければならない。實に體育は如何なる學校、如何なる國家に於いても必要であつて、卽ち德育、智育、美育を重んずるものは、必ず體育を忽にしてゐない事は、歷史の上、或は各國の事實に照しても、誤らざる眞理である。今日の世界文明の源泉をなせるグリーキは、その昔、極めて、美育が發達して、武育を重んじ、哲學、科學の最も早く發達した國であつたが、就中、其の體育に於て名高かつたのである。希臘の體育は一つの科學で、希臘の都會の一大中心は、實に體育場であつた。苟も希臘人の集まつて村落をなす處に體育場を見ないことはなく、靑年は最も多く此處に集合して、獨り身體の鍛練を計るばかりでなく、智育、德育、一切の教場は

體育によつて養成せられたる武士道。

此處に在つたのである。卽ち大政治家、大教育家は此處に來り、大哲學者は此處を訪れて、青年を誘導し感化し、教訓することに盡力したのである。實に其の當時に於ける希臘教育の運命は體育であつたと云ふても、過言ではないだらう。また西洋史を繙くものゝ必ず記憶すべき希臘の美術は、その美の標準も體育であつて、卽ち體育によつて最も發達し、平均し、調和し、完備したる體格をうつした處の模像は、今日迄も美術の本源と尊ばれてゐる。そしてまた彼のアデンス・スパルタの武勇は言ふ迄もなく、其の體育の產んだものであつて恰かも我國武士道の柔術劍術等の體育によつて養成せられた所が多いのとよく相似てゐる。これ等は何れも過去の歷史に屬してゐるが、今日文明國と稱せらるゝ歐米の教育に於ても、體育が基として、大なる効果をあげつゝあることは疑ふべからざる事實である。殊に米國の女子が極端なる迄發達を遂げて居るのは全く體育を重んじた結果である。米國のスミス氏は女子高等教育の弊害を嚴酷に批評してゐるが、もとより米國の教育も、未だ完全なものと言ふ事は出來ない。然しながら始めより男子は男子らしく、女子は女子らしく、教育する事を決して忘れては居らない。それは彼の國の高等教育を受けた多くの人物に徵して明かである。よし高等教育を受けた女子に對して批難の聲が高いとしても、若しそれらの人が教育せられなかつたならば、批難の聲は一層甚しかつたかも知れない。殊に女子の高等教育が生產力を減殺すとの議論は、精密な調査研究を經なければ、早計に判斷し能ふべきものでない、しかも女子高等教育は體育に基を置いて居るのであるから、却つて其の體力は著しく一般に增進して居るのである。スミス氏の議論、必ずしも當を得てゐるとは云はれないのである。

顧みれば我國に行はるゝ體育の多くは、模倣體育である。例せば、かの普通體操はスエーデン、獨逸の體操式を混じて出來てゐるが、これが果して我國民に適切であるか何うかは、研究を要する問題であるま

自ら研究する力なき人。

いか。何故とならば、是は未だ人種に就き體格に就きて深く調査研究を遂げて適當なものと認めたのではないのである。その體育の種類としては、我國固有のものもあり、瑞典式、獨逸式、希臘式、園藝や牧畜なども目下の體育の種類である。

今、體育と言ふことになると、世界に大醫がゐる。專門家がゐるのと、一般の人の體育の研究する云々は容易ならぬものと、否定する人もあるとすれば、一般の他の學問なども是と同じく、畢竟學問は學者に學ぶものであつて宗教は單に信仰箇條を信じて、精神も、行ひも、信仰も、進歩發達すべきものと思惟するやうになる。かゝる國民は、昔も今も、決して進歩發達するものでなかつた。或意味より言へば、世界には、學者がある。專門家がある。自ら研究する力なき人は、如何なる大家の說を聞いて、專門家に學ぶことがあつても、只だ學說を覺え、技術を習ふに止まつて、我には何の効果も認めなからう。是が多くの人の誤解してゐる一つである。

また第二の誤りと言ふべきものは、萬能藥を信ずる事である。例へば菜食說を主張するものがある。肉食說を是とするものがある。或は藥を以て治療するものがある。マツサージ、オステオパセを以て藥に代ゆるものがある。各人が己れの信ずる方法によつて、如何なる人、如何なる場合にも、全く此の方法を施すのである。是等は皆衛生體育を研究することの能はざるもので、是を信ずる者は、多くの場合、誤りないとは言はれない、何事も實驗し、研究した後で、適當であることを證するものでなければ信ずるに足るものでない、されば體育の研究も、古來の生理衛生の原理は學び、大家專門家の說は聞ても、自らの身體を知り、之を支配するの能力が必要である。西洋の諺に「人、四十歲に達すれば、醫者が馬鹿となる」と言ふてある。人が四十歲にもなれば、誰しも自らの身體を知つて來て、自ら醫者ともなれば、看護者とも

なる。然る能力のない者は、之を愚者と呼ぶ處、致方のないのである。今後女子の責任は最も重く、家庭に向ひ、國家に向ひ、內顧の患の無いやうにするには、實に其の健康を求むる事である。斯の健康を得んゐめには、最も適當なる自己の醫師ともなり、看護者ともなるばかりでなく、女子が主婦となりては、一家の爲め、教師となりては、學校の爲めに最も好き醫者や看護者となりて發展し往くものであらう。

自ら知らざるものは愚者なり。

文藝の力

文藝も亦實利の爲めなり。

我等は科學によつて智識の關係を調べ、哲學により之れを統一して理想を作り、之を實現するに於ては、知行の二を以て人生の目的を貫徹しうるやうに考へてゐるが實際は之等二者の中間にあつて、其の働らきを完全にする所のものがある。これ卽ち文藝の力である。然らば、文藝も亦實利の爲めに行ふべきものかとの疑ひもあらうが、こは此處に論ずる限りでない。世人往々文藝等に力を費すは、有益なる時間と勞力とを無にする如く考へてゐるが、是は實に人生の一大要素を疎かにしてゐるものと云ふべきである。

文藝の起源は元遊戯にある。女兒が餘念もなく飯事をして遊び、男兒が嬉々として戰爭事をまねぶは、みな一種の文藝である。のみならず、狗兒が互ひに戯れ合ひ、小鳥の枝にさへづるも、亦文藝であつて、生物は凡て文藝を營む本能があると言つてよい。元來本能は何が爲めに人生に必要なるかと云ふことは、これを哲學上の問題に讓るが獨逸の文豪シルレルが「遊戯は生物の勢力過剩より發する活動なり」と言つた如く、活力盛なる兒童と青年とは、遊戯の本能が最も强い。これ單に兒童及び青年時代に於てのみでなく、人は生涯を通じて其の本能を失はないのである。

彼の有名な兒童教育者フレーベルは、「遊戯は人生の雛形なり、兒童の遊戯は凡て從來の生活の萠芽な

奮闘する準備。

調和の美。

社會が婦人に對する思想。

り」との信念に基いて、其の教育法を編成した。宜なる哉女兒が遊戯に飯事を行ふは、やがて成長の後一家の主婦となつて、庖厨を司る自然の準備となり、男兒が戰爭して戯るは、實に將來世界の競爭場裡に立つて、奮闘するの準備となるのである。獨り兒童の遊戯が將來の實社會に活動するの準備を爲すのみでなく、人の知識をやがて實行に導くものは、遊戯の力である。文藝の力である。卽ち人の思想、感情より發したものが假說となり、先づ幾度か遊戯となつて、其の準備を整へ、そして後に實行にあらはれて來る。例へば發明家が一物を實成するに至る迄には、幾度か其の理想を假說しては之れを繪に書き、玩具に作る等、所謂遊戯して以つて其の關聯を工夫し、終に天晴、實物を作り出すやうになるのである。

猶ほ文藝か知行の間にあつて、人生の一大要素をなす爲めに必要なばかりでなく、凡て人の思想、感情より發した假說を表出する事は、娛樂となると共に、心身の休養を計り、其の健康を增進せしむる爲めに、或は其の精力を養ふ爲めに缺くべからざるものである。而して此の文藝あるが爲めに、人生に趣味があり、調和の美があつて、以て人生は其の目的に向つて、邁進することの出來る熱烈なる生命を喚起せしむるやうになることは、何人も經驗する所であらう。

今の婦德

婦人の覺醒からして興つた希臘や、婦人の墮落からして亡びた羅馬の昔は暫く措いて、現代の歐米諸國が今日ある所以のものは實に婦人の自覺と、一般社會の婦人に對する思想の進んだのに基づいて居ることは疑ふ可らざる事實である。國民の一半である所の婦人の價値を認めず之を尊敬しないといふことは卽ち民衆の一半の存在を忘れて居るに外ならない。近來我が國に於ても漸く婦人の價値を認める傾向を生じて

來て、第二國民の教養を双肩に負ふ母たる者の重任を自覺するに至つたのは、慶すべきことであるが、國民の重要なる一部としての婦人の價値に着眼して、眞面目に婦人問題を研究するの風に乏しいのは嘆はしい次第と思ふ。見よ、世の中にはハイカラとか、何式部とかいふ、嘲笑的侮蔑的の語調が一般に流行して居るではないか。そして女生に對する適當な評論と親切な奬勵の聲を聞くことは甚だ稀である。悲しむべき事實ではないか。新興國としての日本は、今後世界の進歩に遲るゝことなく、克く其競爭場裡に馳驅すべき責任を有してゐる。其の競爭場裡の半身としての婦人、責任重き婦人の地位を閑却して顧みないのは、獨り女子の爲めのみならず、眞に國家の爲にも憂ふべき現象と言はねばならぬ。然し此の罪は全然社會に歸すべきものではなく、婦人自身の肩にも大にかゝつてゐるのである。我國現代の婦人は徒らに華美を慕ひ、虛榮を喜び、家庭に在りては夫に依賴し、要求し、消費することより外、一家の生產に與りて之に協力扶助するの術をしらない。其の念に乏しい。一家庭の事に對してすらなほかつ然り、況んや國家の殖產經濟の如き問題に對しては、全く風馬牛で國民の一部たる覺悟なぞは殆んどない、婦人自身が斯く自重の念に乏しいのであるから、他の之を侮るのは當然であつて、今日社會が婦人に對しての嘲笑的風潮を咎むべき資格はないのである。實に今日は婦人自身が深く內に顧みて大に決心すべき時であることを、切に感ずるのである。

國民の一部としての覺悟。

殊に此の際教育ある婦人が今少しく眞面目な態度を以て、國民として、人として、また、弘き意味における賢母良妻として、自己の責任を認識して、其の自覺を確實にし之を實現することに努力して、熱心に修養を積み、知識を開拓しなければならない、斯くして堅實な婦德を養ふてこそ、初めて國家の重要な要素としての價値を一般に認めらるゝことが出來る。

稱すべき米國の庶民教育。

吾々は歐米の家庭到る所にラハエルの聖母マリヤの畫像の掲けてあるのを見た、單に名畫の故のみをもつてこれを賞稱して居るのではない。理想の母として、恩愛、慈悲、優美、崇高の模型として、これを尊敬し、賞揚して居るのである。そしてこれを詩に文章に美術に現はしてゐる。これによつていかに婦人の淑德神聖なることが家庭及び社會の人々に尊重敬愛せられて居るかを思ふのである。そして歐米今日の興盛を來した原因もたしかにこゝに存するを思ふのである。吾々は茲に所謂歐米流の女子教育を主張するのでは決してない。我國民の一半が眞に其値價を認識し其の責任を自覺し、覺醒して起つのでなければ、國運の隆盛、進歩は望みうべからざることであると信ずる。余は婦人が深思して新興日本婦人としての責任を自覺せんことを切望するのである。

米人の長所

米國では庶民の教育が何の教育よりも重要であるとしてゐる。英國の教育はどちらかと云へば、貴族、金持、學者等の專有に傾き易い。もとより英國にも、庶民の教育として、國民教育の制はあれど、米國は單に庶民の義務教育ばかりでなく、進んで高等教育、高等專門教育をも授くるのである。所謂高等教育を一般の庶民に普及する方針である。さればインデヤン、移住民等、最も下層に屬してゐるものは他國は少しも顧みないのである。唯り米國は斯るものを教育し、假令、白痴でも、不具者でも凡て教育の恩惠を熱心に與へるのである。誠に此の點は米國教育の特色で、米國人は教育を呼んで、心の巡査といふてゐる、巡査は人の犯罪を少なくするための護衛であつて見れば、心の惡を少なくする巡査は教育である、米國人が庶民に高等の教育を授けて、莫大な金圓を費すのは、一見、不利益のやうであるが結局は利益である。

自活の道を知らざるを防ぐ。

巡査、監獄に要する費用を以て教育に投ずるのである。國民の罪惡を未發に消滅せしむる用に辨ずるのである。

畢竟教育を庶民に施すと云ふ事は、國民を高尚にし、國家の經濟である。何となれば、教育なきものは、自活の道を知らない、感化院、監獄の御厄介となる、國費を食ひつぶし、或は國家は種々の犯罪を防ぐために、多くの巡査に俸給を拂つてゐる。斯の費用は教育に費するよりも一層巨額にのぼるのである。實に合衆國では教育は國家の基礎を固め、國家の經濟力となるものと思惟するのである。ルーズベルト氏曰はく、「教育は國民を作れりとはなす能はざるや知る可らずと雖も若し國民にして教育を缺かば其の國は終に滅亡を免かれず」と。

米國人は全然、實業上より見ても、教育の爲めに金を用ふるは、恰かも國家の將來の爲めに、資本を出すやうなものである、と考へてゐる。之に就て、ミスタードージーが、千九百三年十二月に、米國機械工學會で、專門教育の價値につき、演説したのである。氏は各種の職業者を大別して四種とし其の進歩の程度を示された、卽ち

一、習練なき勞働者
二、從弟上りの勞働者
三、職業學校出身者
四、高等專門學校の出身者

第一種の習練なき勞働者は、其の最高の進歩の度最も低くゝ、これに達することも最も容易である。その進歩の止まることも、最も早いのである。第二の徒弟上りの勞働者は、年齡十六才に達する時、平均一

英米富豪の金錢の使用法に就て。

週間に三弗を取る、一年を凡そ五十週とすれば、その總額百五十弗である、これを財産の利子、五朱と見積れば、彼の財産力は三千弗となる。故に第一種のものに比するに、その賃錢の最高の點、稍高くなつてゐる。また進歩も早いのである。第三の職業學校出身者は、三ケ年の職業教育を受け、十九才の年卒業し、直ちに職につき、始めより一週十二弗、卽ち從弟上りの勞働者が二十一才の時に得るものと同じである、そして二十五才に達しては、一週間に二十二弗に增加する割合となつてゐる。

第四種に屬する者は、十八才迄は普通教育を受け二十二才迄高等專門教育を受け、卒業後、直ちに職業につき、始めの俸給は一週間十三弗で、是を同年輩の職業學校出身者に比較すると、五弗少ない、然し二十五才（三ケ年迄）に達すると兩者の收入、相等しい、その後は兩者の間、非常な懸隔がある。卽ち職業學校出身者は、間もなく進歩が止まる、高等專門學校出身の者は、その後の進歩著しく昇進して往くのである。

次に留意すべきことは、英米富豪の金錢使用法である。見よ、英の富豪は、種々な遊興に莫大な金錢を費して誇とするけれども米の富豪は、教育事業に資金を捧ぐる事を好き考としてゐる。また土地を開發し産業を起し人類無き原野を開拓するを、無上の價値としてゐる。人は呼んで、米人を物質的國民と言ふけれども、是は皮相の觀察であらう。かゝる批評は物質的（マテリヤチック）と大望（アンビッション）の區別を辨へぬからである、物質的と大望とは、一見相似てゐるやうだが、其實地球の兩極の相離るゝも同然で、一つは惡で、一つは德である。卽ち米國人は大望の人で物質的の人でない、その大望とは熱心に個人の向上を計る大望を抱くばかりでなく、また國民を高め、文明の增進を欲する凡ての努力を惜まない言葉である。

また米國人は金の外には貴族がないと聞たが、是も皮想の觀である。一層深く其の眞想を探て見ると、

米國の富豪、卽ち貴族は、己れの手腕、腦力を以て成功し、親の財産を相續したものは少ないのである。

食物と文明

食物は生活の第一位なり。

或る有力な歴史家は「國民の歴史によりて、其の國民の食物を研究することを得」と迄、極論して居る。畢竟、食物は生活問題の第一に位すべきもので、生活問題は人生問題の最初に起るべきものである。而して人生問題が經緯をなせば、卽ち歴史であるのを見れば、これ決して不當の言ではないのである。又た他の一方面より見れば歴史は人の活劇を寫したものに過ぎぬので、其の根元は人間の生活狀態如何にある。人は身體と精神とを有して居る。心身の關係は哲學上の大問題であろうが、吾々が知れぬ事實では、心身は極めて密接の關係を有して、二にして一、一にして二である。されば身體を養ふ食物は、また精神に大關係あるべきは明らかである。こゝに少しく心身の關係に就いて例を擧ぐれば、人が物を感じ、考へ、決斷するに於いては、精神の健全、完全、快濶なる事を欲するには、身體といふ境遇によらなければならぬ。尙細かき事を云へば頭の鈍きと否とは腦髓を組織する細胞の接觸作用の遲速によるので、換言すれば、人の賢愚は腦髓の組織如何にある、所謂生理上に起因するのである、この生理上、死活の權を握つて居るものは實に食物であるのであるから、食物問題は決して輕々に看過すべきものではない。

完全なる食物は何か。

然らばこゝに完全なる食物は何かと問へば、學者によりて調らべられた保健食料に適ふた食物だと申すものがあるであらう。然しながら人は各、遺傳を異にし、體質を異にし、境遇を異にし、職業を異にし、從つて嗜好をも異にして居るもので、實際、完全なる食物は、その人に適合したものでなければならない。この適合したる食物は人々に依つて研究せねばならぬので、醫學博士でも知る所は無いのである。こ

れ實に家庭を掌る主婦の研究するべき問題であつて、常々云ふ如く、研究は學者、專門家のみの專有では無くして、一般の人が、一般の事に向つてなすべき事である。まして女子と研究とは殆ど相容れられぬものゝ様に考へられた結果、家庭は暗夜である。而して人々の生活は暗夜の突進とも云ふべく、障害物がなければ僥倖といふ外はない、極めて不安のものである。

それで今日世界の食物を論ずるものを見れば、西洋には菜食論者勃興し、東洋には肉食論が流行する、果して何れが適當であるかといふことは、研究すべき問題である。雲照、トルストイ、エヂソン等は、菜食を主張し、自らも菜食して毫も衰へざるのみか、その勢力は却て肉食せる者に數倍して居る。然しこれを以て直ちに菜食を可とすべきであろうか。雲照、トルストイ、エヂソンは肉食せぬかもしれぬが、其父、母祖先が果して肉食せなんだであろうか。これは疑問であるので、決して一代一人の食物を見て、是非を論ぜられぬのである。即ち歴史的に研究する必要があるのである、然し各國の歴史上、各人種の人類學上より研究したる結果、不完全と認めらるゝ食物は如何なるものかといへば、

菜食と肉食の比較研究。

(一)不充分なる食物である。例へばラツプス(ノールエーの北部)、歐洲中央の山國に住める人種、亞非利加の一部に住める人種の如きは、土地柄は寒帶、或は熱帶に屬して居らぬけれど、交通の便を缺いて居るので、國民は食物を充分に得ることが出來ぬ。故にこれ等の國民は身體矮小、不具、不健康なるものが多い。

不健康なる住民。

(二)不適當なる食物。不適當とは種類の缺乏である。吾人の身體の組織、幷に習慣は食物の種類を要する雜食動物である。もし單純のものを食すれば癈疾となるのである。人類學上より云へば、單食の人種、例へばカアサシーバアと稱する人種の如きは、植物の根、米、芋、等のみを食して居る爲めに四圍の境遇

に抵抗する力を失ひ、身體の一部分の供給行はるゝのみで、腦細胞の發育惡しく、次第に進化力を減ずるに至るとの事である。されば身體を完全に發育せしめんには、食物に於ても極端に走らず、調和して多くの種類を用ゆべきであると。

また或歴史家は曰く、國民が健全なるものとして其の歴史を見るは誤りなりと云つて居る。眞に心身は密接の關係を有して居のであるからして、其の國民を改良せんとならば、先づ其の食物を改良せなければならぬ。

野蠻人は調理法を缺く。

(三)不適當なる調理法もまた、食物を不完全ならしむるものである。元來適當なる調理は、一つの技術であつて、これによりて國民の文明の程度を計ることを得るのである。然し如何なる野蠻人といへども調理法を知らぬものはないのである。例へばエスキモーの如きも肉を氷らして食し、ダッタシ人は鞍下に肉を厭して食して居る。如何なる巧妙な調理法といへども、始終、同じ事を繰り返へし、また病人にも同じ調理法を用ひ、或は宴會の調理を常不斷用ゆるが如きに至つては不適當といはねばならぬ。

この不充分、不適當なる調理法等に注意して只學理的に研究するのみならず、實際、常識、發明に訴へて、作り出したる食物を以て、吾人は完全なる食物と呼ばんとするのである、この完全なる食物を供給し得る國民は卽ち進步したる國民と云ふことが出來ると思ふ、斯の如きの食物と文明とは密接なる關係を有して居るもので、これは家庭に於ける婦人の研究に俟つべきものが多大である、そは論を要しないと思ふ。

國家的要求。

こゝに大學擴張といふのは、此の女子大學の校舍とか設備とかを擴張する意味ではなく、女子大學の教育を社會的に擴張する意味である。英語のユニヴアーシテー、エキステンシヨンとか、或はカレツヂ、セトルメントといふ意味に當るが、それとも全然同じではない。つまり我々のいふ大學擴張とは、現時の我が國の狀勢よりしての國家的要求に應じ、又國民一般の知識的要求に從つて、各自の家庭に、或は學校にあらゆる方面に於て、活動する樣に圖る事で、換言すれば女子大學內の教育を更に社會の上に擴張せしめんとするものである。其の目的とする處は、人々の自奮自修の精神を鼓舞し、事情の爲め高等教育を受くることの出來ない人々にも僅かの暇を利用して各々の必要なる知識を收得する便を得しめ、組織的研究を行はしめて限りなき進歩をなさしめ、國家社會の發展を圖ると共に、個人の幸福を增進する樣にするのである。

今日我が國が、東洋の中心點東洋の代表者として、世界の注目の的となり、我が國の進退が世界の平和東洋の安寧に、多大の影響を及ぼすと云ふ事は、誰もよく知る所である、而して斯く世界に大なる關係をもてる我國の現狀は如何であるか、四十年以前に比すれば商工業も、農業も其の他教育技藝も、長足の進歩を遂げたには相違ないが、まだ〳〵幼稚で、世界の舞臺に立つて誇るに足るものは少ない。然しそれ等はまだ其の進歩の著しい方で、國家の基礎たる家庭の生活に至つては、其の進歩の事實を見出すに苦むのである。夫れと云ふのは、我が國の婦人は餘り社會の潮流に接する事がないから、社會の狀勢は勿論自己の責任か那邊にあるかと云ふ事が解らず、隨つて其の實現であるべき家庭の進歩も見られないのである。然しそれは婦人其のものゝ罪ではなく、周圍の事情が然らしめたのである。

歐米諸國に於ても同じことで、今より二百年以前にあつては、貴族とか僧侶役人等の外は教育の必要は

國民の向上心を失ふ。

ないと思はれて、農夫や勞働者婦人の如きは教育を受ける事が出來なかつたのである。然るに、社會の進歩に伴れて國民の權利義務も加はり、此の權利義務を全うせしむるには一般國民に知識を附與する必要が認められ、又一方には國民の向上心と知識の要求が旺になつた爲め、從來の如く教育は一部分に止まらず一般國民にも必要なことを、認めらるゝに至つたのである。つまり、學校で學んだ知識を實際に活用させて、學校で訓練された精神的生命を限りなく生長させるのは、卒業後の各自の事業であるとの意味である。

然しながら、學生がその母校の溫い空氣から遠ざかつて、全然異なつた雰圍氣の中に身を投じ、そこに新しい空氣を作り出すといふことは實に困難なことで、少しでも心を弛めるならば忽ち境遇に制伏せられる。その原因は何であるかを考ふるに、今私は主なる原因は養分の不足ということにあると思ふ。

人は、身體に新陳代謝が行はれてをるやうに、精神も亦常に一定のところに止つてをるものではない、絶えず十分の養分を與へなければ吾々の精神は進歩しないのみならず、今日の熱心をも持ち續けることが出來なくなる。今日、我が國の婦人が、多くは無智無能だと言はれるのも不思議はない、當然の結果である、かの進歩的國民といはれる米國人でも、學校を出てから、自分の頭腦を養ふことに努めなかつたならば、決してあの樣に進歩することはできまい。大學擴張の目的の一つは、學校以外の婦人に精神的の養分を與へ、家庭にも社會にも大學生活を普及することである。

婦人が研究的に高い學問をすると、知識ばかりあつて常識に缺けた、妻として母として役に立たぬ婦人となりはせぬかと心配をするものがあるかも知れないが、吾々の目的は、頭腦と心と手と相共に働く婦人、換言すれば、婦人らしい德と智慧と實行の力とが備はる樣に教育することである。決して偏俠な人を

品性の修養。

婦人の常識の養成。

作る憂はないのである。

高等女學校を終わつて我が女子大學校に入る女子は大抵十七八歳で、我が校を卒業するのは二十歳若くは二十一歳が普通である。この十七歳から二十歳頃までは、生涯の中で最も心身の發達が著しい時代であるから、知識を授くるのみならず品性の修養を基礎とせなければならぬ。で、我が校に於ては、この三ケ年間に、品性を作るのを目的とする普通教育と、高尚なる學術を授くる專門教育とを兼ね授けなくてはならぬ。といふのは、男子ならば、偏俠なる技術家になつても、專門的な學者になつても、今日ではまだ何かに用ゐられてゐるが、若し婦人がこんなであつたならどうだろう、實にその人の不幸である。國家の不幸である。婦人は職業を取つて何かの役に立てば、それで濟むといふものではない。一家の主婦となつて家族の幸福を計らなければならぬ。國民の母となつてその子女の教養を司らなければならぬ。これは知識のみではいけない、圓滿なる人格でなければならぬ。

けれども、三ケ年の間に、人格の陶冶と專門教育とを十分になし遂げることはどうも無理である。のみならず、各個人の特徴を現す專門的教育卽ち眞の大學教育は二十歳から二十五歳までが最もよい時期なのであるから、多くの婦人が、家庭にあつて空費する時間を利用して、大學教育の足らない所を補はうとするのが、吾々の大學擴張の目的の一つである。我が國の婦人は、家庭に入ると實に多忙で讀書の暇もないといふ人が多いが、其の實無益な雜話、有害な娯樂などに時間を浪費する事が少なくないと思ふ。

婦人の常識の養成につき。婦德の涵養は素より重ずべきであるが、これと共に、學術を究めることによつて、進んだ思想界の潮流に觸れることのできるやうに、婦人の頭腦を廣く深く開拓して行かなくてはならぬ。婦人に專門的知識、深い思想は不必要である、常識があつて、家族に衣食住について不愉快を感じ

させない丈けで十分であるといふ人がある。この說は尤もらしく聞える爲に人を迷すこともあるが、よく考へて見れば決して眞理ではない。今の世界の文明はどうして進歩してきたか、宗教でも科學でも道德でも藝術でも何によつて進んだかといふに、その原因は主として人の頭腦の進歩、思想の發達に基ゐてをるのである。何れの時代に於ても、人間の運命はその思想によつて作られ、國家の運命も亦國民の頭腦によつて左右せられてをる。わが國の婦人が進歩しないのは、知識がなく、思想が淺薄だからで、婦人を今の哀れな境遇から救ひ出すには、まづ婦人そのものゝ頭腦を開拓するのが根本問題である。深い複雜な學術を究むるのは、興味もあるが又實に苦しい、難しい。もし單純な迷信でもつて世界の文明に後れずに行くことができるならば、誰が好んで難きに行かう。が、今の世にあつては、婦人と雖も單純な常識一遍では大勢と共に進むことはできない。苦しくても面倒でも知識を廣く世界に求めて最も進んだ潮流に觸れて行かなくては一家を幸福にすることも、自分を生存せしむることも出來ないのである。常識は素より婦人に必要であるが、同時に頭腦を限りなく開拓して行くやうに力めるといふことが大學擴張の目的の一つである。

歐米に於ける大學擴張の機關。

さて歐米に於ける大學擴張の機關として、第一に行はれたのは、巡回講義である。英の劍橋（ケンブリッヂ）大學がこれを始めた時には、まださびしいものであつたが、その後二十二ケ年ばかりの間に非常の勢で發達して、各大學は百ケ所內外の場所を受持ち、聽講生の數も五萬人近くなつてをる、更に之が土臺となつて、通俗講義なども行はれて來た。

男子にも女子にも、善き書物は精神の糧であり、知識の鍵であるが、殊に家庭に這入つて直接社會の活きた刺戟を受ける機會の少ない女子には、最もよき激勵者であり、敎師であり、生涯離るべからざる親友

夏期學校。

である。然し我が國今日の生活程度では、必要な書物を悉く書齋に備へることはできない。だから、各々の買つた書物を持ちよつて巡回閲覧といふことにしたならば、大に便利なことであらうと思ふ。

また巡回器械といふことが歐米では行はれてをる。學術の研究に必要な器械標本、地圖掛圖等を科學的に分類しておいて、之を各地方の人々の要求に應じて貸し與へるのである。

また休暇中夏期學校は、到る處で科學的の知識を與へる目的でもつて短期の學校を開くのである。我國に於ても夏季學校が、近頃盛んになりつゝあるのはうれしい。我が女子大學も毎年輕井澤などに夏期學校を開くことにしてをる。講義錄は我が國に於ても、以前から行はれてをるが、英國に於て、千八百三十八年、大學生ばかりの小團體を作つて、極めて貧しい勞働者の集まつてをる場所に住んで周圍の人を教へ導くため、大學殖民を始めた、是は甘くやれば非常に効果の多いことゝ思ふ。

今日の我が國では、婦人と經濟との關係をそれほど密接なものと認めて居ない、婦人自らもさほど大切なものと自覺してをらない。この謬見が大に我が國社會萬般の發達を妨げ、婦人自身の進歩を阻害してをる。婦人にも身體がある、衣食住が必要である、そして國民の半數を占めてをる以上、片時も此の國家社會の經濟的關係を離れることはできない。經濟の要素は勞働と分配と消費とから成立つてをるが、婦人はこれらの要素に重大な關係を以てをるのである。一家の中で消費の方面に當つてをるものは重に婦人ではないか。而もその婦人に經濟的品性が出來てゐない爲に、無益に財を費して、一家の生活を困難に導くばかりでなく、延いて國家にも大害を與へるのである。我が國の輸入超過の額は年々多くなるが、其の輸入品中に贅澤品が非常に多い。この贅澤品を購求し消費するものは誰であるか、重に婦人である。男子が非常な苦心を以て作つた財産も、婦人の虚榮心の爲に、或は婦人が經濟について不注意である爲に、無益に

經濟的品性と一家の生活。

消費されて仕舞ふ場合は實に少なくない。今少し婦人に經濟的品性があつたならば、今日の我が國のやうに經濟上の強い壓迫は感じなかつたであらうと思ふ。

今日我が國の婦人が、悲慘なる運命に囚はれて、精神的の病人になつて、或は家庭の平和を保つ事が出來ず、自分の子も十分に教育することが出來ないといふやうな事が多いのは、畢竟經濟的品性の缺陷に基づく事が多いのである。故に今の我が國の婦人を窮境から救ふには、まづ此の婦人と經濟との關係を改善せねばならぬ。もし婦人と經濟との關係を改善するならば、その結果は我が女子教育の上にも大に進歩を來すのである。只今でも女學校の科目の中には數學もある、簿記もある、實業についての知識を與へる專門の學校もある。しかし、これらのことは形式に流れてゐて、習つても一向品性になつてゐない。一向活用されない。といふのは、婦人の心に經濟の頭が缺けてゐる。從つて何をやつても遊戯的になる、本氣でやらない、懸念にならないからである。婦人の仕事を遊戯の域から脱せしめることは、今の我が國に於ては最要の問題である。

國家の産業。

其處で婦人と經濟との關係を改善するにはどうすればよいか、第一に婦人がもう一層國家の産業に貢献するやうにならねばならぬ。今日でも婦人が生産に關係してをる。しかしそれは必要を認めて進んでするのではない、餘義なくされてやるといふ態度である。それだからその仕事が進歩しない。今後は婦人自身が積極的に興味を惹起して何か殖産の方面に力を致さねばならぬ。尤も婦人は男子の如く終日家庭を離れて職業を持つことは出來ないが、例へば、美術的手藝、農藝的副業の如きは、家事の餘暇を利用してやることができるのみならず、子女教養の上にも又自己の品性を高め知識を廣むる上にも極めて有益なことである。

個々の人間皆近眼なり。

併し、特に注意すべきは、いかに家庭的副業を熱心にやるにしても、それが個々の家庭で思ひ〳〵にやつて行くのでは有利なる効果を收めることができない、從つて折角始めても面倒くさくなつてやめてしまふといふやうになる。例へば鷄を飼ふにしても銘々の家で三羽四羽づゝ思ひ〳〵のやり方で飼ひ、出來た卵は家庭の料理に用ゐてしまふといふ風では、經濟上から云つても飼はぬよりは勝である、たゞ一種の道樂にやつて見るといふことに止つて、面倒くさくなるとつい止してしまうといふやうになる。從つて、國家の產業としての仕事にはならない。であるから、本氣になつて鷄を家庭で飼はうということになるなら、一町、一村の有志の婦人が申合して、產業組合といふやうなものを作り、資力を合わせて共同の孵卵器を買ひ、最も多く卵を產む、又は肉をもつ有利な鷄を此處で孵して分配する。その飼ひ方なども、研究して互ひの經驗を持寄つて交換する、出來た卵は集めてなるべく有利な方法を以て市場に出す。かういふ風にやつてこそ始めて文明的な產業といふことができるのである。

これは、養鷄ばかりではない、養蠶、養蜂、造花、刺繡その他の手藝、凡て同じく其の目的にやつて行くならば、その結果は益々有利となるが故に自然と進步發達して行くのである。

更に、共同購買組合を設けて安くてよい品物を買ふやうにすることが、信用組合を作つて相互の經濟上の便宜を計るとかいふやうなことは、すべて經濟關係を改善して行くことになるのである。而して斯の如き方法を實際に行はうとした例はこれまで隨分あつた。しかもその効果の見るべきものなくして中途で挫けてしまつたといふのは、つまりこれを組立てゝをる個々の人間が近眼であつたからであり、廣く大きく利益を得やうといふ觀念に乏しかつたからであらう。ことに婦人に廣い大きい頭腦がないので、手近な利にのみ眼をくれたからである。かやうな時に當つて、婦人の副業を有効ならしめ、家庭經濟の改善を計る

先驅となるべき使命をもつてをる者は誰であるか、高い識見を有する婦人ではないか、教育あり品性ある婦人ではないか。我々が大學擴張の主意は實に茲にあるので、婦人の知識の發達、頭腦の開拓、研究の奬勵、品性の修養、是等のものを一般婦人に普及せしめんとすることが目的となつて居るのである。

女性の愛

婦人は天使に比すべしとなり。

予は頃日女性に就て新らたに得たものがある。それは從來理想としては描いてゐたが實社會に見る事が出來ないかと疑がいの目を似つてゐたものである。卽ち女性の內に最も豊かに與へられてある愛情＝同情＝親切と言ふものに就ての話である。女性の愛を如何に感じ、又夫れが如何に顯るゝかと云ふ事は、常に吾々が書物の上に讀みもし、又世界の歷史の示す所であるが、西洋の書籍によると、婦人は天使に比すべしと云ひ、又有名なる社會學者カントの如きは、女性は恰かも神の如しと迄も讃めて居る。カントの所謂宗教史は愛卽ち犧牲の精神に基づくものであつて、其の高尙なる愛を有してゐる者は是れを神に比すべく、從つて宗教は婦人に由つて成立するものであると言つてゐる。然るに支那では女子と小人は養ひ難しと云ふ詞がある。ソクラテイースの如きも婦人の爲めには、いたく心を苦めたるを思へば、女性とは果して如何なる者であるか、これは一つの疑問である。

予が女子教育に身を捧げてから、予の經驗によつて見ると、女性の心は綿密なものであるが、猜疑の念の深いものである。子孫を愛する心はあるが、唯だ己れと云ふ事の爲めに支配せられ、己れの爲に要求したり、己れの天地に跼蹐するものである。故に多くの女性は世に出て大きく全體と共に結合し、人と共に事を爲すが如きは到底望むべくもない事であらう、女子には同情の涙は有るがそれは姑息である、虛飾で

社會の要素なるべき家庭。

本能的愛は動物にあり。

ある。一時的である。其時々の感情によつて動かされ、喜びもし、怒りもし、哀もし、樂もすると云ふ風である。女子は誠に賴むに足らざるものと言はねばならぬ。

併し乍ら社會の要素は家庭にあつて、家庭は婦人の王國である。故に先づ其の根本より匡正しなければ社會のあらゆる病源は到底其の跡を斷つべくもあらず、其の善にも强ければ惡にも强い女性の憐むべき缺點は、全く無智に歸因するものであるから、今、一層嚴重に是れを教育し、斯の傾向を矯めねばなるまいと信じて。卽ち予は其の教育の方針を改めて、大に理想を發展し、全體を統一する力を養はしむるに、學校の修身なども單に學說に由る事の無いやうに、實踐躬行を旨とし、しかも種々な學理を參考せしむるのである。然るに多年女子教育に從事し來れる予の今日、從來予が婦人を目せし經驗とは全く異つた特性の現れたといふのは何であらうか、それは卽ち從來の愛と言ふものは多く本能的のものであつた。此の本能的愛は動物に有るもので、子孫を保護する心より來てゐる。そして婦人は子供を持つ者であれば自ら慈愛の心の深いのは當然である、此の本能的の愛が有るが爲めに、利己に、姑息に、虛僞に、嫉妬に陷り易い、しかも一時的に熱情に偏するのである。斯の如きは唯だ情にのみに動ける愛の弊害で、教育の結果は必ず此の愛の擴大を遂げしむるものである。

其處で愛と言ふものは、全體と調和統一せる所の最も善、且つ美なるものとなつた。是は全く理性の發達した爲に、全體を統一して是れと融合した一人である事を自覺し、初めて、宗教的愛が現はれる。卽ち全體の中心に從つて全體の意志に合體して、其の一部分として人を見、己れを認め、以て其の全體の爲めに身命を捧ぐる事が出來る、斯うして宗教は婦人によつて成立したので、男子の遠く及ばぬ事が明らかである。

愛は無限の力なり。

ゲーテの金言。

此の姑息ならず、虚僞ならず、一時的ならざる愛、卽ち全體の爲め、人の爲めに喜びて仕ふる所の、全身愛に滿ちた不朽の生命、無限の力。此の力があつてこそ、人生に如何なる事をも貢献し得る、如何なる困難にも打ち勝つ事が出來る、卽ち女性が如何なる人をも感化し、如何なる弊風をも改善し得る所以であつて、其の無限の力を得むと欲する者は、先づ此の宗教的生命に觸れて、宇宙全體を融合するやうにしなければならぬと思ふ。

詩聖ゲーテは言つた。Live resolutely in the whole, in the good and in the beautiful.

と實に美しい詞であるまいか。全體の間に調和して偏せざる愛、是れ卽ち善である、美である。人生の幸福、最高の理想、是をおきて又何處に何を求むべきものがあらうか。斯の如きは吾々人間の本心に、等しく存する要求であつて、是を滿足せしむるは、又最も美なる事である。そして是を解しないのは理性の力の缺乏に基くもので、今の女子が是を解するやうに段々成て來たのは、また教育の賜ではあるまいか。今予は、磨けば金剛石にも勝る美はしい女子の特性あるを認める事が出來た。人の爲め世の爲め喜ぶべき音信と言ふてよからうと思ふ。

教育の目的。

高等教育と我國青年の目的。

第三　教育所見

余がとれる教育の主義方針

教育の目的は、最も大切なものである、若しも之れを誤まつたならば、其の學校で與へる所の知識も方法も、悉く無用に歸するのみならず、或は有害に陷るかも知れないのである。

それで殊に女子高等教育に對しては近來種々の議論があるが、私に於ては女子高等教育を以て女子に男子の如き學位を授け、或は男子の職業に立ち入らせ、或は男子と競爭せしめようと云ふ考へは毛頭ない。寧ろ斯くの如き考へには、大に反對の態度を取つて居るのみならず、今日我が國の教育が帝國大學を中心とするが爲めに起る弊害を改め、缺點を補ひたいと考へて居るのである。

抑も帝國大學の目的は何であるかと云へば、學理の蘊奥を究むる事、卽ち學術研究と云ふ事にあるのであります。併し乍ら實際は此の目的を以て大學に入る者は、極く少數である。我國青年男子の競ふて高等教育に進まんとする目的は、學理研究でもなければ、人格養成でもない。又眞理を愛する熱心でもなくして、只資格を得やう、卽ち官吏なり、會社の役員なりになる職業の特權を得やうと云ふのであるか、或は肩書きを得て、社會に地位を高めたいと云ふ虛榮心である。しかも其目的を達しやうとするものには、必ず試驗と云ふ關門を通らねばならぬ、其の試驗といふ關門を通るには、成るべく僅かなる時間に、成るべく多くの知識をつめ込まんければならないのである。天下の青年が其の目的を貫徹する爲めに、高等學

學生を奬勵する試驗。

校、大學に入らんとする者は、年々其の數を加へるのである。故に是れを制限するには、益々試驗を嚴重にし、其の結果、彼れ等の腦髓を弱め、彼れ等の能力を彌々淺薄にする弊に陷るのは、已むを得ぬ次第である。獨り大學に入るべき關門である高等學校のみならず、中學校も、小學校も、高等女學校も、其の他の私立學校も、其の目的とする所は資格を得ること、其の資格を得るに必要なる試驗に及第すること、其の試驗に必要なる點數を多く取ることである。

今日の學生を奬勵する唯一の方法は、此の試驗の點數であつて、點數に由つて學生の優劣を決するのである。そして學校から出た及第者の點數の比例に由つて、其の學校の價値を定めて居るのである。今日の教育は彼れ等の品性を作るのでもなく、彼れ等に確信を與ふるのでもなく、我が國家に必要なる人材を養成するのでもない、只試驗によりて學位を與へ、或は卒業證書を授くると云ふに過ぎないのである。學生が資格を目的として學問するのも、或は品性修養、學術研究を目的とするのも、左程違はない樣に考へられるけれども、實際は其の間に大なる差異がある。單に大學を卒業する事を目的として勉强する者と、志を立てゝ、生涯の目的の爲めに己れの品性を養ふ爲めに、眞理を愛して已まぬ爲めに、研究心を滿足せしめるために、或は內から起る興味を滿足せしむる爲めに、學問するのとは大なる差があるのである。既に其の動機に於て大差がある以上、其の結果に於ても必ず大差がなくてはならない。故に優等生として名譽の卒業をした者が必ずしも有爲の者ではない。高尙なる人物ではない。又は身體の健全な人でもなければ、意志の强固なるものでもない。却てさういふ人で教育家としても、實業家としても、役人としても、役に立たぬ、一向つまらぬと云ふ事を多く聞くばかりでなく、吾々も是れ迄、そう云ふ試驗を自ら經たのである。

米國に行はるゝ教育法。

私が女子高等教育を施す目的は、女子を人として、婦人として、國民として、完全な人格を養ふと云ふ事にあるので此の點に最も盡力して居るのである。であるから本校に於ては斯の目的の下に生徒を教導しつゝあるのであるが、是れ迄試驗を目的として進んで來た學生の心の習慣をこゝに改めやうとするのは一通りの困難ではない。

今日の教育の狀態を考へて見ると餘りに抽象的、主觀的であると思ふ。卽ち書物により或は講義により與へらるゝ知識に偏し過ぎて居るために、實地に疎くなつて常識に乏しくなつて來るといふ弊風があるから、一方に偏しない樣に、實地より、天然物より、實際の境遇より材料を採らす樣にしなければならぬ。

私が此の必要を切實に感じたのは、今より十數年前、アメリカに於て丁度其の頃に萠しのあつた紐育のテイチヤース、カレージ（師範大學）其の他の大學に行はれて居る所の教育法を見て、大に感ずる點があつた。何故そうかと言ふを、第一に私自身が幼少の時から受けた教育の大部分は、自然に負ふ所が多く、常に自然を友として遊び、自然を敵として戰ひ、山に入り、川に掉さし、海に泳いで、自分の欲するが儘に行動して育つた事は、自分の人格を作る上に非常に有益であるのである。そしてこれが又自分の方針を立つる上に、大關係を有する事を悟つた。後にギリシヤの教育を調ぶるに當つて、如何に彼れ等が天然を愛したか、如何に彼れ等が天然を見たか、如何にして此の天然を愛する事が希臘の神話となつたか、其の神話が如何に發達して希臘の文學、美術となつたか、獨り文學や美術のみならず、今日の科學哲學の起りも、希臘に發して居る。斯くの如き思想の發達は、希臘人が天然を愛するといふことから起つて居る事を一層深く感じたのである。故に私はわが女子大學の教育はなるべく自然に遠からぬ樣に其材料にも自然物を加へると云ふ方針を取るに至らしめたのである。それから實物教育には我々の實際にやつて居る寮舍生

活も與つて力あることを實驗して居るのである。

なほ高等女學校に於ては天然實物と云ふ材料をもつて教授し、生徒に實際から學ばせ、研究させ、觀察させ、天然を愛せしむると云ふことは確かに教育に有効なるものであると云ふ事も經驗したのである。此の實際に接せしめ、實物に當らしめたと云ふ事が、大に品性陶冶の上に卽ち理想實現に有益であつた。そしてこれは生徒各自の判斷力を養ひ、常識を養ふ爲めに最も大切なるものであつて、空想でなくして確實なる知識を養ひ眞面目なる品性を築き上ぐる大なる力があるのである。

學生はとかく理想に走る。

然しながら、高等女學校に於て毎年いくらかづゝの進歩を見て今日に至つたかは全く實物教授によつたからだと云ふならば、大に觀察を誤つて居るのである。凡そ人間と云ふものは決して興味なくして學問をなし理想なくして活動をすることは出來ないのである。卽ち物と力とは分つ事は出來ない。物あれば必ず力あり、力あれば必ず物のある事は今更申す迄もない。實現があるならば、また實踐躬行があるならば、必ず理想があるのである。又學生はとかく理想に走るから、注意して常識を養はねばならぬと云ふ說も一應は尤もであるが、併し乍ら實際は人間は、燃ゆるが如き熱心なく、理想なくして實地にのみ由るに於ては決して品性の出來るものではない。私は今日の學生に常識がない、人格が出來ないと云ふのは、單に彼等が實際に遠ざかつて居ることばかりでなく、今日の青年男女には實行を導く所の理想がない、確信がないからであると思ふ。理想を輕蔑し、確信を持つことの出來ない原因は今日の學生が實事に疎く、人格が低いといふ結果を產んで居るのである。そして之れが今日の教育に於ける大缺點であつて獨り個人の修養に關してのみならず、國家にとつても亦世界にとつても同じ事である。此の世界は常に運動しつゝあるのであるが、それには一つの力があるのによるのである。我國が彼のロシヤと戰ふて勝つたのは國民の力に

國民を動かす大なる精神。

個人的宗教

由り、此の力を出さしめたのは全く時代の精神に外ならない。昔、スパルタが非常なる勢力を現はして、アゼンスに勝つたのも、アメリカの南北戰爭に於て、北軍が大勝利を得たのもひとしく唯に物質的の上よりではなく、其の國民を動かした大なる精神があつたからである。古へのスパルタ人には確かに立派なる理想があつた。もし今日のアメリカ人から其の理想を取り除いたならば、彼等の物質的進歩も立どころに止まるのは明らかであるであらう。

それで此の精神力をやしなふには、哲學、科學、文學、倫理、皆必要なものであるが、これのみではまだ不滅不動の精神力をやしなふことは出來ないのである。

此の力は實に宗教的生命を得ることによつて得らるゝのである。宗教と云ふ言葉には語弊があつて、兎もすれば世間の所謂宗派と混じ安いのであるが、茲に云ふ所の宗教はさういふ意味ではない。そして又宗教と教育とは決して混ずべきものではないが、さりとて教育は宗教的生命を得るまでに至らなければ足らないと思ふのである。そこで茲にいふ宗教は佛教でも、クリスト教でも、若くは儒教でもない。と云ふて全然之れ等に反對するものではない。私には茲に個人的宗教と、全體的宗教と云ふものを區別し、生徒各自の信仰の自由を許すのである。私は之れを以て個人的宗教と云ふ。併し必ずや其所に統一すべき中心點があり、眞髓があるものである。こう云ふものに決して矛盾のあるべき筈はなく、此の點より推せば何れの宗派と雖、決して矛盾衝突のあるべきものでないのである。之れは凡その宗教の永久に滅せざる所の眞髓であつて、斯の如き宗教は人世に必要なものであると同時に斯の如き理想を與ふるにあらざれば眞の教育は出來ないと信じて居る。而して、此の宗教的生命卽ち理想の養成といふことを疎にして居るのが今日の教育の最も缺けた點である。

なほ宗教專門の所謂宗教學校もあるのであるが、私は之れもだめであると思ふ。クリスト教も、佛教も、昔のものは役に立たない。其らは全く時代の精神に後れてゐるのである。斯くの如き宗教が日進の世の中に幾千の力を加ふる事が出來るものか、將來國家有爲の民とならんとする青年男女の理想を滿足せしむる事が出來るものか、彼等に確言を與ふるに足るものか、私は否と答ふるに少しも躊躇しないのである。

實際の境遇に養はるゝ教育。

私が謂ふ所の教育の主義方針は天然實物に接せしめ、實際の境遇を作つて廣く知識を宇内に求むる習慣を養はせるのが第一で、宗教的要素を本として、宗教心を滿足せしめ、生徒に高尚なる理想を與ふるのが第二である、そして自動自治以て自ら學び、かうして得たる理想を大に實現せしむるにあるのである。

自然と教育

農業、園藝、牧畜の教育。

余が茲に謂ふ所の自然と教育といふ事は、換言すれば農業、園藝、牧畜と教育といふ事になる。私はこれ等の事を教育の上に加ふるには如何なる方法になるべきかといふ事について述べやうと思ふ。

近來我が國にも農業、牧畜等を教育に加へなければならぬといふ說が高まつて來て居る。これは如何なる原因によるかと云ふに、私の觀察した所では、今日歐米の最も進んだ教育社會に於て、自然物研究と、手工教育との二つが盛に行はれて居る。この二つを教育に加へて、從來の傳說的教育の弊を改むるといふ事が卽ち、社會的、實業的教育と稱へらるゝものである。

自然物研究の起源並びに現今教育の趨勢　此の自然を研究する樣になつた起源は、多分彼の米國に於て有名なる活物學者アガヂーの頃であらうと思ふ。此の人の教育主義は卽ち「學問は書物によらずして、自然を研究せよ」といふのにあつて、此の教育法によつて生徒を教育されたのである。其の後弟子達が此の

教育の要素。

精神を受けて、教育上盛に此の主義を主張した。而して近來此の自然物研究といと詞がかゝる教育法をあらはす一種の名詞となつた。なほ一層其の源に溯る時は、ソクラテス、アリストートルあたりの時代にも此の思想はあつたのである。近世に降つてはペスタロツチ、エミール、ルーソー、フレーベル等に由りてその必要を認められ、經驗せらるゝ樣になつたのであらうと考へる。

併しこれが一般に缺くべからざる教育の要素と認められ、奬勵さるゝ樣になつたのは近來の事で、漸次諸種の學校に實行せらるゝやうになりたれども、都會近邊の學校に於ては、此の教育主義に適する設備が出來ないために、大に教育の進歩を妨げらるゝの觀がある。紐育市の或る學校の如きは、百萬圓を投じて地面の一小區域を購入し、市中に植物園を設けて此の方法を實行しつゝあるが、此の事實に由りて考ても、如何にこの主義が教育上重じられて居るかといふ傾向を察する事が出來る。我が國に於ても當局者は勿論漸次識者が其の必要を感じて、將來大にこれを教育に加へんとしつゝある事は明らかである。余が先年米國に遊學して居つた頃には、此の趨勢が彼の國の教育社會に現はれかけて居つた。そして丁度コロンビヤ大學で其の設備に着手せられた時、彼の地に居つて余は深く其の必要を感じたのである。そして今日眠つて居る教育を醒し、其の宿弊を改善するには此の自然教育と手工教育との二者は缺くべからざる要素であると思ふ。

扨て此の「自然と教育」といふ事を述べるに當つて便宜上これを五ツの項目に分けて見やうと思ふのである。

一、自然研究の意味

二、自然研究の必要

三、自然研究と他學科との關係
四、自然研究の教授法
五、自然研究を教授上に加へたる結果及び價値

第一、自然研究の意味

自然と云へば卽ち、戸外のあらゆる自然物及び其の現象又は作用等を意味して居るが、此處では主として動植物の如き生命あるものをさして云ふのである、それで自然を學ぶとか研究すとかいふと大變むづかしい事のやうであるが、平たく云へば卽ち兒童の周圍にある自然を兒童自身に直接に觀察せしめ、且つ自然を愛する心を養はしめる事である、此の教育法によると實物を直接五官に觸れしめて、これを愛する心を起さしめ、同時に其の花なり鳥なりに對する溫かき同情を兒童の心の中に養成せしむるのである。それでこの自然物研究といふのは、化學でもなく、生物學でもなく、活物學でもなく、又初歩の科學でもない、其の意味の最も近いのをとれば、實物教授の如きものであるが、それとも亦異つてゐるのである。

兒童自身の觀察。

第二、自然物研究の目的

此の目的に二つある。

一は新らしき眞理を發見する事、卽ち人類知識の分量を捨加せしむるのを目的として居る。

二は自然研究に由ては教育者の心を直接自然に接せしめてこれを愛するの念を養ふ事、卽ち人類生活の幸福を增進せしむるのを目的として居る。

第一の目的は科學者に由つて達せらるゝが、第二の目的は吾々の云ふ所の自然研究によつて達せられる。そしてこれは人々の生活を豐富にするのみでなく、これによつて最も確實なる知識を養ふことが出來

自然の感化。

るのである。而して此の自然研究が段々進歩すると植物學、生物學の研究に入り、こゝに初めて第一の目的をとり、科學者間の研究が出來るやうになるのである。

併し此の自然研究は科學ではなくて其の眞髄は精神であると思ふ。故にこれは知識といふよりも精神に重きを置くのであるから宗教、文學、哲學卽ち感情、情操といふ傾きを多く有するものと思ふ。

第三、自然物研究と他の學理との關係

此の自然研究といふ事は從來採用して居る所の種々の科目の外にも、一つ別の仕事を加へたのではなく、又今迄の理學、地理學等を學ぶ上に於て學生の感情を惹き起し、其の活動を助けて彼れ等の知識を確實にする爲めの補助學科でもなく、無論これ等の事も其の結果として附隨しては來るが、たゞそれのみに止らず、更に一層重要なものであつて、これは凡ての學問の基礎となるのである。未だ言語の通じないさきに、未だ書物の讀めない前に兒童が其心に受ける自然の感化は實に夥しいもので、彼ら等の知識の基となり、彼れ等の學問の土臺となるものはこの自然研究をおいて他に求むる事は出來ない、如何となれば此の自然物研究の特色は實際であり、確實であり、又自發である。教育は是非とも實際的でなければ自發的教育を施す事は出來ないのである。

然るに我が國從來の教育法は殆ど眠つて居る、否死んで居る所の方法といふても不可なきほどで、兒童は極めて不自然に、機械的に働いて居ると云はねばならぬ。故に實際から全く離れて居るために、兒童の心には少しも想像のつかない事のみを教へられ其の結果として、兒童は書物より學びたる事と實物との間に大に違ひのある事を感じ、遂には却てこれを怪しむる樣になるので、彼れ等は實際事物の變化現象を見ても少しもこれを了解するの知識なく唯書物の上でのみ知つて居るのである。たとへば一首の歌を作るに

しても、唯立派な詞を暗誦しておいて、實際見た事も聞いた事もなく、自ら深く感じた事もない事を作るのであるから大思想家も大詩人も到底養成する事は出來ない。これが今日の我が國教育の缺點であつて教育を殺して居るのである、これが今日青年男女をいためて薄志弱行の徒を作つて居るのである。

自然研究は卽ちこの缺點を補ふべき唯一の方法であつて、これを教ふる教場は如何なる所を撰ぶべきかといへば、先づ戸外と思ふてよいのである。從來の教場の如く四季少しも變化のない、たゞ夏冬にストーブを備へたりとり除いたりする丈の極めて無味乾燥な場所に生徒を閉ぢ込めてこれを最も大切なる教場と考へて居ては大なる誤である。吾々の理想の教場は天然である。兒童をして常に變化極りなき天然に接せしめて、其の中で極自由に自ら學ばせ、自ら研究させ、自ら活動せしむるのである。故に吾々の所謂教場は野であり、山であり、川であつて、到る所教場とならぬ所はないのである。かくの如き自然界の活きた現象に接せしめて活動的教育するが卽ち自然研究である。

自然研究の教授法。

第四、自然研究の教授法

自然研究の教授法に二つある。

一、事實によりて教授すべき方法、

二、想像によりて教授すべき方法、

科學者及び其の他の人々は、天然を解釋するに當り、事實によりて、自然の現象を分析し分解する事によりて其の知識を得るのであるが、文學者、美術家又は兒童などは、唯事實により感情、想像又は同情によつて、直觀的に天然を見る傾向がある。併し如何なる科學者と云つても感情、想像のない者はなく、如何なる詩人と云つても事實に對して少しも知識のない事に同情の起る道理もない、夫れ故に此の事實にせ

よ、想像にせよ、全く同時に人間の心の中に起るものであつて、決して事實なり、想像なり、一方に偏するものではないのである。

兒童を教育するにも此の二つの能力が結びついて並び行はるゝ事が必要であつて、此の二つの要素を缺く事は出來ない。或る科學者は兒童も婦人も直覺的であると云つたが、殊に兒童は直覺的に天然を觀察し、自分と同じ様な同情を以て想像するものである。

自分の體よりも大なるものを引く。

嘗て余が輕井澤に赴いて散歩の途中ふと澤山の蟻が忙しげに地上を這つて居るのを見つけたので、なほよく觀察して居つた所、それは或る岩の下に穴があつて、其處に食物を運んで居るのであつた。そして穴から土を運んだり、或は二三尺も上の處に自分の體より大きなものを引いてゆくのもあつてそれ〴〵目的のために動いて居る。中には隨分遠方まで行くものもあつたが、一體如何して自分の穴に歸つて來るのであらう、其の行路に何か目標でもあるのではないかと不思議に感じたのである。然るに翌日小山に登つた時、地上に白く銀の様に光つた跡が綱のやうについて居つて、其の筋はなめくじの跡にしては小さい。して見るとこれは昨日の蟻の跡ではあるまいか。自分で這つた所には如斯き一種の臭氣か何かを殘して、後から來るものを案内するのでないかと思つたのである。

若し、兒童がかゝる事を見たならば、必ず石を取り除けて見るか、穴を掘つて見るかして、彼等の頭に蟻のホームや、寢床などを想像し、又夫れ等の下等動物は如何なるものであるか等云ふ事迄も想像が働いて、精密にそれを觀察するであらう。これが兒童の性質であつて、かうしてゐる間に同情が起るのである。獨り兒童は動植物のみならず、太陽や星などについても同様なのである。例へば太陽を見て天にある金の鈕であるとか、天の神様の眼であるとか云ひ、又或る星は自分の友であると思ひ、種々の想像を描い

て其の星を見る事を無上の樂みとして、毎夜其の星の出づるのを待つて居る等の事は珍くはないのである。

斯様に兒童が生命なきものをも有情のものと見做す所は、如何にも詩的で、彼れ等は概して事實的よりも文學的、詩的の觀察を持つて居る。併し前述の如く、想像、空想のみに偏することは最もよくない事であるから、その詩的の思想、想像を必ず事實に結びつけ、明日なる事實に由つて、確實なる知識を得せしむる様に兒童を導かねばならぬ。兒童が太陽や星を見て、それに向つて飛んでゆきたいといふ想像は、天外遙かに描いても宜しいけれども、其の前に先づ自分の實際、生活して居る所の、此の世の中の事實を土臺として、其の想像を太陽にも星にも及ぼすべきである。

又此の自然研究は決して書物を以て教授するのではない。卽ちアカジーの言の如く書物に賴らないで自然其の物を學ばしむるのである、故に書物を讀ませる時は、其の實物、事實を示してそれを學ばしめたる後に、書物を讀ませて不足を補はしむる位に止るので、此の如き教授をなすには、教師の最もよき指導が必要なのである。

教師は指導者でなければならぬ。生徒をして模倣的たらしめてはいけない。此の教授法によると教師は教ふるのではなく、導くので卽ち暗示を與ふる指導者となつて、生徒自ら學ばしむるので模倣的ではいけない。例へば花について教ふるにも、從來の教授法によると教師はまづ或る花の標本を示し、或は書物で教へて置いて後に、生徒をしてこれと同じもの、或は類似したものを持ち來らしむる様な事があるけれども、自然研究の教授法として、吾々の採る所の方法は、唯花についての詞を知らしめ或は説明を與へるのではなく、生徒自身によく實物をさがさしめ、教師も生徒と共に自然の風光に接して、或るものを發見し、これは何であらう、此の事實は何故であらうといふ疑問を起させて、其の原因道理を調べて行くので

生徒を導く教師の人格。

あつて、これが從來の教授法と異つて居る點である。

今一つは從來の教授法では、何によらず先きに定義を示したものである。これは大なる誤で、吾々の考へによると、兒童自ら自然物を研究し觀察したる結果によつて、生徒自身に其の定義を作らせるのである。故に此の自然研究の教授法に尤も大切なるものは、教師と生徒との態度である。卽ち教へられるのでなく、導く態度、又教へられるのでなく、自ら學ぶといふ態度が兩者によつて必要なのである。

△教師の資格　自然研究を導く教師に最も大切な事は其の人の人格である。兒童が其の人格に接して、自然に感化を受ける樣な人格ある教師でなければならぬ。そしてその人格又は自分の經驗に照らし、且つ其の生徒の性格を學んで、これにつきての自分の教授法を編み出して、生徒を導き得る所の實力が必要なのである。

斯くの如き人格を作るには、次の二つの事が必要である。

第一、熱心　第二、知識

專門的の深い知識は少くとも、能く事物を觀察する事が出來、其の思考を確實に統一して、熱心に導く事の出來る人ならば、自然研究を導く所の教師たりうることが出來る。

△教授題目の撰擇法　自然研究を教授するには先づ今日は其の題目を花にしやう。明日は馬にしやうと云ふ樣に割當てゝ、豫め定むべきであるが、又如何なる題目を撰んで教ふべきかと云ふ事が問題であらうと思ふ。其の撰ぶべき題目は兒童に緣遠い物ではいけない。極めて兒童に接近して居る物で、兒童が直に見出す事が出來、且つ最も夫れを愛し、又最も喜ぶ所のものを撰ばなければならぬ。

さうすれば兒童は最初は餘り興味をもたなかつた物でも、漸々に其の關係を深くし、關係が密接になる

三本の枝が皆違つてゐるは何枚であらう。

と、從つて兒童の興味も高まつて來るのであるからいくらでもその題目を見出す事が出來るのである。

△如何なる教場、及び器械を用ふべきか　教場は時と場合とによつて、或は室内で學ぶべき必要もあるけれども、概して戸外で學ばせるものが最もよい方法であらう。

又それを研究する器具は先づ鳥籠とか鳥の巣とか其の他硝子箱の如き器具があれば充分であらうと思ふ。

そして十二才以上になれば、極簡單なる顯微鏡等を用ひさせ、夫れ等の器具は出來るだけ兒童自身に製作せしむることが又教育上必要であるが、今此の教授について最も重要なる事を擧ぐれば、

(一)事實について、(二)事實についての説明卽ち事物の道理、(三)生徒の心に殘つて居る所の疑問、

以上の三要素は自然を研究する上に於て、如何なる事物についても必要である。

例へば花を見る事は一つの事實であるが、事實には必らず原因があるので、夫れを知る事は兒童の最も望む所なのである。

今一二の例をいへば、或る一つの枝を研究するのに兒童が三人居れば三人共枝についての觀察が違ふのである。或る者は「此の枝は大層曲つて居る」といひ、或る者は「これは赤い枝であるが、こつちは青い枝である」等といひ、又他の者は「此の枝は同じ幹から出てゐるのに、三本の枝が皆違つて居るは何故だらう」といふ樣な疑問をよく起すのである。其の時教師は各兒童の種々の答、又は疑問の中で最も共通して適當せる事、又凡ての兒童の注意を惹く樣な問題を撰んで、一層興味を起さしめ、其の事物の或る原因などについて兒童自身に考へさせ、時には森などに連れて行つて既有の知識を愈々確實にし、それに由て新らしき經驗を得させるのである。それで兒童は自然について中々むづかしい疑問を起して、教師や母親などに尋ねるから、教師でも母親でも隨分知らぬ問題が起るのであるがもし其の時知らないと言ふのは教

師なり母なりの威嚴を落す樣に考へられるけれども決してそうではない、これは教育者に最も大切な事で知らぬことを知らぬと答ふるのは其の人の人格を益々高からしむるのである。故に知らぬ問題は宿題として教師も生徒も共に研究するもよろしく、又は生徒各自に調べさせて其の結果を見るも善からうと思ふ。

卽ち此の問題の起る事が、教師にとつて最も大切なる事である。教育家と云ふ者は何處迄も先生と云ふ者を持たずに、生徒と共に學ぶ、研究すると云ふ事が必要である。吾々の知らぬ事を却て生徒が能く知つて居る事もあるから生徒から學ぶといふ事も忘れてはならぬ。又教師にせよ、母親にせよ、自分よりも優れたる生徒又は兒童を作ることが出來ればそれが教育者に取つて非常なる名譽であり、又其の母親にとつて無上の喜びであるのである。

第五、自然研究を教育に加へた結果及び其の價値

終りに臨み私は此の自然研究を教育上に加へた結果及び價値と云ふ事について述べたく思ふが餘白がないので遺憾ながらこゝにホツヂ、スタンレーホール諸氏の言をひいて、此の話を結ばうと思ふ。「自然研究と人生」といふ書を著したホツヂはこれについて六つの價値を認めて居る。(一)美術的　(二)倫理的　(三)宗教的　(四)教育的　(五)心理的　(六)經濟的

なほ此の書をかく前にかう云ふ事を云ふて居る。「私は最初に於ける動物と、自然の美を保つために開拓せざる原野と、花園とを與へ、又私の爲めに、故郷の家の傍に美しき楡の木や、野の美しき草花を植えて下された所の父上に此の書を捧げませう。」

私の經驗に照らしても、實に自然が兒童に及ぼす感化の偉なることを深く感ずるのである。私は幼少の時から遊び馴れた山や、川や丘や又最も好きな谷間などは生涯決して忘られない。吾々は此の幼少時代に

高尚なる志を鼓舞す。

我が國の高等教育。

於ける自然の境遇に由て、如何に高尚なる志を鼓舞せられたか。又これが教育上如何なる良感化を與へたかといふ事は、實に計りしれないのである。

スタンレーホールの「アドレツセンス」卽ち青年研究といふ大著書の中に

「自然を愛するといふ事は、文學美術、宗教、哲學、科學等の基礎を與へるのである。人間の宗教は自然に接する事から始まつたものである。

と書いてあるが余も亦至極同感である。そして今後我が國に起るべき文學、宗教、科學は自然に接する事に重きを置かねばならぬと考へる。夫れで私は婦人が農業、園藝、牧畜等を研究になる事を非常に喜ばしく思ふのである。婦人の中は既に家庭を持つて居らるゝ方もあらう。又教育に從事して御出での方もあらう。孰れの方面に拘らず、婦人が此の主義を持つて社會を導いて戴きたいのである。

此の自然研究を導く所の教師は無論必要である。又就れの學校でも音樂や、裁縫などの專門家と同じく、此の自然研究についての需要が出來てくるであらうと思ふ。兎も角も婦人諸姉はこれが如何に大切なものであるかといふ事、並びに他の學科との關係を調べて、家庭にも學校にも此の要素を入れる事に、一致協力せられん事を切望するのである。

職業教育と女子高等教育

我が國の大學卽ち高等教育は如何なる目的を持てゐるのであらうか。無論國家社會の必要から起つたには相違ないのであるが、其の制度は多く歐米のものを採用したのである。歐米の高等教育にはリベラル、エデユケーシヨン（自由教育）とプロフエシヨナル、エデユケーシヨン（職業教育）との二種類があつて

ルネサンスの高等教育。

職業教育と人格問題。

英、米國は重にリベラル、エデユケーションの主義に基き、獨逸の如きは重にプロフエツシヨナル、エデユケーションの主義に則つて居るのである。そこで我が高等教育は多く獨逸に習うて居るので、高等教育と云へば、直ちに職業教育であるかの如く思惟するものが多いのである。然し歐米の所謂プロフエツシヨナル、エデユケーションと云ふのは單に職業教育と云ふ意味のみでなく、今少し精神的に用ひられて居つて、リベラル、エデユケーションと大差はないのである。

リベラル、エデユケーションの起源は如何と云ふに、今より凡そ四世紀前、宗教政治の專制制度から逃れて自由に人格を養はんと欲して起つた教育主義で、其の目的は人格修養にあつたのである。之れ卽ちルネサンス（文藝復興）の高等教育の目的で人間の經典、人間の想像に重きを置いた結果、文學を皷吹し、人文の最も發達したといふグリーキ、ラテンを教ゆる事に骨を折つたのである。此の主義が時勢と共に進歩して、實際主義（リアリズム）となり、人の腦力を訓練して强固なる、有益なる人格を作る事を目的としたのである。所が十九世紀に至て自然主義と成つた、卽ち社會の必要に順應して社會國家を誘掖するに足る良市民（グウドシチズン）を養成する事を目的とするのである。スペンサーの如きは教育の目的を指して「正しく生活する方法を教ふるものである」としてゐる。而してこの主義は自然を研究しその法則を見出して、之れを社會に應用する事を勉むるもので之れ所謂職業教育の起りで最も科學に重きを置き、之れによりて人格をも養成するに至つたのである。

高等教育の要素として缺くべからざる職業教育を修得するものが果して人格を顧ないでよろしからうか、否、西洋のプロフエツシヨナル、エデユケーションは立派なる人格の上に打建つる專門の學問技術を授くる事を以て目的として居る。然るに我が國の教育は中等教育迄は人格修養を問ふが、大學教育に於て

は一向に之れを顧みない、爲めに其の職業は營業的、職人的であつて大工職、左官職と撰ぶ所がないのである。我が女子大學では決して職業とは云はない、天職と呼ぶのである。卽ち職業を以て單にパンを得る爲め、名利を衒ふ爲めでなく、眞に國家社會人道の爲めに己が天職の才能に從つて全體に關係ある部分を經營せんとするもので職業といふよりも神聖の意味をもつ者である。プロフエツシヨンも亦職業よりも深き意味をもつて居るので、殆ど天職とも云ふべき大なる意味をもつて居るのである。

今一つプロフエツシヨンは生涯進歩發達する能力を持つ事で、己が職業と違ふ要點である。我が女子大學に於ては、先づ個人性をつくり、次に社會性を養ひ而して一つの天職を見出さしむる事に務むるのである。人が生存して居る以上、精神があると共に身體があるので、從つて一つの職業をもたなければならないのである。昔は高等教育をうけたものは單に精神上の事をのみ掌るものと考へたが、今日は凡ての職業に高等教育が必要となり、無限に進歩發達せしむべき能力を養ふ事を必要とするのである。其の見易き例は、人間の生命の與奪に直接關係ある船頭の如きものも昔は只船の操縱に熟練して居れば足りたのであるが、今日は苟も船長として立つものは、商業教育をうけたものでなくてはならないのである、卽ち天文學、地理學、氣象學から、機械學にも通じて居らなければならないのである。藥屋にしても今日はプロフエツシヨナル、エデユケーシヨンを要する。醫者に至つては高等の學問の必要は言ふ迄もないことである。然し船長よりも、藥劑師よりも、醫者よりも、もつと多く人の生命、國家、社會の消長を掌る妻たり、母たるものゝ天職に高等教育が不必要であつてどうなるものか。船長が船の操縱の外何事も知らず、醫者が呪文と藥草とより心得ぬ世ならばいざ知らず、今日の時勢に於て女子の高等教育の不必要を稱ふる事は、もはや取るに足らぬ陳腐な議論である。今や世界の列强は一般に女子の高等教育を奬勵し米國の如

ペンシルバニヤの通信教授。

きは高等教育を受けたる女子が四萬人であつて、實に我が國男子の高等教育をうけたる數よりも多いのである。獨逸の如き守舊な國であつても大學の門戸を女子の爲めに開いた。どうしても社會の發達上女子もリベラル、エデユケーシヨン、プロフエツシヨナル、エデユケーシヨンを授けねばならない、然し教育は決して學校に於てのみ與ふべきものではないので家庭に於て、社會に於て、職業に於て教育しなければならない。米國の如き、又獨逸の如き學校以外の之れ等の教育にも注意する所から大學擴張、大學殖民の運動が盛んである、大學の教授方は冬の夜、或は夏の休暇を利用して、成る可く多くの人に講義を與へやうと務めて居るのである。通信教授の如きも極めて益んに行はれ、ペンシルバニヤのスクラントン市にある通信教授の如きは實に男女の會員四十六萬人を有し毎年新入會員は凡そ十五萬人もあるといふ有様である。これは國家の發展上大多數の人に高等教育を授くるが大切と考へるからである。我が國でも識者の間には既に女子高等教育の必要が認られて居り、今後其の教育機關の如きも、益々發展するに至るであらう。然し學校のみでは決して多數の人を教育する事は不可能である。必ず之れを補ふ機關がなくてはならないのである。即ち大多數の人を生涯進歩發達せしむるに足る能力を與ふる機關として、大學擴張、大學殖民とも稱すべき働きが起らなければならない。この働らきとしては各地に婦人圖書館、夏季學校等も、また起らなければならないのである。而して女子が人として國民として獨立するに足る人格、才能を有して、始めて良妻賢母たる資格を有することが出來るものである。

其處で男子の發展上には工藝教育の大切なる如く女子の發展に農藝も缺くべからざるものである。第一教育より云へば自然教育、即ち科學的、心理的、社會的傾向となるこの教育が、最も女子教育に遲れて居るのである。而して之れを補ふには農藝が最も捷徑である。即ち第一自然に接して之れを愛する念を養は

女子に科學的頭腦を與へる。

しめ、次で自然を研究せしめ、第三に之れを利用せしむるのである。女子に科學的頭腦を與へ、經濟の品性を與へる事が、女子を自由ならしむるものである。元來我が國は農業國であつて貿易の多額を占むるものは、絹生絲である。卽ち農藝品である。而してこれ等農藝品の九分通りは婦人の手によりて營まれてゐるのである。次に大なる物產は米である。然るに米は內地の產出に不足をつげて、凡き千萬圓の外國米を輸入し、小麥も亦千萬圓以上の輸入があるのである。農業國の農產物が、斯くの如き有樣であるからには、その發展を計ることは目下の急務と信じられる。然るに我が國の女子教育に於て、農業趣味の養成を冷淡に觀過するのは寧ろ不可思議ではないか。却つてかゝる事には露西亞の女子教育は最も注意を拂つて居るのである。かの國の人口は凡そ一億五千萬で、其の少數を除くの外は田舍に住つて居る。而して田舍の大切な仕事の半以上は婦人によつて營まれて居り、女子教育も之れに應じた課目を與へて居る、露西亞は知らるゝ通り我が國等とは違つて、天然の恩惠の乏しい土地で半年は永に閉されて春を經ずして夏が來るといふ有樣である。それでこの夏の間に凡ての天產物を收穫しなければならないので、夏期は女子が最も手腕を振つて働らいて居る時である。これ等農藝に關する事は凡て女學校で授けられ、其女學生たることは極めて榮譽とし、また大切なる事として居るのである。之れ等學校の制服として、水色の衣服に白いキヤツプ、白い手掩ひを用ひるが、卒業後一團の勞働者の監督となり、もしくは學校の教師となる時は同じく其の服裝を續ける、世間もまた白のキヤツプ白の手掩ひの服裝をした婦人を見る時は榮譽ある學校の卒業生として尊敬してゐる。少くとも我が國に於ても一般に婦人と農藝とは密接なる關係を有するといふこと丈でも、早く知らせねばならないと思ふ。

天然の恩惠乏しい土地。

兒童教育と幼稚寮

戰後の日本と兒童の教育

我が國は從來、強兵の誇るべきものはあつたが富國の賴むべきものが無かつたのは事實である。先づ富國の要素である商業はどうであるかと考ふるに貿易に於ては實に三千萬圓乃至五千萬圓の輸入超過である。のみならず、英米の如き規模の大なる商業は決して見ることが出來ない。然らば工業はどうであるか、日本人がセツ〳〵手を以て働らいてる間に、英米人は大機械を利用して、何倍かの製作物を出しつゝあるのである。然らば天然の材源に富んで居るであらうか、石炭、鐵、銅、其他の金屬でも、石油でも、鹽でも、木材でも、內國の需要さへ滿たすことを得ぬのである。斯くの如く商工業を以て世界の舞臺に爭ふことが出來ないとしても智力を以て勝ることが出來るであらうか。顧みれば實に完備した大學の類さへも僅少であり、發明力も誠に微々たるものでかてゝ加へて國民の體力も未だ薄弱と云ふより外はない。斯く考へ來つても決して悲觀するのでない、斯る有樣を如何にして救はうかと案ずるのである。此處に大政治家があつて、國家の經濟を巧みに融通せしめても、或は國民が喜んで重稅を納めても、それで眞に救濟が出來るものではなく、皆一時の凌ぎにすぎない。もし一時の危急を救はんとあせつて、百年の計畫を忘るに至らば、眞に亡國の悲慘に陷るのである。で余は此處に只一つ百年の計畫を以て、日本を救ふ道があると信ずる。一言で云へば兒童の教育これである。國民は兒童、卽ち小國民と、男子と女子とに依つて成つて居つて、小國民は其の五分の三といふ大部分を占めて居るのである。而してこの小國民は我れ我れの後繼者で第二の國家を經營すべきものである。此の後繼者には我々が受けて來て居る三千年來の文明を傳

強兵と富國。

小國民は全國民の五分三を占めてあり。

ふるをうるのみならず、現今世界列強の文明をも速成に學ばしむることが出來るのである。これ余が兒童を教育することが、國家を救ふの道であると云ふた所以である。

盆栽の如く萎縮する。

家庭と文化

兒童の領分は家庭であつて、此處は更に過去のあらゆる文明を兒童に傳へて、これを啓發せしむる教場である。然るに東西古今を通じて家庭は宗教に次いで最も保守的のものであり、從つて社會文明に後るゝ觀があるのである。これ家庭は個人的であり、家庭の事は祕密に屬すべきであるので往々等閑に附せらるるのである。されば先進國と雖、この家庭を改善し、世界の文明を宿し、其の勢を以て國家の進歩發達に資すべきものであるといふことを忘れて居る。我が國民は列強の出來難い此處に早く着眼して家庭を以て、眞に第二國民を教養するものとなさねばならぬ。

兒童の特性と義務

小國民は如何なるものか、如何なる境遇に生活すべきか。これを適當ならしむるは、小國民卽ち兒童の國家に對する義務、責任であつて同時に我國民の義務であると思ふ、それで先づこの小國民をして充分發展せしむるに足る境遇、卽ち家庭を與ふるに先だつて、兒童といふものを知らねばならぬ。先づ今日兒童に對する誤解を擧ぐれば、

第一兒童を以て大人の小さきものと思へる事。

第二子供は大人の準備なりと思へること。

等である。然し子供と大人とは既に生理上、心理上、異つて居ることは、男女相異なるが如くである。また子供は大人の準備には相違ないが、それに拘泥するから、人工的となつて、恰かも盆栽の如く萎縮せ

子供の社會的本能

しめて了ふのである。人間を分けて男女、及び子供の三とし、この三者が互に相異つて其の特長を發揮し、互に調和、統一さるるに至つてはじめて、進歩發達は見らるるのである。そこで兒童の特性と云ふのは、

㈠兒童は現在に生活するもので、過去と未來とにはあまり生活の出來ぬものである。これ大人の過去、現在未來に生活して居る處と趣を異にするのである。しかもその現在も多く想像に生きて居るので、例へば太陽を神と思ひ、星を花と思ふが如きそれである。

㈡子供は大人よりも自發的のものである。大人は風俗、習慣に從ふことあれども、子供は思ふ儘を行ひたがるものである。この故に兒童を教育するには構成的、發表的教育を重んぜねばならぬと思ふ。この兒童の性の從へば、兒童は喜んで學び、効力が多いのみならず、長じては最も研究力、工夫力に富み、獨立自營の精神を有するものとなす事が出來るのである。

㈢子供は大人よりも實地に近し。大人の如く社會の舊習に束縛せられずして天然の美も物の眞相も直覺するものである。この點は確かに兒童に將來の社會の改革を托して最も望みある所である。

㈣子供は本能的、衝動的である。大人の如く品性も何もないから、四圍の境遇より心に寫ることには、常に反應し、これによつて活動し、これによつて品性を作らるることが多いのである。

また子供は社會的の本能がある。殊に母を慕ふ強き情がある。それで母たる印象は子供の頭腦に深く刻まるるに至るもので、これ母の感化力が偉大なる所以である。

子供は斯くの如く大人と異る點を有するので、自然其の要求も異つてくる。それにも抱らず、今日の教育は傳說的教育で兒童の本性に應じたるものでないのである。もしこれを認めず、大人と同樣に取扱ふに

至らば、その特權を奪ふのであり、自由を束縛するのである。否、虐待である。鳥獸でさへ、其の自然に反した取扱ひを憐んで、動物虐待防止會等が設立せられて居るではないか。況んや子供の爲めにこの虐待を除くことは、我々が第二國民を愛し、敬する所以であつて、これやがて眞に完全なる國民を作る準備となるのである。

兒童の價値を現はせ。

然しながら兒童の教育に唯この本性を妨げぬ事が大切なるのみならず、更らに一方には兒童の人類、國家に對する義務を全ふせしむることに務めなければならぬ。換言すれば、兒童たるの價値を充分現はさしめねばならぬ。これを爲す爲めに二大要素がある。一つは國民が數千年來かかつて得たる學識、藝術、腦力の後繼者たらしむることである。今一つは從來の國民の惡しき遺傳を改め、更らに國民の新しき進歩を計らしむることである。平たく云へば、兒童に教育を與ふることは兒童より云へば教育を受けなければならない義務を有するのである。

教育とは如何なるものか

教育とて無論退歩でなく、進歩であつて、教育によりてより善き國民を作るべきである。卽ち國民をしてよりよき身體とし、よりよき精神とし、よりよき傾向とし、或はよりよき習慣を作り、よりよき理想を持たしむるのである。されば教育には善感化が必要である。この善感化を與ふるに二つある。一つは教育の任にある父母たるものが好模範を示すこと、今一つは善き四圍の境遇を與ふる事である、この二者は教育に缺くべからざるものである。現今、我國をして世界に勝たしむるに、何を以てせんかと案ずるものが多い。假令、商を以て、工を以て、或は知識、藝術を以て、勝ちを制した所が到底一時的であつて、百年後の事は計り知るべくもない。が、假令今日は凡てのものに敗けて居つても、第二の國民の人格高く、腦

第二の國民は凡ての點に勝たざる可からず。

力、精神、確信が勝つて居るならば實に前途祝すべきである。かく兒童の價値は凡てのものの價値よりも勝つて居る。國民の生命は進化によりて、永久に生くるのである。元來進歩に貢献あるものは、價値のあるもので、其の進歩に貢献する處によりて價値の大小は定まるものである。然るに社會の仕事の中で、最も貢献の大なるものは、兒童の教育である。卽ち兒童の教育が最も價値の大なるものである。飜りてこの價値ある教育の任にあたれる父母を見、其の境遇なる家庭を見れば如何であらうか。實に彼等は兒童卽ち第二の國民を敬愛して、この爲めに計り、この爲めに務むる所が少ないのである。

幼稚舍の必要　其の一

幼稚舍といへばまだ頑是なき子なり母親の暖かき膝許より離すが如く考へるが、こは大なる誤解である。もし兒童を母より離すに於ては最も大切なる感化力や、四圍の境遇を取り退んといふことになる。然るにこの世の中には、母なく父なくホーム無き孤兒、迷兒といふ最も氣の毒な國民も少くは無い。富あり位のあるものであつてもまたかゝる悲慘な目に遇ふて居る者も少くはないのである。また親はあつても、其父母が互に調和せぬ爲めに極めて不愉快の家庭に育たなければならぬものもある。また繼母繼父によつて苦しめられて居るものも少くは無い。殊に彼の日露戰後に如何程不幸な家庭が出來たか分らぬ。これは誠に第二國民の爲めに憂ふべき事で、この冷かなる不愉快なる家庭の空氣は、いつしか兒童の心身に影響して、不健全なるものとならしむるのである。かかる人々こそ却つて他人の暖かい注意の下に養つた方が、いくら增しであるか分らぬ。或は幼稚舍の如き處も他人の手に任かすのであるから、繼母の手に育つと違ふ事がないだらうと疑ふ人もあるだらう。然し夫婦間の調和せぬ感情がわだかまるのは、格別のもので、却て他人の方が母らしく、父らしき愛情の湧くものである。余も嘗て二三の兒童を預かつて父と呼ば

不愉快なる家庭の空氣。

せて養つたが、全く子の如くに感じ、その前途迄もいろ〳〵氣にかゝり、心配さるゝのである。また米國に遊んで白痴院に行つた時、教師と生徒との間柄が眞に親子の愛情掬すべきものあるを見て少なからず感じたのである。其の教師も六ケ月、共に居つては到底離れられぬ親子の情が湧くと云ふて居つたのを聞いた。これは誰も認むる所であつて此の點よりしての幼稚舍は必要であると思ふのである。

家庭は凡て舊習に從ふ。

幼稚舍の必要　其の二

第二の心要は第二國民の教育の改良、家庭の改良を行ふに、非常に大切なる機關となる事である。されば此處は孤立せる家庭の連鎖となりて、研究の中心となり、實驗所となり、模範となるべきである。

近頃家庭、社會の改良が言葉のみとなつて終には言葉にも力が無くなつたが、實際に研究することは重大なる問題であることを忘れてはならぬ。然るに家庭は社會公共の事と違つて、社會文明に後るゝ事遙かでこれは次の如きことに起因するのである。第一研究の必要を國民が感ぜず、殊に家庭にある婦人が感じないのである。それで家庭に於ては何事も舊習に從ふより外、術無しと思つてゐるのが何よりも最上の障碍物であつて、すべて事は何でも自然に放任して置いて進歩發達することはない。自然が齎す教訓は只罰するといふ事より外無いのである、少しでも兒童の取り扱ひを誤り衛生に反けば自然はこれを說明すること無く、直ちに罰して、或は病とし、不具とし、また二つなき命をも奪ふのである。親の誤りに依りては幾萬有爲の第二國民は病的となり、不具となり、または早死し、不道德となつて居るか分らぬのである。まして家庭が孤立して居る爲めに、同樣の誤りを再び他人に繰り返へさしめぬ樣、注意することが出來ない。要するに從來の家庭は孤立して居つて經驗なく、自然に任せ舊習に從ふべきものとして居つたので、研究心が起らなかつたのである。

子供の特性に適ふ建築物。

第二の原因は母親が兒童の特性を知らぬことに起因するのである。例へば住居を作り裝飾を施しても考ふることは多く大人の爲めであり、事業の爲めである、されば住して不便を感ずる時は改良され、もしくは地位により流行によりて改築せらるゝが、眞に子供の愉快の爲め、子供の衛生の爲め、子供の教育の爲めには、考へらるゝ所が無い、或は壁の色でも襖でも建築の材料でも整理の方法でも、子供の特性を加味して、作られて無いのである、然るに幼稚舍は子供の爲めに作られるのであるから、その光線の工合から、壁の色から、遊戯場から、凡て子供の特性に適ふた建て方である。されば今後、その主婦が寮に寄り來つて一見して斯くならなければならぬといふ事が分り、また子供もホームの大切なる一人なれば、その爲めの設備も怠つてはならぬと云ふ事が分るのであらう。其の他椅子、机、寢臺、或は衣服、食物に至るまで從來の家庭の如く大人の小さきものとして取扱かはず、其の生理上、心理上、適したものに改良し自由の發達を遂げしむる事に注意してある。

自分の家庭の外に他の家庭を知らず。

第三の原因は、家庭の事は個人的、祕密的となれるを以て、自分の家庭の外、他の家庭、或は多くの家庭を知らぬ爲めに、一つの誤りによりて幾千の人を殺し、幾萬の不具者を出し、幾十萬の不道德者を出すか分らぬのである。卽ち家庭に關しては未だ一般の知識なく、習慣なく、會合なく、比較的研究なきによる。社會の文明の進歩は世界人類の經驗幾千年間重りて出來たるものなるに比すれば家庭の進歩に遲るゝも尤もである。

幼稚舍に於ては先進國でも行ひ難き家庭の統一を計つて、第二國民に資し世界文明の淵源となる樣、そしてこゝから第二維新の實を擧げたい者と思ふ。又主婦たるものは、こゝに連り、此處に力を合せ、此處に經驗を發表して、研究の中心改良の根本となすことに務むべきである、然しこの目的を遂ぐる迄には、

幾度か冷され、幾度かこぼたれて、成長發達の決して容易でないことは明かであるが、しかも此の大なる使命を信じて出發するならば必らず目的地に達するの日あるを疑はぬのである。

兒童と手工教育

從來の教育は形式に過ぐ。

從來の教育が、形式的抽象的に傾ける弊を改めるには、學校教育に、實業的、社會的の要素を加へて、以て今日の社會に、充分活動のできる人物を養成することが必要である。その教育としては手工教育を、大に奬勵するのである。

手工教育と云うても、只單に手藝のみではない、技術、美術、或は文學をも含むものである。手工といふことは手指によつて、道具を使つて出來るものであるけれども、その源は腦髓の働きに外ならぬのである、すなわちその思想を發表するに當つて複雜たる方法によつてするのであつて、手工教育とは畢竟、頭と心と手がよく調和し、平均して發達する教育を云ふのである。この手工教育は、今日の教育中、最も進歩發達したるものであつて、その結果が非常に良好である。形式的抽象的教育は、已に獨、米等に於て、陳腐なるものとして捨てられたものであるが、我日本に於ては、尙この教育法を見るのである。我國の教育界が諸强國教育界と同じ樣になるには更に一番の奮勵を要するのである。かの米國教育調査委員の手工教育についての報告によると、ノースウエルスの大學校長、法學博士デーチヤー氏は曰はく、

心身の開發。

手工教育は現今米國の教育界に於ける、最も顯著なる傾向であつて、殊に英國教育界を動さんとする者である、その手工教育には二の目的がある。

其の一は教育的目的で、これは之迄放抛せられた心身の一方面を開發して圓滿の發育を遂げさせやうと

手工教育の黄金時代。

兒童は非常なる興味。

するのである。其の二は職業的目的で、これは凡て青年十八才頃迄は學校教育をうけ後社會に入つて、實際の職業をとるに當つて、必要なる能力を與ふるのである。米國で實際此の教育がどれほど發達して居るかといふことは同調査委員ロックデール專門學校校長ヒープ氏の言に徴すれば明かである。

女子教育の中に、裁縫、幷に割烹を奬勵することは、英國は敢へて劣つてをらぬが、男子の教育に至つては、英の手工教育は到底、米に及ばない。卽ち、英國に於ては、幼稚園で少し手工教育を與ふれども、こゝを出てから年齡十二才に至る迄は全く中絶してゐるのである。故にこの間は、實に兒童の手工教育の爲めには黃金時代とも云ふべき時である。米國に於ては、これに反して、幼稚園の時代から非常な注意を以て、手工教育を與へて、その任に當らしむるものも、充分の知識と經驗ある人とを選ぶのである。故に兒童にその觀察力と、實地に事に當らしむる事とを養ふことが出來るのである。卽ち米國では、師範教育に於て、手工教育の科があつて、手工教育と社會生活との關係や手工教育と子供の性質との關係を研究させ、またその手工教育の教案順序、並に其問題等を定めまたこれを教ふる教授法をも授くるを以て、こゝより出る教師であれば充分その目的を達することが出來るやうに見うけられる。

余は多くの學校を觀察したが教師はこの方法によりて教ゆるを以て、兒童は非常な興味をもつて、業をして居る許りでなく、創始力、獨立心、及勞働を喜ぶの習慣を養成することが出來るのである。この教育主義の先驅者は二つあつて、一はニーヨークの師範大學一はシカゴの教育學校である。此の二つの學校は、米國で最も進歩したる教育の方法をとれるものであつて、この教育法は大部分、手工の上に基ずくものである。然したゞ手の業を基として教育するのみでなく、兒童の心の發達順序で從つて、進む方法である。その順序としては、一つの人種の發達する順序に準じて居る、卽ち兒童は或意味に於て野蠻人である

から、そのなす所もまたこれに準じて、最も單純な織物、編物、木製の道具を作ること等を授けるのである。而して年とともに次第に複雜の方法に進ませるのである。

斯くするときは、自然に社會發達の順序をその所作の間に見出す事が出來る。ニーヨークのコロンビア師範大學は、如何にしてこれを導いて居るかといふことは、リチャード教授の云ふ所を聞けば、

先づ兒童を原人の有樣である所から始めるのである。卽ちその衣食住は如何になしたかを知つて、これに準じて導くのである。故に第一學年では、原人時代の山獵、漁業等の方法により始め、第二學年に移つては、稍々發達したる牧畜、農業等の業に移り、第三學年は、貿易、商業、運輸等の事に進むのである。右の如く、各時代に分つて、その時代〳〵に用ひたる道具、武器、建築法、運輸の方法等を教へるのである。卽ち今日の美術、技術は、昔時野蠻人の始めたる方法の發達したのであるからである。而して重にその祖先のアリアン人種の原人時代より始めて其發達の順序に從ふて進ませるのである。最もよくこの方法を實驗したのはシカゴ大學のデューエー博士であつて、博士はたゞこの方法を學理的に發表した丈ではなく、自らの學校で、盡く試驗し、實行して、以てその結果をあらはして、一般社會に證明したのである。

デューエー氏曰く、教育に、歷史、科學、並に美術、建築等の材料をいるゝことによつて、吾人の爲し了るものは何であるか。兒童の生活を實際的價値ある樣に進め、またその生活に實行しうべきもので、眞に兒童の藝能となり知識と成る樣に教育することが出來るのである。

今日の教育科目は、傳說的である。故に最も進步したる教授法と雖、この頃統計によつてみると兒童の爲には黃金時代ともいふべき最も發達に必要な三年間の時間の百分の七十五乃至八十は、實質なき記號を覺えさせること卽ち讀み書き算術等の爲め時間を消費して、眞に兒童の腦力を養ふところの滋養質を備へ

今日の教育科目は傳說的なり。

兒童の五感を教育する。

ないのである。故に、その教科目が兒童の智力、或は道德的經驗には無益なものを以て其大部分をしめ歷史にあらはれた實際の眞理、或は萬有にあらはれた事實、或は美、實體等の眞相を知ることは出來ないものである。

吾人の問題とする所は、兒童に吾人を圍んで居る世界の知識、又は世界に籠れる勢力、及び歷史的、並に社會的の成長から眞に有益なものを、どの程度迄、與ふるをうるか。また兒童は自らの能力が、どの程度迄、發現しうるかを知るが最も大切である。

此の教育法を學校に於て行ふに三種の法がある。

（イ）木と道具とを以て作る工場仕事

（ロ）割烹

（ハ）織物卽ち、紡ぎ、縫ひ、編む事

大工、料理、織物等を、殊に科目としたのは、之等の中には最もちがつた技術を教育する要素を含んで、且つ兒童の智力に適當したるものであるからである。

かゝる仕事は、兒童自らも、樂しみ、喜んですることであつて、且つ每日衣食する個人の生活に關係があつて、またこゝに產出した品物を交換することができるものであるから社會に關係すること非常なものである。故に之等は兒童の五感を教育して、頭をも心をも手をも共に働らかすことの出來る能力を與へるのである。又兒童は健康を保つに必要な運動をすることが出來るのを見れば、從來の教科目から凡ての點に於いて必要な活動をさせることを知ることが出來るのである。またこの方法によると、兒童が目的を達するのに最も適當な方法を選ぶ所の判斷力を養つて、秩序を保つて、勞働を尊んで、整頓を喜ぶ所の良習

を與へるだけでなく、組織的頭腦を與ふのである、之等の實際的仕事が成長の後によく學び、よく行ひ、よく耐ゆることの出來る潜勢力となつて又成人の後尤も困難な研究を遂げる所の基礎を作らせる者である。卽ち以上の學科に於て、料理に關聯して科學を教へ、大工によりて幾何學を應用し、織物を爲す際に地理を悟り、且つ人種の進むに準じたものであるから、これによつて歴史的知識を得ることができる。發見がどれだけ社會に影響したかまた其社會の組織卽ち政黨等の由來等を教ゆることが出來るのである。

以上述べたやうに手工教育は兒童の精神を養ふの實質を與へ凡ての知識、觀察力、思想を養つて圓滿な發達を遂げさせるだけでなく兒童はまた喜びて之をなすものである。

今は經驗の時代なり。

女子高等教育に就て

元來女子教育はまだ一般に傳説的の時代、模倣の時代、經驗の時代である。而して女子を知つて居ると云ふものも、多くは書物によるか、然らざれば我が妻、我が娘といふ極めて一小部分の觀察を以て、研究の資料となしつゝあるのである。古來聖人君子と云はるゝ人も、多くは斯かる偏見に陷つて居るので例へば釋迦が女は不淨なりとて退けたのも、孔子が養ひ難しと歎じたのも、乃至はソロモンは女は死よりも苦きものとし、誰れか賢婦に會ひしと嘆息したのも、必ずや婦人の全體を知つての上の論斷ではなくして、多く一方面の觀察、卽ち悲觀的の觀察である。之れ等偉人の言は世人に偏見を起さしめし事多く、一層女性の發展を妨げた。然らば女子教育家は最も多くの女子に接するを以て最もよく女性の研究をなし得るかといふにさうでない。又之れも部分的觀察となるの恐れがあるからして男子の教育家は勿論、政治家も、宗教家も、實業家も共に〳〵協力して最も公平なる判斷を下すことに務めたいと考へてゐる。而して如何

女子の高等教育と人口上の關係。

なる點に研究の必要があるであらうか、目下女子高等教育に對して有する世上の輿論に答へる事が女子高等教育の發展上、先づ必要なことであらうと思ふのである。

第一の問題は女子高等教育は、國家の人口を減殺し、從つて國力の消耗を招くものであるといふ事を、眞面目に唱へた人があつた事である。それで此の女子高等教育反對論に答ふるに實證を以てすると共に、第二に女子の高等教育を如何にして發展せしむべきかに就き、簡單に私の考へを述べて見たい。

第一女子の高等教育が人口の上に如何なる關係をもつものであらうか、生物學者社會學者の研究によれば、人口及び人口に關係ある男女の出生數は、主として食物、卽ち榮養の如何によるもので、榮養の餘裕ある所には必ず人口多く、また生産に關係ある女子が多いのである。一妻多夫といふ風俗は、生活困難なる未開國に多く見うけるのである。動物も雌の繁殖は、榮養よろしきを得ることより能ふので、また出産力の比例は母親の子供を教育する必要の程度によるのである。卽ち卵生動物は一般に生産力が多いのである。人間社會も教育に心を用ひざる野蠻の狀態にあつては出産數は多いのである。然し乍ら出産數は如何に多くとも、之れを教育するに宜しきを得なければ、死亡數もまた多く、其の質に於ても劣つて居るのである。人口の增減を單に頭腦の働きのみに歸し、頭腦を多く使へば人口を減殺する、從つて出産に直接關係ある女子には高等の教育を授くべからずと斷定するのは極めて偏見の論といはねばならない。

殊に眞の教育を與ふれば、決して體力を害ふものではなく、却つて體育は教育の一要素である。勿論男女とも其の腦力が發達するに於ては、出産數は減じてくるが、却て其の質に於ても、健康の度に於ても勝るもので、決して女子高等教育が國力を消耗するものではないのである。

今一つ人口の減少に影響するといふのは、高等教育を授くれば、女子の獨身者を增すやうになるといふ

結婚を否むに至るものあるか否か。

夫婦共稼。

事である。果して高等教育を授くれば女子が結婚を否むに至るものであるか否かは、事實に就て研究しなければならない事である。世界に於て女子教育の最も進歩しつゝある米國に於ては、今より十四年前の調査に於て見るも、其の大學は男子七分、女子三分の割合にして、當時獨逸、佛蘭西には殆ど女子の大學生はなかつたのである。中等教育に於ては米國は却つて女子が六分、男子が四分であり、英國は男子七分、女子三分、獨逸の聯邦中教育最も盛んであるといふプロシヤも男子六分一厘、女子三分九厘の割合に過ぎなかつたのである。然らば斯く中等教育にしても、高等教育にしても、一般に他と比較して普及して居る米國が最も獨身者が多いかといふに、實際は却つてそれに反對であつて、世界中に於て女子の獨身者の最も少きは米國である。卽ち女子の獨身生活の增加するといふ事は、教育の程度に關係するよりも、生活問題、所謂經濟に關係する所が多大なのである。之れによつても女子が自活する事が出來るやうになれば、獨身者を多からしむるものであると云ふことは否定されるのである。我國に於ても既婚未婚に拘らず、女子も何か一つの仕事を持つて居るものが多く、却つて女子が職業に携つて居る事は、結婚後も夫婦共稼ぎをなす事を得て、安心が出來ると見えて、結婚數は女子の職業が增加して行くと共に、殖えて居るのである。之れを見ても女子の自活の道が結婚を妨ぐるものといふ說は、根據極めて薄弱なるのみならず、世界に於て婦人を以て經濟的品性のないものと見なしてゐるのは女子の人格を無視せるの極みで、之れを奴隷視するにあらざれば之れに依賴心、乞食心を與へるもので、個性の發達を傷つくる事は大いなるものである。男女が等しく健全となつて、はじめて經濟界も亦進運に向ふのである。

次に女子高等教育の方法として、女子は美術、文學、宗教に就ては、天才を有するも、科學には果して適するであらうか、否やといふ論である。我れ〳〵が經驗する範圍に於て、それは幾分か左樣の現象を呈

して居る事もある。即ち女子が、文學、美術に關する事には、創始する力があり、發達する見込みがあるが、科學的知識に於ては問題である。しかし之れは獨り女子のみでなく、世間一般に未だ幼稚なのである。殊に西洋では科學生れて三百年、我が國では僅に五十年、彼れは科學の經驗時代に入つて凡そ百年になるが、我れは僅に三十年にすぎぬのである。ことに女子であるから、この知識の發達せぬ事は尤もである。然し女子のこの頭腦を改良することが國民一般の頭腦と關係することが多いのである。即ち先づ家庭に於て、國民の母となる人には科學的知識が發達して居らねばならぬ。それで私は女子教育に科學的知識を學ぶことが非常に必要であると見て、先づこの主義を以て試驗的に教育を施して居るが、決して不可能の事ではないと信じてゐる。それで我女子大學校に於ては、生徒自身、級、寮舍、校風等を研究せしめ、自動、自發の態度を以て進ましめる、或は凡ての學問を統一して、一つの生命あるものに組織して、日常生活に應用し、之れを以て品性を作らしむることに務めて居るのも、皆この科學的頭腦の養成に基いて居るのである。然し私はこの教育法を以て唯一のものなりとはしない。尚他に勝つた方法があれば、之れを用ふるに決して躊躇はしないのである。然し今のところ我が國狀より察し、世界の大勢を顧みれば、畢竟此の方法によるより外はないと考へられるのであるが、なほ此の點にむかつては識者の批判をえたいと思ふのである。

女子の頭腦改良。

女子大學の必要。

次に起る問題は、女子大學を起す必要は充分ありとするも、如何なる方法を以て設立すべきであるかといふにある。國費を以て之れを營むべきか。もしこれが出來るならば結構であるが、實地の問題に至つては、誠に困難である。故に民間に於て之れを起すのが最も策をえたものであつて、次第に其の成績があらはるれば遂には輿論を動かして官立をも設立しうる事はむづかしからぬ所であらうと思ふ。歐米に於ても

多く、此の順で、彼處の大學はおほく男女混淆であるが、純粹なる女子大學は悉く私立である。次に起る困難は經濟問題である。我が國現今の狀態を顧れば、帝國大學を初めとし、女子の教育機關を完備ならしむる事が急務である、また世界の大勢に照して、今後我が國の職責を完ふする上より云ふも、教育を改善すべき點が多いのである。しかし、顧みれば國家は二十三億以上の外債内債を負ふて居ると云ふ極めて經濟難の時に遭遇して居るのである。が經濟難であると云ふて、教育を疎にするわけには行かないのである。こゝに於て官民協力して其の進運を計ることが大切で、殊に男子の教育機關の完備に忙しい今日に於ては、女子教育の如きは民間の力によるのが適當であると信ずる。由來我國では私立學校と云へば重きを置かぬ風があるけれども、此の官私の區別を去り、官民一致協力して我國の教育を發展せしめ、以て其の改善を促がすならば、其の効果の決して尠なからざる事と思ふ。今後我國の國民精神力の死活を掌る教育を改良し、一大發展を促がすには、國民が自動的に其の力を致し完全なる私立の學校を多く興さねば、到底できないのである。獨り完全なる私立學校を起すのみならず、官立學校も大に民力を以て改良し、兩々相俟つてはじめて偉大なる効果を上げうると信ずるのである。

國民教育の始祖。

ペスタロッチ先生

日清日露の大戰爭によつて世界の活舞臺に雄飛するを得た吾々日本人は、今や大國民としての人を作る事が肝要であり急務である。卽ち國民教育の必要を切實に感ずるのである。かゝる時に際し、歐洲に於ける國民教育の先驅者となつて、其の一身を犧牲に供せられた、ペスタロッチ先生の偉業を追想して見たい、そして、偉人の跡を尋ね、偉人の人格に浴してその感化を受けて見たいと思ふ。

教育的革新。

歐洲中世紀頃を暗黑時代と呼ぶ。此の暗黑時代終りを告げて、將に光明時代に移らんとする時、卽ち十五世紀は、實に歐洲文明の曙光と云つて可い。降つて十六世紀より十九世紀までの間には、宗教改革が行はれ、政治改革が起り、教育の革新を見るに至たのである。之れ等大偉業の使命を帶びたものは、チユートン人種である。之れ我國の現今、否、東洋の現今を聯想せしめずんば止まぬのである。

今や將に東洋は暗黑時代を去りて、光明時代に移らんとし、宗教に、政治に、教育に、大革新、開始せられんとしつゝある。之れが爲めに缺くべからざる大震動を起す一大使命を帶びたものは、我が日本人種を除いては、他にないと言はねばならぬ。故に我々は此際西洋文明の今日に至れる所以を研究し、大に今後、取るべき方針を確定しなければならぬといふことを深く感ずるのである。

政治的革命、宗教的革命に際し、必ず之れが原因をなすものは、教育的革新であると云ふても敢へて過言ではあるまいと信ずる。如何となれば今日迄、歷史に殘れる事實に徵すれば、大革新の起る前には、必ず教育的革新起り、政治的或は宗教的革新行はるれば、從つて教育の革新起るは逃がれられぬ原因、結果の法則である。人若し教育の歷史を深く研究せんとならば、人類全體の歷史を研究すべく、政治、宗教の歷史を論ぜんとならば、必ず教育の變遷を講究しなくてはならない。教育、政治、宗教は互に密接の關係を有し、相離るべからざるものである。今、此處に簡單にその關係を知らせんが爲め、變遷の順序を擧ぐれば、暗黑時代より光明時代に移るに至りし震動を復興（ルネサンス）と云ひ、その主義を人文主義（ヒューマニズム）といふ。この言葉を以て十五世紀より十九世紀を包含するを得るのである。この新震動を起した原因は必ず人間である。時代の新主義、新勢力は、偉人に化身となりて宿るのである。その社會と偉人との關係は複雜にして一朝の論ではない。吾々はその新らしき震動を起すには、原動力の必要なることを知らねばならぬ。

模範的教育家はペスタロッチなり。

先生の偉業を追懐す。

歐洲に於て十五世紀、將に往かんとするに當り文學復興が先づ伊太利に起つた。卽ちダンテ、ペツトラー、ホツカチチヨー等はその代表者である。この震動はやがてチユートン人種に移り殊に獨逸に於て非常の勢を以て進み、先驅者としてアグリコラ（一四四五―一四八五）先づ起り、ロイクリン、エラズマス等次第に起り、彼の有名なる宗教改革者ルーテル出でゝ之れを助けしメランクソンの如きあり。十七世紀になつては英國にベーコンが出た。ベーコンの歸納的研究は、實に世界文明に大影響を及ぼしたのである。そのベーコンの新學說を應用して起つたのは、コメニアス、ミルトン、ロツク等であつた。十八世紀に至り、此の主義益々昂り、實行力彌よ盛んとなり、佛蘭西の革命、北米合衆國の獨立を見るに至つたのである。佛の革命、米の獨立を促して主たるものは、ルーソー及びバゼドー等である。ルーソーの教育主義、自由主義を教育の上に實行して、模範的教育を實行した所の模範的教育家は實にペスタロツチである。フレーベルの如きは、その遺志を繼いだ重なものであつた。

ペスタロツチの傳は、偉人の傳として完全なる型式である。卽ちその自叙傳は公平なる筆によつて成り、缺點も長所も、有りの儘にあらはしてある。從つて世に多く傳はる彼れの傳も、文飾を加へて褒め過ぐる事もなく、攻擊することも無い。凡そ人として完全な者は無く、何れも缺點と長所とを持つて居るもので、只これのあらはるゝと否との差があるのみである。ペスタロツチも一方に非常に崇敬すべき美質を備へて居つたが、また一方には非常な弱點があつて、生涯、失敗のみを重ねた人である。

もしこの先生の偉業を追懐し、その人格を慕ふ時、非凡なる手腕あり、學識あり、卓見あり、品性ある人と考へたくなるが、實はその長所は手腕、學問、卓見ではない。彼のベーコンとコメニアスとの關係を叙して、やがてルーソーとペスタロツチとを論ずる事を得るのである。コメニアスはベーコンの新主義、

先生の犠牲。

新方法を教育に實行せし人なるが如く、ルーソーの新主義、新思想はペスタロッチによりて教育に應用せられたのである。ペスタロッチは嘗てルーソーのエミールと云ふ書を讀んで非常に感激し、性來自由を愛する彼は堅忍不拔以てこれを實行した。否ペスタロッチ以前の學者、革命者の學說に生命を與へ、爾來の教育家に精神を與へたのである。

ペスタロッチ先生は如何にもして人類を、暗黑の中よりも救ひ出さんとして、失敗に失敗を重ね、その目的は只人類教育、卽ち上下貴賤老幼男女の別なく教育する事によつて達せらるゝを知つて、終にそこに倒るゝ迄盡したのである。彼は實に人類を愛する念深く、このために一身を犠牲に供したのである。故に彼は人類を己れの如く愛し、わけて貧民や子供等を我が子の如く愛されたと云ふ點は、吾々の學び、且つ感化を受たいと思ふ所である。先生はこの天使の如き精神を誰れから受けたのであらうか。誰れに依つて養はれたのであらうか。必らずやよつて起るその源があつたに相違ないのである。

氏の家庭

先生の人類を愛し、これが爲め一身を犠牲にせられたる天使のやうな精神を養はれた源こそ、實に彼れの母、彼れの下女、其の人である、又彼れの貧しき家庭であつたのである。父親といふのは醫者を業として居つたが、彼れの滿六才の時に病死された。この助け無きあはれな妻や子供を殘して永眠するに臨み、一家を窮困より救ふものは、年久しく使つた、その下女のみであるのを知り、嘆願して言はるゝには、

『神樣の爲めに、また神樣のお惠みの爲めに、どうぞ私の妻を忘れてくれるな。もし私が死んだならば、外に彼女を助ける人は無く、子供は皆他人の手に渡さなければならぬ。あなたがこの際助けてくれなければ、妻は到底一人で子供をも育つる事は出來ない。』

下女ベリーはそこで答へて云ふ様、

『もし、あなたがおかくれになる様な事があつて、奥さんの爲めに此處に止まる事が必要ならば、私は決してこの家から出ません。生涯奥さんに仕へて御心配のない様にいたします。』と、

かうして終に父は逝つた。下女は生涯止まつて、貧困の家を助け、頼りなき母をいたはり共に力を合せて其の遺子の教養に盡力した。もとより彼の女には兩親もあつたであらう、自身の生涯の幸福も望んだであらう。然し凡てを捧げて一家の爲め、一人の爲めに犧牲となつた。此の一家の爲め、一人の爲めに犧牲になつた事が、幾萬人の犧牲と成つたであらうか分らない。幾多の偉業の成就となつたか分からぬのである。その自叙傳にも屢々その下女に就いて、學問はなきも敏捷に働らき、信用厚き女であつたと記してある、また貧しくあつたがまだ子供であつたので氏は人の美はしく飾るを見、樂しく遊ぶのを見ては、自らも美衣を着け、物見遊山に出かけん事を欲したが、この下女は常に自制を教へて『あなたはなぜ必要も無いのに着物をよごし靴を汚ごしたいのですか。母君はどれほど苦心なされて行きたい處へも行かず、着たいものをも着ずに、一厘一毛を儉約して、あなたの教育の爲めに骨を折らるゝかを、知つて居りますか』と、詢々と諭されては、いつも思ひ止まつたと記してある。

忠義なる婢にかしづかる。

ペスタロッチ氏は男子との關係は極めて不幸であつたにも拘らず、婦人との關係は誠に幸福であつた。早く父に別れ、長じては友人の親切をもあまり受けなかつたが之れに反して、賢母を戴き、良妻を持ち、忠義なる婢にかしづかれたのである。彼れの妻は彼が二十一才の時娶つたので、教育もあり、思慮もあり、同情もあつて、生涯氏の事業を助け勵ました事は大なるものであつたのである。

これ等婦人の暖かき愛情と忍耐とは、彼れの長所を作つたのであるが、またその短所も此處に發して居

る。彼れの自ら認むるが如く、悟性的注意、勇氣、沈思、先見の明、決行の勇に乏しかつた爲め、是が彼の前半生の失敗の原因となつてゐる。實に彼は嚴父の教へを缺いて居つた爲め、理性的方面を缺いて居つたのである。卽ち偏したる人物を作つたので、これは誠に彼にとつて此の上ない不幸であつた。

彼れの生涯は、表面は全然失敗の歷史である。然し彼れは偉人と稱され、彼れの事業が偉巧を奏するを得たのは、彼が其の目的の爲めに九顚十起を敢て致したからである。

氏の少年時代

彼れは小學時代より既に失敗の歷史である。背低く、容貌醜く萬事拙劣にして、友より侮どられ、陷しいられ、渾名を附けられたのである。然し彼れは人に笑はれ、侮らるゝも決して怒らず、寬大なる心を持つて、能く忍耐し人の爲めに善をなすことを喜んだ。或時强き地震があつて、敎師始め生徒一同、先を爭ふて逃がれ出で、誰れ一人、大切のものさへ取りに歸るものがなかつた。斯かる時にはいつもペスタロッチを使ふのである。ペスタロッチは之れに赴くに少しも躊躇しない。否むしろ大勢の爲めに善をする機會を與へられた事を喜んでゐた。かゝる有樣故に自然また一方には之れを敬愛する師友も少くなかつたのである。

氏の青年時代

彼れのズーリック大學に入學したのは、未だ青年、寧ろ童兒の時であつたが、早くも其の生涯に於ける目的確信を以て、一身を支配した。而して大人の中に交じりて、運動し、その主義なる自由平等を唱へたのである。當時國民一般自由なく、殊に農民は甚だしかつたのを見て、いかにもして之れを救はんとし、個人として、或は團體として、之れの救濟を試みた。

愛國の爲め、獨立の爲め、

我々の主義は愛國の爲めに、獨立の爲めに、善行の爲めに生涯を捧ぐるより外に一物もなしとは、常に彼れの稱ふる所であつて、換言すれば、國家を救ひ人民を貧窮より、墮落より罪惡より、救ふといふにある。また氏の傳を書ける一著者は之れを稱へて『人道を愛し、人を困難より改善する目的の爲めに、純然たる無私無能は、氏の生涯を解釋するの鍵なり』と記して居る。

氏の成年時代

氏は大學卒業後、己が目的を達する爲めには、神の福音を說くにありとして、牧師として說教壇に立つたが、其の最初に於て失敗を極めたのである。聽衆を前にして其の說教は中途にしてどもり、終に中絕するに至り、終つて主の祈りをするや、また之れを言違ひた。然して彼れは自分を見ることが極めて公平であつたから直ちに天職を誤つて居つたことをさとり、法律を學んで辯護士たらんとしたのである。彼が辯護士たることを選んだのは決して他に野心があるのではなく、實に農民が貴族や市民より壓迫せられつゝあるのを憐れみ、その自由を保護し、塗炭の苦みより救はん爲めであつた。然し漸く、研究をつむに從つて、自分の目的とは全く反對であつて、正義と仁愛とを維持するにあらざれば、能く法律の裁判が國民を救ふ能はざるを悟り、かつ氏の性格の冷靜なる法學に適せざるを知つたので、直ちに職を轉じて、農業に移つたが、またも失敗に歸し、遂に財產をも失ふの窮境に落入つたのである。然し如何程失敗しても彼の目的は決して自己の榮華や幸福のためでない、人類の爲めにあく迄奮鬪する精神であつたから、能く屈せず、倦まず、萬難を排して次第に、研究し、性格を調らべ、かゝる事業に於ては、到底目的を達すべからざるを知つて、此に始めて教育、殊に國民教育に從事することになつたのである。

貧民の教育。

貧民教育に於ては、只知識、品質を與ふるのみならず、同時に職業を與ふる事が有効なるを知り、夫人

の財産を以て貧民工業學校を建てたのは、氏の齡當に三十歳、紀元千七百七十五年のことであつた。

やがて生徒は八十人許り集り、皆衣食を供し、無報酬にて教育を施したが、墮落せる貧民等は感謝といふ事を知らず、新調の衣服を着けては逃亡すると云ふ有様であるのに、つけて加へて貧民の父兄もまた之れを煽動するの狀態であつた。爲めに非常に經濟上の困難を來して千七百八十年廢校の悲運に陷つたのである。然し之れが原因となつて現今世界に貧民教育が行はるゝ様になり、またその教育に於て職業を授くるに至つたのである。氏はこの時、非常なる艱難を嘗め、貧困に陷つたので友は彼れに忠告して、かゝる難事を行ふは終に身を亡ぼし主義を亡ぼすに至るのではないかと云はれた時、氏はこれに答へて、

余が三十年の生活は晝飯を喫せざること千度以上であつて最下等の人民すらも食卓に向ふ時余は之れを行ふを得なかつた程である。余が之れを敢へて爲すは、全く貧民の爲めであつて余が主義を實行するは、實に一朝一夕の事ではない。

と云ふて、困難の爲めに主義を變更すると云ふ様なことは決してなかつた。この後氏は著述に從事して、主義を天下に示さんことに務め、同時にこれをもつて聊か活計の補途としたのである。此の間の著書陰士の夕ぐれ、（リンハルド、エンド、ゲルトルード）であつて國家を救濟するは只教育にありとの宿志を述べたものに外ならない。此の著書をなす時に當つても其の貧困の狀態は、原稿用紙をも買へぬ程であつたので、古き帳面の裏に書いたと云はれてゐる。稿成るや一友に見せた處、文學趣味に缺けて居るとの事でこれに筆を入れてくれた。然しあまり文飾が過ぎて居るので恰かも百姓が立派な衣服を着飾つたかの如く意に滿たぬ所が多いので出版を見合せたが他の友が來つて、更に筆を加へて出版せん事を勸めたので、終にこれを世に公にした。所が世人に非常に愛讀せられ、政府より一つの賞狀を添へて、金のメタル

始めて模範的小學校を設立す。

を與へられた。貧困なる彼れはそのメタルさへも保存し得ないで賣り拂つて衣食の料に供したとの事である。

以上は氏の前半生を述べたのみである。彼れの後半生に於て始めて模範的小學校を設立したが當時氏は恰も五十三才であつた。實に彼れは五十三才に至るまで天職の爲めに準備したのである。そして爾後八十才に至る間非常なる熱心を以て働らき組織的に有効なる効果をあらはすに至つたのである。

余は諸子がペスタロッチ先生より學ぶ所の多いことを信ずるのである。第一、彼れは本末を誤らず、生涯の目的に就て誤らなかつた。只方法を誤つた爲め、失敗に失敗を重ねたが、失敗の來る毎に彌よ奮起し益々熱情を燃やして止まなかつた。殊に學ぶべきは氏の愛情である。人の爲めに生涯を捧げて、無邪氣な公平な生活を送つた所である。もし教育にして愛情なくば、眞の教育とは云はれない。先年余は米國の教育を視察して感歎に堪へなかつたのは、白痴院であつて、教師が親より深い愛情をもつて數千の白痴を教育されて居つたのには看る者をしてそゞろ感涙を催さしめたのである。而して院長が語らるゝには、余等が白痴の教育に從事するはこの上もない幸福である。六ケ月間、この教育に從事すれば、到底止むるに忍びぬのであると。親が不具の子供に一層の愛情を注ぐにまして、この師は他人の生んだる幾萬の不具者を掬育しつゝあるのである。斯の如き精神を生み出さしめたのは、ペスタロッチ先生が人類を愛し、殊に子供を愛して教育の爲めに犧牲になつた精神の感化であると信ずる。わが女子大學校に於ても小學、幼稚園を設けてあつて教師が親より深い愛情をもつて教へてゐる、が今ペスタロッチ先生に學ぶは、わけて必要であらふと思ふ。

氏の後半生

事業の第一着。

命を奉じて直ちに一寺院を借る。

氏の前半生の歴史は前に述べたる如く、殆ど失敗を以て充ちてをつたのである。然し其の失敗は氏の生涯の働らきの爲めには有益なる準備であつたのだ。それで其の後半生の歴史は、稍々成功に近く、事業の發達は一層自然的に、一層論理的になつたと云ふことが出來る。後半期とは卽ち氏の五十三才より八十二才の死に至る迄の間である。

其の事業の第一着は、今より百年前、佛國の革命時代の事で、政府の命に從つて建てた孤兒院であつた。卽ち氏の生國なる瑞西も佛國革命の餘波をうけ、瑞西の首府スタンヅは、佛兵の爲めに燒き拂はれ、多くの人民は產を失ひ、親を失うて、路頭に迷ふに至つた。政府はそこで先づ孤兒を救はなければならない。時にペスタロツチ氏はルーソーの自由主義を稱へ、如何にもして人民を塗炭の苦より救はんとし、革命の卒先者として、大に政治的勢力を有してをつたのである。時の政府は氏に一つの地位を與へて、政府黨に引き入れやうとした時、氏はこれに、

『余は一學校教師たらんことを望む』

と、答へて、更に應じなかつた。爲めに政府は氏をして、更らにスタンヅ府の孤兒を救ふ教育の任に當らしめやうとしたが、これには氏も大に喜び、其の命を奉じて直ちにス府に赴き、一寺院を借りて、これが設備に當て、集り來れる多くの孤兒の父親と爲つて、懇切に世話し、衣食を給し、兼ねて稱ふる教育法を實行してみたのである。この企ては大に成功したと云うても可い。如何となれば、彼れはこれ迄に於て、教育上の經驗を積み、己れの主義を定め、理想を實施するの便を得たからである。この時氏は五十三才にして、今より恰度百年前であつた。

これ先生の生涯の前半生から、後半生に移つた著しき變化であつて、前半生の失敗は、後半生に移つて

以來二十年間、稍々秩序的の仕事をするの準備となつたのである。然し此處に失敗といふことは全く氏の歴史から辭するに至つたのであらうか。彼れの準備の時代は後半生に移るとともに終りを告げたであらうか。否、否深く考ふれば、氏の歴史は生涯を通じて失敗であり、天職の爲めの準備であつた。彼には死する迄一日として滿足し安心した事はない。漸くにして積みたる經驗を以て主義、理想を實現せんとしたる時、彼の生涯は、既に終りを告げたのである。先生は失敗に失敗を重ねて準備の時代に斃れられたのである。然し先生の事業は失敗には終らないのであつた。その教育主義は十九世紀を待つて美はしき芽を出したのである。先生の生涯の準備は實に十九世紀教育の準備であり、文化の母であつた。一人のペスタロッチ先生なくば、現今世界の文明も、或は斯くの如くに進歩しなかつたかもしれない。先生は今尚ほ吾々の胸中に若く生き殘つて居られる。否、恐らくは永久に人々の胸中に若返へつて、死する事のないのを信ずるのである。

扨て、かの孤兒院は、憐れ窮民を飢餓より救ひ、國民を墮落より救ひ、人類として高尚なるものたらしめんとの目的よりはじめられたのである。而して教授と訓練とを以て子弟の智德を高むると共に一方手工教育を授けて、獨立自營の道を習はせた。

手工教育。

氏の教授法を一言で云へば From within to without 卽ち內から外にといふ所謂開發主義である。當時一般の教育は From without to within 卽ち外から內にといふ所謂注入主義であつたが氏はこの注入主義の弊害を早く看破せられて、之れに逆つて起つたので、開發主義を貫かんが爲めの困難は、眞に容易ならぬものであつた。

かゝる目的を以てかゝる教育主義を行うた孤兒院は如何なる成績であつたか。凡そ十名計りの生徒は殆

我れ何物も有せず只孤兒あるのみ。

んど乞食と、病人と不具者とであつた。先生はこの子等を眞に己れの子等の如く愛しみ、夜を日に次いで倦むことなく萬難を厭はず、百折に屈せず、世の迷ひ兒等を人となす事に務めたのである。この時の經驗を氏は自ら叙して曰はるゝ樣、

『一切の世話と、一切の教授とは、悉く自らこれに當らなければならなかつた。』

と。眞にその境を經驗した者には、この數言は身にしみて覺ゆるのである。もとより先生のそれと比較にはならぬが思ひ茲に至るの時、そぞろに往年、余の梅花女學校設立當時の感を想ひ起されるのである。庶務から、會計から外廻りから、教授から一切引受け、尙自らの修養を續くる爲には、僅かに三四時間の睡眠さへも取り兼ぬる有樣であつて、一分一秒として心身を安きに置くことは出來なかつたのである。然し先生のこの言には實に深い知己の感をもつ事の出來るのを喜ぶのである。諸子も或はいつかこの言に對して、無限の感慨にせまる事があるであらう。凡て人の傳を讀んだならば、自らの經驗に照らして、假令その經驗に大小の差はあれ、同情を起すのは、眞にその傳を生かして、短所はこれを省いてよく、長所はこれを習ふてよいのである。

先生はまた記して云はるゝ樣、

『我が目は彼等の目とはなれなかつた。我が手は彼れ等の手に觸れ彼れ等泣けば我れ泣き、彼れ等笑へば我れ等も亦笑ふ。彼れ等の食物は我が食物、彼れ等が飲み物は我が飲み物である。我れ何物も有せず、家も無く、友も無く、婢僕も無く、只孤兒有るのみ。彼れ等健康なれば、我れ喜び、彼れ等病めば我れ側らに起つてゐる。我れは常に彼等の中央に眠り、衆兒に後れて寢ね、衆兒に先だちて醒めるのである。』

先生は如何に成功せられたか。

と。先生のこの愛情、この至誠は、今日もなほつきぬ、感化力を有するので、人を教育するにも、家を治むるにも實にその源は此處に發するのである。また先生の記されたるものゝ中に、最も善き教育に於て、母たるものは兒童の目に於て、唇に於て、顏色に於て、少しの變化によりても、其の心の變化を時々刻々に察することが出來なくてはならぬ。

『教育家の力は卽ちその父親の力でなくてはならぬ』

と。これ誠に同情の化神として、教育することの必要を述べられたのである。また、

『第一に爲すべきことは兒童の信用と愛情とを得るのにある。この信用と愛情とを得るに至らば他の何事も容易に出來得るのである』

と云はれた、また目的を云うて居らるゝ言葉に、

『余の目的の一つは彼れ等の新生命を一般的にする事と、彼等兒童の間に兄弟、姉妹の間柄の如き感情を生ぜしむる事である』

と。先生はこの目的を如何に成功せられたかといふに、

『この七十人の孤兒の間に、この目的を達することはさほど困難ではなかつた。暫らくにして彼れ等は眞の兄弟姉妹も及ばぬ平和と友愛とを生ずるやうになつた。』

と。秩序なき孤兒、貧兒の間にかく美はしき感情を養成したのは、實に先生の泉の如き愛情の感化に外ならぬのである。

千七百九十九年佛兵再びこの地に侵入し、此處の寺院は徵發せられて病院となり、解散の悲しみを敢へてしなければならなかつた。時にペスタロッチ氏は過勞の爲め、健康を害ねたが、その主義の爲めに彌よ

父兄も亦大に不平なりし。

彌よ熱誠を以て勇進した。そこで解散したる孤兒院を再び建てやうと企だてたが、政府はこれを許さなかつた。氏はこれが爲に一層その理想を實現せんとする熱情極度に達し、一學校の教師となる方法を講じた。卽ちペルネケンのブルグドルフと云ふ町の小學校の教師を無給でつとめさせてくれるやうにと嘆願したが學務委員はこれを拒絶した。其故如何と言へば彼れは嘗てリンハルト、エンド、ゲルドートと云ふ小說によつて多少世間に名を知られたのみで、教育家として價値の認めらるゝものは一つもない彼の如き者に教育を委すると云ふことは甚だ危險であるのみならず、彼れの力は到底其の任に堪へないと云つた。一般の評判も「彼れは學校を始めたが豫定の通りまた出來なかつた」とか或は「彼れは無學である、且つ彼れの事は實行せられぬ。彼れは三十にして一つの小說は書けたが、五十にして其の持論はなほ行はれない」と云はれたほど學者としても實行家としても力がなかつた。且つ彼れの言葉は澁滯し、字は拙く、畫學は出來ず、文法は寧ろ輕蔑して習はなかつたし音樂は不得手であつて、如何に熱望しても、當時の小學教師となるの資格が無かつたのである。然しこのブルグドルフの町に只二人氏を知る者があつた。其の一人は知事であつたので、その周旋によつて、ブルグドルフの下町にある最下等の學校に奉職するに至つた。けれども不幸にして其の校長が保守であつた爲め、氏の開發的教育に大反對であり、父兄もまた大不平を鳴らしたので止むお得ずブルグドルフの上部の小學に轉職せられた。始め最下級である五歲から八歲迄の子供を擔任したが、これは非常の成功を見るに至つたのである。卽ち從來の弊風に染まぬ子供であつたからである。圖畫を教うるにも、始めから手本に臨ませず、まづ實物をよく觀察させる、それで或時窓の繪を書かしめやうとして、教室の窓を觀察させた後、手本を見て書くことを許した、すると一兒童が頻りに窓を凝視めて止まず、暫らしくして「先生私どもはあの窓を直ぐ書いたらどうですか」と問ふたので

公立學校の失敗。

先生はこの一言に非常に感じ、益々開發的教育の價値を確めた。後ち十五歳位の組を受持つやうになつたが、此度はまた失敗であつた。これは生徒にも宿弊はあつたのだ。先生にも缺點があつたのである。卽ち氏は餘り熱心であつた爲、方法を誤つたのである。一生徒の當時の日記に「先生は八時から十時まで汗を拭きふき授業し、なほ十一時迄も續ける」とあるを見ては、教授を喜ばぬも當然である。

かく公立學校に失敗した彼れは大に悟り己のが教育主義を實現せんには、私立學校に依るの外なしと、專心、模範的小學校の設立を欲して、其の結果之れを設立することを得て、しかも今度は成功し、政府よりも保護を得るやうになつた。然し晝夜非常の苦心をかさねられた爲、終に健康を害し、年來の宿望も、こゝに中絶せんとした。先生は失望の餘り「我が事終れり」と嘆息せられたが、天はなほ氏を捨てず、そこに有力なる助けを與へたのである。卽ちブルグドルフの城に住めるクルージーといふ教育家の偶々氏と同主義同精神を抱き、私立學校を起して大に企圖する所があつた。此に於てペスタロツチ氏と力を協せ、かの學校を盛ならしむるに至つたが、この兩人は同情を以て互に助け合ひ兩方とも負ふ所が多かつたのである。爲めに校運日に榮え、理想的の發達を見るに至つた。そして其の學校は暖かき一家庭の風をなしてゐて、一日こゝを訪れた生徒の父兄は「ペスタロツチ氏は教師にあらずして寧ろ親である」と感じたと云ふことである。

千八百二年、瑞西に內亂が起つて、佛兵の爲め諸所を侵された。此の際氏は撰ばれて談判委員となり、佛國に至つて、ナポレオン一世に謁するのを榮を得たので彼れが兼ねて教育主義を陳述して、賛成を得、佛蘭西にもこの種の教育の發芽を見るに至つた。

然しこの模範的小學校も僅か三年半にして閉校しなければならぬやうになり、更に、この地を去る三哩

歐洲諸國の留學生

シュミツドは實行的規律的の長所あり。

のブグゼイの小學教師となり、後ち千八百五年イブエルダンに一學校を設立した。この學校こそペスタロツチ氏のメツカとも云ふべき地であつて、兼ねて保持せる其の教育主義を實行して大に盛大に且つ成功の機運を見るに至つた。こは重に内部の整頓によつてである。卽ち氏の膝下に教育せるものが氏と共に教育の任に當り、適當なる保護者となつたからである。爲めに氏の教育主義は、國内は勿論は、遠く外國にも轟くやうになり、笈を負ふて來り學ぶもの國内は云ふまでもなく、或は獨逸の皇族あり、貴族あり、學者あり、宗教家あり、政治家もあると云ふ風であつた。プロシヤより大臣がわざ〳〵書面を添えて、有爲の青年二人を留學せしめ、其の他丁抹、和蘭等、歐洲諸國の留學生四十人以上に達し、なほ英米よりも續々氏を訪問するものがあつた。其の門弟の有名なるものは卽ちヘルバルド、フレーベル等である。

ペスタロツチ氏、今はかくの如く、成功するに至つたが、なほ一日として休むことなく、非常なる奮闘を續けられた。或人が氏の當時のことを書いて、ペスタロツチ先生は毎朝二時に起きて著述に從事せられた。こは一般校内の手本となり、一生徒の記せるものに、「余等は朝三時にしてなお床に就けることなし、三時より六時迄に、一日の最も大切なる事を行つた。」と。此時を以てペスタロツチ氏の全盛時代と云ふても可い。内は整ひ、外は同情者が充ちて居つた。然し漸く患ひは内に萌した。校運を廢頽せしむる敵は内に潜伏して居つたのである。直感に富める氏は早くもこれを洞察して防禦したが終に力及ばなかつたのである。そはニーデレル、シュミツドの兩教師からである。ニーデレルは哲學的、議論的の事に長じ、外部に向つてペスタロツチ先生の主義を廣むることに務め、先生の右腕となつて事業を助けられた大役者であり、シュミツドは實行的規律的の事に長じ、内に教授を助け財政を整へて、先生の左腕となつて働いた。然るにこの兩人の間に面白からぬ、感情蟠まり、互に嫉妬し、猜疑するに至つた。ペスタロツチ先生

の高徳も、終にこの卑劣なる感情によりて破壊せられ日を逐ふて良教師は相距り生徒は去つて、先生の當に死なんとする時、再び閉校の悲運を見るに至つた。先生は千八百八年校運の當に全盛を極めた時に、この禍根を見出しその一月元旦に於て血を流し、肉を割き、命を致して、その人々に忠告的演説を試みられた。これは實に先生の最後の言葉と云ふてもよい。卽ち

「舊年は去り、新年は來れり。今、余は諸子の間に立てり。諸子は余を以て喜びに充てりと思ふならんも、余は胸中一つの喜びなく、只余の終りは近づけりと考へらるゝ事、頻りなるのみ。

今や余が頭上には天よりの聲響く「神の僕は、其の職務の報告書を出せ」と。余は完全なる報告書を奉るを得べきか否か。また余は神に對し、人に對し自分に對し、忠實なりしか、否か余は幸福なりや、余の幸福なりと云ふ聲は蜜峰の翅の如く響く、余は今、死なねばならず、然れども、余はその幸福をうくるに値せず。

故に余は幸福ならず。過ぎ去れる年々は幸福なりしも、もはや歩まんとする途上の氷は解けたり。余の天職は早く失敗に歸せり。互の關係を結べる、最も強しと考へたる結合力は最も弱かりき。余が救はれんと思ひしことは全く滅亡に歸し、平和ならんと思ひしは僞りにして、慈愛は實に冷酷なりき。……

……

余は誠にあはれなる、謙遜なる、不德なる、價値なき、無能、無知なるものなりき。然し自らの力足らぬにも關らず、仕事に猛進せり。世の人は狂氣と嘲りしも、大神の手我れと共にあり。而して余の事業は榮え、余と余の事業とを愛する友人を得たり。然し余は爲したる事を知らず、余の爲めに何が必要なりしかをも知らず。然れども余の事業は無一物より榮ゆるを得たるは、恰も天が渾沌の中より天地を創

余の事業を愛する友人を得たりと。

造したるが如し、これ余の仕事にあらずして、神の仕事なり。願はくは神の働らきによりて吾々の新らたなる結合を計り給へ、その結合は惡魔の使ひの如くならず、天使と天使との一致の如きを望む。余往年虛弱の身體を以て馬の危難より逃がれしを不思議に思ふならん、その不思議にもまして不思議に余の事業の保護されんことを望む。……

余は間もなく死するも、今日のこの言は永く諸士の胸中に命あらしめよ。友人諸君、余の生涯に於て失敗せる仕事は、諸君によりて遂げられんことを望む。諸君は前途の障害物を除き、余の失敗に顧みて、其轍をふむこと勿れ。諸子よ外面的成功によりて欺く勿れ。諸子は實に重大なる犧牲を要求されつゝあり。何事も犧牲を待つて始めて完全に發達するものなり。現在の喜悅名譽は野にある草の如く凋み、春咲く花の如く散りうするものなるを忘るべからず。」

恰も正月の朝、かゝる悲慘極まる演說を試みられたが、終に彼れ卑劣漢の心を動かすに足らず、禍は漸くその根を擴め、校運は次第に零落して來た。間もなく氏とともに多年困苦を共にして、其の事業を助けた妻は逝去された。氏は餘命を田舍にある孫の許に養はれたが、世評漸く惡しく、一新聞記者ビーバーは非常なる誤解を以て、之れに妨害を加ふるに至つた。氏は之れに辯解の語を爲さんとして一論文を執筆中永眠されたのである。その臨終に、

「今や瞬時にして、余は黃泉の客たらんのみ。余は敵を許せり、彼れもまた枕を高かうして眠るを得ん、余もまた限りなく眠らんとす。余は余の答辯を終らん爲め、六週の生命を望みしも、天之れを許さず」

と。かうして終にこの世を去つた。かへりみれば先生が終生失敗を重ねて、攻擊迫害と戰ひ、困難辛苦を

事業を助けた妻は逝けり。

今日の青年の求むるは決して眞の成功にあらず。

排して、飽までもその主張を貫いた剛氣とまた一方に於ては心より人の罪を許し、或は小兒にも婦人にも親切なりし愛情とは、實に稀に見る所である。先生の傳を書けるものが嘗て、「彼れは獅子に似て小羊の如く大人に似て子供の如く、勇士の如きかと思へば婦人の如し」と。卽ち柔の中に剛あり、剛の中に柔ある、多面多角の性を有して居られた。それで、種々の方面より觀察して、先生に學ばなければならぬ點が多いが、その重なるものをあぐれば、

第一　本末を顚倒せられず。卽ち生涯の目的を誤らず天職を全ふせられた。假令方法を誤つて一時は不成功の如くであつたが、實は眞の成功を遂げられたのである。今日の青年が自らの地位、名譽、安樂をのみ求めてその天職を忘れて居るものは、一時の外面的成功は知るも、決して眞の成功は知らないのである。先生の如く、天職を認め、目的の爲めに生涯奮鬪して止まなければ、地位、名譽、安樂は得られなくとも眞に幸福であり、愉快である。この眞の幸福、愉快は、天職を確信して起つた人のみの知る所である。

第二　愛情、犧牲の精神が先生をして斯の偉人たらしめたのである。卽ち人類を愛し、それが爲め一身を犧牲にせられたる點である。彼れは死しても、彼れの精神は死なない。而して是は何人と雖、その萠芽を有するので唯養つてゐると否とに依るのみである。卽ち何人と雖、偉人となる資格を具へて居るのである。今日我國に學者も手腕家もあるが、偉人はない、偉人なくば教育も出來ず、社會の感化も行はれぬのである。我々が一度國の爲め人の爲めを思つて、之に一心を捧ぐるに至らば、名譽も情愛も、迷ひの雲霧も晴れ、死を恐れず、毀譽褒貶に關せずして、目的に向つて勇進するを得るのである。

第三は至誠である。これは心より何事をもなし、一生務めて止まず、まごころを以て物をすることであ

る。先生が、萬事に拙なかつたにも拘らず、人を動かす力があつたのは、實に至誠に外ならないのである。

ペスタロッチ先生を偉人たらしめたものは、決してその手腕でもなければ、學識でもなく、卓見でもない、而して先生の精神と實行とは何人も學ばなければならぬ點であり、また學びうるの萠芽を有して居るのである。

第四　國民一般

奉祝天長佳節

謹みて我が　聖上陛下の御誕辰を祝し奉る天長の佳節に當り、余は萬感交々至つてその止まる所を知らないのである。余はこの深き感じを遺憾なく叙して、頌辭に代へんことを望むのであるが、思ひ深うして到底言葉は之を叙するに足らない。もし強ひて一言以て其の所感を表はせば、非常な感謝の念に滿つると共に、非常なる恐怖の念に驅られ而して又非常なる希望に滿ちて居るとでも云はうか。換言すれば、この感謝と、恐怖と、希望との三つの深き感動の爲め非常なる奮闘の狀態になるのである。この奮闘は余一個の奮闘ではない。寧ろ我が帝國の奮闘である。明治維新以來、四十有四年間、一日も休みなく、奮闘を以て今日に至れる我國は、今や如何なる陣容を以て如何なる奮闘をなしつゝあるのであらうか。過る數十年間に於て我が國は俄かに世界の大勢の中に加はり、諸强國と生存競爭を始めて居る。そこで到底之れ迄の如く、片隅に蟄居し、孤立して生存する事は出來ぬ狀態となつて、先づ富國强兵、卽國の實力を發展せしめなければ、國家を維持する事が出來ないことを痛切に感ぜしむるに至つたのである、然るに我が國は三十年來、尙武の精神を以て立つてきて居る國なので强兵と云ふ點には敢へて、諸强國に遜色なしといふ自重心は容易に起す事が出來、また實際日淸、日露の二大戰爭に於て之れを證明するこが出來たのであるが、獨り富國卽ち一國の身體なる經濟の點に至つては、國民擧つて、十分の勝算ありとは認められぬ。今

我が帝國の奮闘。

日の奮闘は實に此處に源を發して居るので、今日の財政を如何にすべきか、我が國の商工業を如何に發展すべきかを憂ふるのである。次に來る問題は我が國の女子教育である。いま更ではないが、國家の運命のかゝる我が國の婦女、第二國民の母たる我が國婦人は、果して其の責任を完ふするに足る能力を發展しうるやいかにと云ふ問題である。我々は此の問題の解決を求めんとして、三十年間一日の如く奮闘し來つたが、未だ十分なる結果を得ぬのである。余自らも女子教育に從つてより、もはや二十有六年であるが、未だ女子にして女子教育を指導しうるに足る人が稀れであることを感ずるのである。中には殆ど一身を捧げ、寢食を忘れて盡さるゝ人もあるが、どうも身體が弱い、況して力の餘裕を以て十分智力を磨き必要なる道を開拓し行く事は前途なほ遼遠である。何時迄働らいたならば我が國婦人は自ら起つことが出來るやうになるであらうか。果して我々が理想の時代は來るであらうか。日暮れて道は遠く、我々が奮闘の力は、疲れんとするに、はや既に婦人の運命はつきんとするのではないか、萬一かくの如き有様に陥らば我が國の運命は已につきたるものといふべく、我が國の運命にしてつきんか、東洋の運命ははや終りである。

更らに目をあげて他の方面に及べば或は男子の教育に或は政治界、經濟界に至る所、今や悲觀すべきことに充ちて居る。これは國家の樞要の地位にある者も同感である。余は一方にかくの如き悲觀を抱くが、然しその悲觀の爲めに弱るものでない。また困難の爲め思ふやう出來ぬ爲めに止むる事が出來るか、斃れても碎けても我が始めの決心を枉ぐる事は出來ない、希望を葬る事は出來ない。困難なれば困難なるほど、希望はいや勝るので、其の困難と希望との間に奮闘が起るのである。

かくの如き奮闘の間にありて、天長の佳節を迎へ、大に我が心に慰安を與へられ轉た感謝の念に堪へな

御盛德は國民の上に非常なる感化を與ふ。

いのである。畏しこくも今上陛下の御盛德は國民の上に非常なる感化を與へ給ひ、我が國の教育は振起せんとしつゝあるのである。これは余が一片の感じにあらずして、我が國教育界の事實より、結論したのである。卽ち　陛下の寶令を考へ、明治の歷史を顧れば時の割合には非常なる進步である。而して教育の如きも、過去の成長に照して將來に多大の希望を屬する事が出來るのである。我が教育勅語は、明治廿三年十月卅一日に下し賜ふたもので、余は當時多年疑問とせる女子教育上其の他の問題を抱いて、洋行を企て、恰も新潟を出發せんとする時であつた。今は此の時より僅か十七年ではあるが、其の問題とせる女子教育は次第に解せられて理想は着々實現せられんとしつゝあるのであるのみならず、文部省を置かれてより三十九年である。その以前の教育の程度は如何なる有樣であつたか、明治五年の學事奬勵に就て仰せ出され書を讀めば、略當時の教育の有樣が伺はれるのである。その一節を拜讀すれば、

道路に迷ひ飢餓に陷り、家を破り、身を喪ふの徒の如き、畢竟無學よりしてかゝる過ちを生ずる也……學問は士人以上の事として、農工商及び婦女に至ては、之を度外に置き……士人以上の稀に學ぶものも、動もすれば國家の爲にすと唱へ、身を立るの基たるを知らずして、或は詞章記誦の末に趨り、空理虛談の途に陷り其論高尙に似たりと雖、之を身に行ひ、事に施すこと能はざるもの少からず……自今一般の人民華士族農工商及び婦女子必ず邑に不學の戶なく家に不學の人なからしめん事を期す……人の父兄たるもの、宜しく此意を識認し其愛育の情を厚くし、其子弟をして必ず學に從事せしめざる可らざる也……。

余は此の御書出でゝ、二年目に山口縣の師範に入り翌年卽ち三年目には室津郡の巡回訓導となつて、多くの人に教授法を教ゆる事を命ぜられた、思へば夢の樣である。僅かに十七八の若年の巡回訓導が、十數

御教育に御熱心。

の小學校長を集めて鞭の使ひ方から體操等を教へ、また小學校創立の計畫をも有志者と共に謀つたのである。當時の教育がいかに幼稚であり、不完全であつたかはこれを以ても容易に想像することが出來やうと思ふ。教育普及して一般人民の子女が、就學するに至つたのは近頃のことである、女子教育も一部宗教家等の手になつたのはとにかく、教育勅語の發布せられたころは、女子教育に反動起り、教育は女子に不必要なるのみならず、有害なりとまで、攻擊する者があつた。それが中等教育の必要を認むるに至つたのは、十四年前であり、高等教育を與へる事を社會が承認するに至り日本女子大學校の創立を見るに至つたのは、實に十年前である。斯くの如く過去の歷史を辿つて、今日の有樣に思ひ合せると、其の進歩の寧ろ驚くに堪へたるものがある、世界各國の歷史に比して、敢て遜色はないのである。我々は明治五年に仰せ出された御書を讀み二十三年の教育勅語を拜讀して、今上陛下の御盛德を仰ぎ、其御教育にいかに御熱心に渡らせらるゝかを思つては實に感謝の念の心中に充滿するのを覺えるのである。また陛下は東宮殿下の御教育に大御心を注がせ給ふこと深く、其の御教育は實に國民に模範を垂れさせ給ふのである。東宮殿下屢の御旅行の如きも、外國の交際の有樣、地方狀況教育の有樣等を親しく御見學になり御奬勵になるといふ事は、いかに陛下の思召深きかを感ずるのである。そして教育が書物のみにあらずして、社會の活劇を見聞し、世界の舞臺に活躍して、人間社會を知り、之れに關係を有して、始めて出來るものであるとの教育法を示し給ふたのである。皇后陛下に於かせられても、或は親しく華族女學校を起し給ひ、或は慈惠醫院に庇護を加へられ、女子高等師範學校に行啓せさせ給ひ、或は女子大學の創立をきこし召して御下賜金の御沙汰があつた事等は、我が女子教育、慈善事業を御奬勵になる上に、如何許り力ありしかは今更ら申す迄もない事と思ふ。我々は明治の聖代にあうて、斯くの如き優渥なる君恩に浴しつゝあることを感謝す

ると同時に、益々國運の隆盛を計るために、終り迄奮鬪するの覺悟を更に強うしなければならぬのである。

今日の日本

我が國の新世紀。

嘉永年間の米艦來訪を以て假りに我が國の新世紀を劃するとせば、此四十一年は恰かも前半世紀の終りで、明治四十二年以後は後半世紀である。而して前半世紀間ほど我が國民が政治、軍事、教育、宗教、商工業等在ゆる方面に於て多種多樣なる出來事に遭遇した時代は、我が歷史上前古未聞のことであると同時に、五十年間の經驗を重ねたる新日本の國民はその遭遇したる出來事によりて堅實なる經倫を立て不拔の精神を以て後半世紀を經營せねばならぬと思ふのである。卽ち政治社會は三百年來の遺物たる封建制度より其崩壞と共に王政復古となり太政官時代より內閣制度に移り、或は廢藩置縣、地方會議の創設、市町村の改革を經て遂に憲法の制定を見るに至り今日の立憲時代を迎へたのである、而して帝國議會も明治二十三年第一回の召集以來少からぬ經驗を重ねて憲政の運用にも玆に一生面を來さねばならぬ時であり、又其の來らん事を希望するのである。

世界的商工業。

商工業の社會も一國內の地方的關係に過ぎざりし時代より、國交通商の開かるゝに伴ひ、世界的關係に結び付けられ孤立的部分的商工業は著しく變遷して今や一躍世界的商工業を經營するに至つたのである、斯の如く其の舞臺が押擴げられたる吾が經濟社會の盛衰は實に國力の消長の繫がる所であつて、戰後の創痍全たく癒ゆるに至らず、至る所萎微不振の聲を聞くのであるが、物窮すれば必らず達するで一陽來復の時期は必ず來る事と思ふ、又わが國民も大勢の趨く所、萎縮すべき時ではなく、徐ろに飛躍の實力を養ふ

事に努力せねばならぬ時期である。

宗教社會も又た西洋思想と共に新宗教の輸入となり、從來の宗教も之れに刺戟せられて徒らに過去の因果を說き未來の冥福を念ずるのみでは、宗教として現世の價値を失はんとするに至り、自ら活ける社會に出でゝ、現在民生の安寧幸福を增進する爲に盡さねばならぬ時となつた。

教育社會の遭遇したる變遷も實に著しいものである、女大學や、寺小屋時代であつた半世紀の初期と、今日數個の大學、各種の高等學校中小學等の官立學校を始め民間私立の學校も年と共に勃興しつゝある有樣とを比較すれば殆んど隔世の感がある、殊に近來官立私立の間に橫はれる障壁の漸次に除去せられんとするの傾向を見るのは祝すべき現象であると思ふ。教育は單に官府の手にのみ一任すべき者でなく、國民自らも其責任を分擔し、其の經營に當るべきである、限りある官府の財政を以て、無數の靑年の教育的要望を充すべき機關を設備する事は到底望むべからざる事で、民間教育が一層勃興し、公私相提携し、協同戮力に其缺を補ひ、其の特長を發揮せしめ、自由に其精華を發揮し、恰かも百花咲き亂れて紅白紫黃其の妍を競ふが如く、各種の方面に有用の人材を輩出して國家の急務に應じ、時代の要求を充たす事が出來るに至れば國家の進運を助長することであらうと思ふ。

其の特長を發揮せしめよ。

之れを要するに在ゆる社會を通じて世界の潮流、時代の步調、寧ろ宇宙進步の大勢力に促されて之に適應せんが爲に種々なる變遷を來したのであつて、機運の向ふ所整然たる徑路脈膊の存して居る事を認められるのである。

斯の如く今日の日本は既に此の世界の潮流に乘じて纜を解かれて居るのである、吾々は古今の歷史の證明する所により其の機運の勢力は實に絕大なるもので、國家も社會も此の大勢に順ふものは興隆し之れに

逆らふものは衰亡する事實を認むると共に、吾々教育社會の責任の重大なることを感ぜずには居られないのである。

國民の覺醒期。

現に島帝國の四面に打ち寄する所の大潮流は何であるか、政治的軍事的大激流は幸にして聖上の御稜威と精鋭なる陸海軍によりて、毎度勝利の榮譽を負ふて打ち退くる事が出來た。併ながら續いて來る所の商工的大潮流は更らに永久的のもので、半世紀前に浦賀に轟きし砲聲に比し、又た前後二回の大戰役に比して一層强大なるものであつて、國民の覺醒奮鬪を要する、今日より急なるはないと思ふのである。

抑も過ぎ去りし五十年間の變遷發達は、其の機運を未然に察し心血を濺いで國民の隋眠を叫破したる幾多義烈なる志士先覺の賜物である、而かも一般の社會より云へば多くは此の大勢に壓迫せられ時運に餘義なくせられて推移した結果であつて、他動的消極的進歩と云はねばならぬ、故に國民をして明かに此の大勢を看取し時代の傾向を察し之れに適順する所の自動的積極的歩調を取らしめるのは教育の力に俟たねばならぬのである。吾々が教育社會の責任の重大なるを感ずるのは實に此の點にある、卽ち官もなく、私もなく、兄弟内に鬩ぐの島國的陋習を打ち破りて共同戮力教育の力を全ふして國民と共に世界の大勢に向つて進むべき大目的、大信念、大希望を以て、後半世紀を迎ふ可きものと思ふのである。

國の原動力は何か。

國力の涵養

國家の身體なる經濟上の羸弱を救治するには、先づ國の精神力、國民の意力、智力、腦力、健康を强固にすべきである。此の精神力の旺盛を謀る外に經濟力の增進、商工業の發達を期するの途を講ぜねばならぬ。しかるに此の國の基礎たり原動力たる、精神力の狀態如何、是を知るに智力の現象たる各種の發明品

青年自身の罪ならぢ。

に就て見ると、米國には毎年平均二萬件以上の發明がある。翻つて我が國の總計にすれば米國の五十分の一位で、加之發明品の多くは其の礎を外智に假り獨創の知識によるものは、殆ど稀有なりと言ふに至りては、また嘆ずべき事實である。次に國家の生命たる精神力は何か、ゲーテは「一國民の運命は其の國に於ける二十五歳以下の青年の輿論の上に繫る」と云つた、敢て問ふ、我が國青年は果して確固たる信念があるか、崇高なる品性があるか、偉大なる人格があるか、偉大なる理想があるか、優秀なる智能があるか何うか。曩に文部大臣は青年の傾向を憂ひて、意氣の銷沈、品性の墮落、氣風の頽敗を警戒するの訓令を發せられた、若し我が青年にして斯くの如き憂ふべき傾向を有するものとしたらば、實に我が國力の根本は崩壞せられるであらう。果してそれを事實であるとしたらば、抑も誰れの罪であらう。青年自身の罪であらうか、或は國民元氣の沈衰の結果であらうか、私は然うは思はない、主として教育制度の不完全と教育家の責めに歸すべき者と信ずる。想ふに我が國民の進運を阻害する原因少なくないけれども、青年の元氣を減殺し、國家の荒廢を顧みざるが如きは最も大なる阻害であると信ずる。乃ち私は其の國力荒廢の由て來る所の弊源三四を列叙し、是が救治の方法を講ずるやうにしたい。

△第一、試驗制度の弊害によりて生ずる青年腦力の減殺、

現時の試驗制度は青年をして腦力、金力、時間を浪費せしむることが夥し、卽ち度に過ぎたる智識を注入せしむることである、自らそれを咀嚼の暇がなくて、判斷し撰擇するの能力を傷け、且品性を修め、健康を養ふの餘裕を無くし、可惜青年の時機を空費せしむることである、殊に落第の不幸を見るに至つては、多くは精神沮喪意氣銷沈の病に陷り、遂に墮落の淵に沈む者が少くないのである。然らば斯る弊源を斷たんが爲めに、試驗制度を全廢すべきか否か、これは、宜しく生徒をして自動的に其の學力を試驗する

の方法を設けるがよい、既に、我が女子大學に於ては、所謂選拔試驗によらずして生徒各自の適性に應じ、自發的自動的に、其の學力、品性を試驗するの方法を試みたのである。冀くは速に其の弊を退治するの策を講じ、以て莫大なる國力の損害を救くやう、協心努力を要する。

△第二、現時の學制、學科、教授法の不調和不統一より生ずる精神力の荒廢、

頭腦混亂する狀態

我が國現時の學制は適當なる聯絡を缺いてゐる、其の學科を區々に孤立して調和なく、教授の方法統一せず、從つて相互に重復し、軋轢し、生徒は進むべき標準を見出すに由なく、頭腦混亂して、智識の繰合統一がない、思想の基礎更に確立することがない。是れ生徒等に青年の精神力を消耗せしむるもので健全にして偉大なる、思想を建設することが出來ぬ所以である。

△第三、教育法の不完全によりて生ずる趣味の荒廢、

學校、社會、家庭の三者は箇々分立して聯絡なく交渉なし。それが爲めに學科と實際との間に甚しき懸隔を生ずる、學科によりて得たる知識は之れを實際生活に應用する事能はず、實際生活に得たる材料は、それを學科の研究に資するの機もない、もし此の三者の聯合融和を保たしむる事を得たならば、學ぶに言ふべからざる趣味を覺えしめ研究の快樂を知らしめ、費したる腦力をも其の用を全うせしむることができるのである。

△第四、教育の精神力荒廢、

崇高なる品性、秀俊なる能力、偉大なる感化力を有すべき教育家も、其の養成待遇の方法、當を失せる爲め、空しく精神力を消耗しつゝあるではないかと思ふ。卽ち第一に教授時間多きに過ぐる事、第二に教師の待遇の方法宜しきを得ざる事、第三教師の自由を束縛する事などである。以上の三項に就ては根本的

改革を加へて其の弊を除いて欲しいものである。或は師範學校制度を改めるか、もしくは民間に於て、國民自ら其の事業に任ずるか、其の方法に就て、聊か考ふる所ないではないが、今、之れを詳論するの餘白がないのである。

私學官學の差等に就て。

△第五、官立學校、私立學校の不調和、不統一より來る荒廢、

從來我が國に於ては、兎角私立學校を繼子扱にするの弊がある。當今稍々改まつて來たとは雖、まだ朝野共に私立に重きを措くものが甚だ少ない。官民ともに其の價値を認むることがないのである、然れども何れの國と雖單に官の力にのみ依賴せず、民間に於ける教育を重んじ、其の發達を助長するので、其の國の進歩を促すのである、かの英米國の如きは、高等教育の主要なる部分は殆んど私立學校の掌中にあり、コロンビヤ若しくはシカゴ大學の如き偉大なる感化力を以て國民を造りつゝある事實に徵しても明白である、我が國に於ても國民自ら今一層教育に對する精神を振作し、民力によりて之れを經營し官廳も亦私立學校に便宜を與へ之れを奮勵し、種々の特權を獨り官立學校の專有となさず、官民相和し、相助け、相互に提携して、教育の實功を擧げるのが、目下の最大急務である、而してこは、國家經濟の上より見るも國庫の負擔となるべき費用の大部分を、民間の資力に抑ぐを得て、困難なる現今の財政を救濟すの一良法であらう、他方に於ては教育の改良上法規細則を拘束せられざる私立學校に改て斬新なる教育法を實地に應用し、自由に其の利害を研究する事ができる、隨て彼此長短相補ひ、複雜なる幾多の弊害も自ら除去すのであらう。且つ教育機關の不足を補ふ上より見ても一良法である、現今の如く試驗の難關を構へて幾萬の青年を困憊失望せしむる要がない、青年をして各自の適所に就かしめ、其の技能をして自由に發展せしめ朝野と共に、各其の適材を得るやうになる、從つて國家の進運に貢献する所は實に大なるものであらう。

各自の適所に就かしめよ。

女子は國民の一半なり。

△第六、不完全なる女子教育によりて生ずる荒廢、

我が國の女子をして二千有餘年來養ひ來つた從順、貞操等の美德を本として、之れを發達進歩せしめ、賢母たるやう、良妻たるやう、其の淑德を完ふせしむる事は、云ふ迄もない事である。然し從來の女子教育を見るに、女子をして餘りに女らしかれといふ方面に偏し過ぎ其の差別を嚴にし、懸隔を大にし、爲めに自然の能力、體力をも阻害してゐる、人としては却て不具者となり、獨立心が無く、依賴心が多く、意志が薄弱嫉妬が强く卑屈にも他人に對して自己の意志を發表することも爲し得ざるに至つた。嗚呼女子として獨立心のない厄介者であつたらば、國民の半數は厄介者である。女子にして不具者であつたらば、國民の半數は不具者である。女子若し活動せざれば、國民の半數は死せるに等しいのである。國力の增進一日も忽にする能はざる今日の場合、國民の一般の狀態が斯く不振であれば、國力の一半は正しく荒廢してゐるものである。

女子は第二の國民を養成する母として、將來の國運に至大の責任を有するは論ずるに及ばず、社會の改良も、教育の進歩も、文學美術、道德、宗教、政治の振興も、女子を俟つて始めて完成すべき大事業である。女子にして活動せば國民の一半は活動する。女子にして向上せば國民の一半は向上する。私は女子をして女子として其淑德を全ふせしむるのみでなく、人として國民として、其能力を發展せしめ、健全なる國民として、國家の爲めに其の責務に盡すに足るの能力を發揮せしめたい。蓋し國運の隆衰興敗は、實に男女等しく負擔すべき責任として、又其の權利なればである。

要するに、不調和、不統一、不完全なる教育は、知識の發達を阻害し趣味を荒廢し、元氣を銷沈し、活動を阻止し健康を破壞し、家庭を傷害し社會各階級の不調和となる、腐敗となる、國家の精神力を損耗荒

廢し、其の進運を停滯するの禍害を釀成するに至る。實に恐るべきものである。

冀くば教育の不調和を和し、教育の不統一を統一し、之れを聯絡し、之れを融和し、一の大機關として偉大なる精神を涵養し、國力の荒廢消耗を回復してゆかねばなるまい。今や歐米の諸國分秒を爭ひ、寸陰を競ひ國力の進歩を促がし發展を計り大に備ふる所があるであらう。我が帝國已に其の場に臨み列國と共に世界の大舞臺に榮冠を爭はんとするものである。

陛下の稜威と國民固有の美德。

愛國心と博愛心

我が帝國今日の隆盛發展は、偏に叡聖文武なる我が　天皇陛下の稜威に因ることは申すまでもなく、又一方は我國民固有の美德である所の愛國心を一層培養して來た結果であらうと思ふ。愛國心と云ふのは母が子を愛する情より發達したものでこれを我國家に見ると國家と國民との間柄は恰も親子の情愛とおなじである。國家は國民の耻辱を憤り、其の利益を保護し、其の前途の繁榮を祈つて止まないと共に國民も亦國家に一旦緩急ある時は一死もつて國恩に報ずるの所謂國民的自我心を常に支持して居る。

抑も此の國民的自我心、卽ち愛國心といふのは、今日文明社會の理想として居る世界的であり宇宙的である、情愛心と相反するものであらうか。愛國心は常に叫んでかういふ。我が國民を膨脹せよ、我が範圍を擴張せよ。我が帝室を建設せよ。そして我が國威を發揚せよ。我が國利を增進せよと。之れを外國から見れば、皆他國の侵略に過ない感がある。然らば全く愛國心と博愛心とは相容れざるものであらうか。此處に兩者の關係に就て、正鵠なる判斷を下すに先だち、愛國心卽ち自愛と博愛心卽ち他愛とを、稍仔細に調べてみる必要がある。自愛には二種ある。部分我卽ち卑き我或は小我の愛。全體我卽ち大我或は理想我

の愛これである。己れの爲めに己れを愛するのは部分我であつて、全體に合する個人を愛するのは、全體我である。この全體我は完全な他愛と何等の差別なく、殆んど自愛と他愛との調和統一であつて美しく働ける我である。

更に他愛を分けて、他の個人又は他の個人的團體を愛するのと全體卽ち人類、宇宙或は神を愛するの二種とする。もし他愛に於ても、他の個人又は他の個人的團體を愛すると云ふのであると不完全な自愛と何等の撰ぶ所がなくなる。故に極端な愛國心は、不完全な他愛とおなじであつて、自我が人々の發達を傷くるが如く、國家の進運に害あるべきことは明らかな事實である。然れども完全な他愛は決して自愛を外にして行はれぬもので畢竟完全な他愛も亦自愛の張大せられたものに過ぎない。

自愛及び他愛の精神。

この自愛及び他愛の精神は、人々の本能であつて、必ず人は己を愛し、國を愛すと同時に他人を愛する情を自然に供ふるものである。然れども此の本能にのみ任せたものは多くは、不完全な自愛或は他愛となるので常に此の兩者の關係に注意しないと、往々其の軌道を逸するの恐れがある。畢竟世界に或は戰爭が起つたり、平和が來たり、人心に醜美の情をあらはすのも此の兩者の關係に外ならぬのである。

今や世界の舞臺に雄飛をせんとする我が日本國民の愛國心は、決して偏狹なものであつてはいけない。常に世界的平和を目的とし、他國に對する正義を保ち、人類の安寧勝利を希望する所のものでなくてはならぬ。そして是やがて我が日本帝國の不朽の基礎を築かしむる原因となるものである。見よ、我が國は歐米の列强と併馳して行く上に、到底彼等列强は人種的、宗教的偏見を打破することが出來ないとも見えて、猜疑の眼をもつて日本人排斥運動を試みたり或は我が貿易に妨害を加ふることが頻々として起つてくるではないか。世界の平和は不可能である。然らば何うして永久の平和を致すことを得るかと言ふに、他

母が子に對する犧牲の精神。

一大缺點。

でもない、學問と教育と道德と宗教を以てするのである。換言すれば精神的戰爭に於て、永久の平和を購ふのである。決して干戈を交へて眞の平和は見られない。國民の愛國心と他愛心の調和統一が出來た上で、始めて社會人心の度量を廣め、平和の中に全體を進歩を促すことを得るのである。

前述の如く愛國心は母が子に對する犧牲の精神に其の源を發して居つて、之れ愛國心は女子が男子よりも遙かに强く、且つ自然的に保持して居る所以である。殊に我が國民の愛國心は其の母の生めるものであることは、歴史が明らかに語る所である。それ故に愛國心と博愛心及び宗教心との調和統一を計り、東洋、否世界の平和を來すことに盡力するのは實に我が國婦人の天職であると言はねばならぬ。今や我が國の家庭は既に感力化を失ひ、我が國の社寺は其の勢力地に落ち、しかも我が教育界、精神界を根本より養ふの團體をも見出すことが出來ない、そして我が日本は實に東洋の運命を擔つて、世界の競爭場裡に馳驅せんとするの時に當り、内に國家の基礎を益々堅くして、上は陛下の大御心を安んじ奉り下は萬民の平和を謳歌せしむるやうにして行くと否とは實に女子の天職に須つものが多い、女子たるもの幸に自重自奮以て此の大任をはたす覺悟が必要である。

家庭と自然

我國の教育は家庭に於て、兒童に玩具を與へ、お伽譚をなし、學校に於ても模造標本、繪畫を供へてあるがその實物の動植物を以て實際を觀察させ愛玩せしむることを等閑に附して居るものが屢々ある。卽ち、兒童をして自然界に接せしめて、生物とともに活動せしむる教育を缺いてゐる。されば被教育者は自ら實際に迂く觀察が乏しい、詩趣に貧しい、常識を缺いてゐる、これが我が國現時の教育の一大缺點であ

るまいか。これを歐米の教育に比しては益々その缺點の大なる事を覺るのである。歐米に於ては當時稍々この弊を矯めんとして、或は山野、深林を教場とし、甚だしきは大洋に航して、天地を逍遙するに至つた。これは成可く生ける動植物に接して、その無限の變化に注意せしめ、有情の生物と交るやうにと、種々の觀察、研究心を起さしめんとの企である。

その結果として、歐米人の動植物に對する感情、義務心は、我國民に比して甚だしく異つてゐる。余は嘗て外國に遊べる時、この事に關して珍らしく感じたる點が四つあつた。

國民一般の趣味。

一、動物の繁殖を助くる心、强きこと

少しの水澤があれば、直ちに龜、魚卵等を孵へすことを樂しみとするのである。勿論一方には經濟的の考もあるが、卵を研究する便をうることが尠くない。これ獨り學者間に行はるゝのみでなく、國民は一般にこの趣味を有し、子供有に至るまで、遊戯中にもやる。余は一日農家に宿つた事があつた、その農家の娘に十二三の少女があつたが、この娘は日々山中に分けて入て、種々の卵を集むることを樂としてゐた、そして集め來た種々なるものを、その色形によりて分類する事を是の上ない樂しみとして居つた、その弟はまた、種々の貝を集むるを以て樂しみとしてゐる、斯うして遊戯の中にも自然の趣味、觀察、研究力を養ふことに勉めて居るのである。

二、動物の教育に注意すること

たゞ動物の蕃殖に注意するのみでなく又樂しんでこれを教養する。その教養の祕訣は動物を愛する事である。卽ち動物を物とせずして有情なる生き物として取扱ひ、常に親切、丁寧を以て接するやうにする。これは道德上動物に對する義務であつて、家庭に於て、子供が徒らに動物を虐待すれば親はその罪をせめ

ポープ婦人の鳥の病院。

るのである。わが親しくして居つた家の十二三になる少女は其の家で養ふて居つた馬を友の如くに愛して居た。されば少しの危險なきのみか馬もまた少女になづき、互の間にうるはしき情がある。馬は主人の柔順なる僕となつて、凡てその命令に服して居た。これは一例にすぎぬ事であるが、凡ての動物を愛育するから、動物も決して人に害を及ぼさないのである。

三、動物の治療術發達せること

嘗て、我國には例なきは勿論、外國にも未だ其例少なきことはミス、ボイジニヤ、ポープといへる婦人によりて建られたる鳥の病院と寄宿舍がある、常に凡そ六百の病める鳥と五千の鳥を寄宿せしめ驚くべき成功を見るやうになつたと言つて居る、これたゞ一つの同情の生める仕事である。卽ち從來鳥の病に關しては、一人の專門に研究したるものがない、いかに愛憐するも、一朝病にかゝりては只死を待つの外なかつた。ミス、ポープは幼時より鳥を愛したので終に一身を鳥の病を癒さん爲めの研究にそゝいだ、さればその研究の結果は、鳥の醫術、教育として面白き言葉あるのみならず、修養の言葉として面白きものである。凡て取るべき業は、殊更につくるべきものではない、世の需要によろこびて應ずることが大切である。まだ心なき鳥を療するにも教育するにもまづこれを愛してその信用をうる事が主であると言はれてゐる。往々その診察する鳥の淋しげに、愛に飢えたる嘆息をもらすを見れば、また鳥も人と同じ情をもつてゐる。鳥の如きも人の病む病は大方あつて、從つて樂もまた人と同等のものを用ふるのであると、其他寄宿舍にある鳥を教育するなど、幾多の興味ある研究はとげられた、鳥もし言葉あらばミス、ポープに感謝する所大なるものであらうと思ふ。

四、動物の死後をも弔ふこと

愛犬の墓地。

植樹奬勵

もとよりこは、一般のことではないが倫敦のケンスイングトンガーデン、特に貴族、富有の愛犬の墓地に畫せられてある、殆ど二百にも近き御影名の石碑は草花の間に建てられその碑銘は、生前の功を語り、その死せる日と名とを明らかに記してある。その碑銘の一二をあぐれば“My darling”“Loving friend”等を以て記されてある。かゝる事によつても、動物に對する趣味、あはれみを鼓舞することに如何に力あるかを思はれるのである。

以上述べたる西洋の風は、或は極端に過ぎるかも知れぬ、併し我國の如く、動物を殆ど心なき者の如く、愛情なく虐待する事は道德教育に於て已に大に缺けたることなるのみならず、觀察力を養ふ上よりも一大缺點といふべきである。この一大缺點を補ふには、教育者はいかなる方針によらねばならんかといふに。

一、學校家庭の周圍を改良すること

文部大臣は訓令して植樹を奬勵された。これ誠に必要のことである、一層進んで學校家庭の周圍はガーデンとすることが大切である。かくして或は密蜂、鳥獸の類を飼ひ、たゞ玩具をもて教ふるのみならず、生物をもて教へ、これを愛する念と、觀察、研究の念とを養ふやうにしなければならないのである。

二、動物を愛する事を教ふべし

動物もまた、感情、衝動、記臆を持てる事をわきまへしめて、これを愛する事を教ゆる事が大切である。凡て同情を以てこれに向はねば之れをよく養ふことは出來ぬことを教へなければならぬ。

三、天然を觀察する力を養ふべし

凡て模型を示すを以て足れりとする事は誤つた事と云はねばならぬ、模型は死せるものであるから、生

物の活動變化を知る事が出來ない、其の天然を觀察することが出來てこそ眞の觀察が出來るものと云はねばならぬ、教育者は此等の考へを持つて被教育者を導き從來我國に缺けて居る生物を愛育する習慣を養はしめなければならないのである。

余の經驗。

婦人の地位

我國に於て女子教育の必要が唱道され、其の方法を研究し始めてから最早や三十九年の餘になる。此の三十九年有餘の經驗を考へて見る事は、我が國女子教育の方針をきめる爲めに、非常に必要な事であらうと思ふ。然し今日の女子教育は、如何なる變遷を經て進んで來たのであるか、又今日の婦人界の發展は、どれ位の程度かと云ふ事は、何人も多少の見解を有するのである。確かに外形だけを見ても、我が國の女子教育が此の三十九年間に長足の進歩をしたと云ふ事は、誰も疑はぬ所である。殊に最近十年間に於ては、今日輿論の認めて居る中學程度の教育、卽ち高等女學校程度の教育が、非常に發達致しました。丁度余の女子大學創立を企てゝ居りました頃は、我が國一般の輿論は高等女學校程度のものでも、尙ほ高か過ぎるとして、全國にある其の數は、僅かに十二三に過ぎなかつたものである。夫れが此の十年間に八百六十以上に上り、夫れと同時に數千しかなかつた生徒は、俄かに數萬に增加致してゐる、今日では先づ中流以上の女子は、家庭に這入るのにも高等女學校程度の教育は受けて居なければならぬと云ふ樣になつたのみならず、男子の教育期が段々延長されてくる結果、女子の婚期も晩くなり、女子教育の程度も追々高まつてきて、女子の教育は高等女學校程度丈では誠に不充分であると云ふ事も、一部の有識者の間には、認められる樣になつて參つたのである。

眞に女子は進歩してゐるか。

然し果して、此の外面の數に現はれたる如き勢を以て、眞に女子は進歩して居るか、女子の家庭生活に、子供の教育の上に、女子の社會的生活の上に此の教育の結果は現れて居るかどうか。本統に學校に居た時の如き元氣を以て、卒業後も進歩して居るかどうかと云ふ深い問題になつてくると、其處に種々な疑問が起らざるを得ないのである。

私は此の問題を考へるに當つて決して、獨斷的に論ずるのではないのである。又酷評を下す事も好まない、私は若い時から始終婦人の友となり、婦人の世界を開き度いと云ふ熱望を以て、三十餘年女子教育に微力を捧げて參ゐつて、婦人の世界には少からざる同情を抱いて居るものであるから、不親切なる獨斷を以て、消極的の判斷を下すと云ふ考へは、決してない積りである。

四五年前私は三十五年振りで鄕里に歸つて、地方の家庭生活殊に中學、師範學校等を卒業した男子の職業、高等女學校を卒業した女子の家庭生活について、出來るだけ深く調べて見て、實に我が國の教育は、日常生活の上に其の効果を現はして居らない、つまり我が國の教育は、其の方法を誤つて居る所があると云ふ事を深く感じたのである。夫れから引續き我が國女子教育の結果に就て、調べて見ました所が、我が國の女子は、學校に居る間は、人間として美しい生活を營む事が出來るのであるが、卒業して社會に出で、家庭に入るに及んでは、全く其の力を失つて、進歩ある生活を續ける事が六ケ敷いと云ふ事を見出したのである。

一言で云ふならば、私は今日の女子教育の結果に就て、滿足する事が出來ない人の事としないで、自分の娘の事として極く露骨に云へば、私は我が國の女子に人格が出來た、生命が出來たと云ふ、充分の自信を持つて安心する事が出來ないのである。我が國の女子は今日の有樣にあつて滿足すべきものではない、

女子の學校教育の効果は何うか。

もう一つどうかして、進歩の路を開かなければならぬと思ふのである。之れは私の獨斷ではない、慥かに、女子自身もさう思つて居るのである。

我が國に於て、女子の學校教育は非常なる發達を致したのに抱はらず、其の効果が、女子の生活に何故現はれる樣にならないか、學校に居る間丈けでなく、生涯女子が進歩する力を何故教育に依て與へる事が出來なかつたかと申すると、それには種々の原因が考へられるけれども、其の種々の原因を生じた、最も深い大原因は何であらうか、私は之れに就て研究しつゝあるのである。

私は一方には絶えず女子の家庭に於ける境遇、及今日の社會が女子に對する態度、卽ち一言で云へば今日の女子の境遇に就て、觀察致してゐるが、一方に女子の心理、女子の性情に就ても、研究してゐるのである。此の二方面に就て三十年來研究し、また自分の教育上の經驗を纒めて見て、私は之れが最も深い、且重大なものであらうと思ふ二つの原因を見出した。そこで此の二つの原因を研究し、之れを改善する事に着手しなければ、婦人は之れ以上に發達する事は、出來ないであらうと考へられるのである。

其の二つの中の一つは、內にある原因で、第二は、外にある原因である。

此の中にある原因を研究するには、種々の方面があるが、先づ第一着に我れ〳〵が研究しなければならぬ事は、自分の精神の奧底迄明かにすると云ふ事である。

今迄女子の心理研究は、どう云ふ樣に行はれたかと云ふと、女子が自分で意識する所の經驗を調べ、之れに重きを置いたので、つまり女子の精神の研究は、此の意識の範圍に限られて居た。

そこで女子の教育、女子の活動、女子の反省と云ふ樣な事も、如何なる處に力を入れたかと云ふと、自分の目に見え人の目にも見える所、卽ち御行儀を直すとか、言葉に氣を付けるとか、物を拵へるとか云ふ

様な、意識の表面に現はれる所のものに力を入れて居つたのである。

もう少し之れを詳しく云へば、我れ〳〵の自我と云ふものは、自分が考へ、自分が行ふ所の經驗である、教育と云ふものは、此の意識を明確にし、意識の連合關係を複雜にする事であると、從來は全く考へられて居たのである。所が段々世界の交通機關が發達して、人類の知識がよく交換される樣になり、人間の思想の傾向が、唯物論的から唯心論的に進んで來たのに從ひ、又多くの學問の分業と共同の働きに依り、各學問の比較研究の結果が段々に現れて、今日では人間の心理、人間の精神と云ふものは決して意識に現れた所の現象のみには止まらないと云ふ事が、見出された。意識に現れた所のものは、一時的の現象に過ぎないのである、猶其の奥には一種量り知るべからざる深い源があると云ふ事が解つて來たので、之れを私は、我が國女子教育に應用して考へて見まして、大いに見出す所がある樣に感じた。

然らば其の婦人自身にある深い原因とは、何であるかと云ふと、之れは近頃の心理學を學べば直に了解することであると思ふ、此の深い原因は、學術語ではサブコンシヤスネスと言つてゐる。之れを我が國では、潜在意識とか、或は潜在精神とか云ふ樣に譯してゐる。何れでも間違つては居らないのであるけれども、どうも丁度其の意味の全體を現はす言葉が我が國にはないのであるから、原語で覺えて置く方が、便利であらうと考へる。

昔は之れを遺傳とか、本能とか、天賦の性とか言ふ言葉を使つて、漠然と考へて居つたけれども、今日では我れ〳〵の傾向、我れ〳〵の品性、才能と云ふ樣なものは、自分で拵へたものゝみではない。實は自分の生れぬ前、親の生れぬ先きの親からも大いに作られて居る、つまり長いあひだの人類的協同に依て作られて居る。自分の意識せぬサブコンシヤスネスから來たものが多いと考へる樣になつてきたのである。

我れ〳〵の今日持つてゐる意識は如何。

例へば光線の源は太陽から發し、夜間室にともす電燈には、必ず其の電流の源があつて、其處に現はれる光りや熱は其の源からきて居る、一時的の現象に過ぎない様に我れ〳〵の今日持つて居る意識、或は精神は、猶其の深い奥にあるサブコンシヤスネスに、大いに影響せられて居るのである。故に我れ〳〵の才能を伸し、缺點を改善するのには、此の深い原因から改めなければ、本統の事は出來ないのである。

そこで一度之れと反對の考へがあるから、その矛盾を避ける爲に一言したい、それは英語で Self made と云ふ言葉である、又實際自分で自分を作つた人は、我が國にも少くないので此の自ら作る、自立自修と云ふ事は、ある意味から言へば慥に出來る事であり、又人間として、まことに價値ある行爲であるが、如何して自立と云ふやうなことを人間は尊ぶか、何故に如何なる困難に遇つても自立して屈しないかと、もう一つ深い原因を考へて見ると、其の土臺は決して自分一人で作つたものではないのである。昔はそれを天と云ひ、カントは之を實踐理性（プラクチカルリーズン）と言つたのである。今日の研究では、之れは、長い間の人類的協同に依て自分の意識に上る様になつて來たのである。

夫れ故今日我れ〳〵の經驗とか、知識、品性と云ふ様なものも、全く自分一人の力で出來たものではない、我れ〳〵の知らない遠い先祖が、長い間に作つて遺して行つたサブコンシヤスネスと云ふ土臺の上に、我れ我れの才能も、人格も傾向も經驗も築かれてあるのである。婦人には自立が出來ないとか、目的を貫くことが出來難いと云ふものも之れは決して其の人一人の罪ではない、とほき祖先から讓られた弱點である。故に今日女子を進めるとか、品性を改善するとか云ふ事は、此れ迄の様に意識に上つたもの、形に現はれた事に計り注意しても其の効は少ない、寧ろ其の源を尋ねて、其處から改めなければならないのである。

善き暗示。

一身を神聖に保つならば。

然らば此の我れ〳〵の知らない、遠い祖先から讓られた原因、サブコンシヤスネスと云ふものは、我れ我れの方で改善する事の出來るものか、奈何かと云ふと、慥かに出來るものであります。之れは奈何したらば宜しいかと云ふて、つまり一言で云へば善い暗示を與へると云ふ事であります。

目に見える物質上の物でも、精神界の事でも、停滯を防ぎ其の進歩改善を計るのには、之れに適用すべき原理は一つである、卽ち新要素の注入に依り、其處に新らしい關係を作ると云ふ事で、善き暗示は、精神の發達に大切なる新要素である。

然らば女子の教育は精神の源に溯つて此のサブコンシヤスネスの改善を計りさへしたならば、夫れで成功するかと云ふと、之れ丈では本統の効果は見られない、もう一つ之れに伴つて、進めなければならぬものがあるのである、之れは前に言つた第二の外にある原因で、之れに就ての話は私の目的である。餘り餘白がないから、極く大體を述ぶる丈に止めて置きたいものである。

此の目的を立て之れを貫くと云ふ事も、今言ふ境遇を開くと云ふ事も、つまり其の内容は一つである。此の境遇と云ふものも只今サブコンシヤスネスの所で少しく言つた樣に、矢張り自分一人の力で出來たものではない、人と人との一致協力の働きに依て出來たものである。

之れ迄の考へ方では、修養するとか、或は學問するとか云ふ事は、全然自分の考へに依り、自分一人の努力に依て出來るものであると云ふ事であつた。夫れ故彼の深山へ這入つて、一人で沈思に耽り、或は天地の神に祈るとか、或は獨り朝から晩迄讀書するとか云ふ樣に、全然社會と離れて、一身を神聖に保つならば、夫れで修養も出來、學問も出來ると思ふて居たのである。ところが今日の心理學では、我れ〳〵の精神、知識、或は我れ我れの信仰と云ふ樣なものは、決して我れ我れ一人の力で出來るものではない、如

何に豊富なる天才を與へられて居る人と雖、若しも社會から全く孤立して居るならば、決して天才は發揮されないのみならず、却て低能兒と何の撰ぶ所もなくなるに相違ないと云ふ樣になり、其結果境遇、或は社會と云ふものは、人間の進歩に非常なる關係がある事を認められた。

前にはつまり極く單純な概念が出來て、之が段々複雜な概念になると考へ、ベーコンの如きも、人心は白紙の如きもので、夫れが段々に概念の聯合に依て進むのであると言つてゐる。そこで教育と云ふ事も、昔は銘々の心をよく教育して行きさへすれば、夫れで宜しいと云ふ事でありましたが、今日の進んだ考へでは、決してそうではない、我れ〳〵の品性、我れ〳〵の實力、信仰と云ふ樣なものも、人と協同の働きに依て出來る、社會的に人の心と自分の心と關係を持つ樣になつて始めて發達するものであるから、社會と交通する方法を教へる事が大切であると云ふ事を見出したのである。

今言つた所の考へを證明するのには、種々なる適例があるが、其の中の一二のものをつげると、前に私は米國に居つた頃に直接に觀察し、其の後も興味を持つて引續き觀察して居る事があるのである。夫れは有名な米國のヘレン、ケラーと云ふ婦人で、此の人は生後八ケ月の目に明を失ひ、其の後間もなく耳も聞えなくなつてきたので從つて話す事も出來なくなつてしまつた、夫れから其の上に又皮膚の病氣をした爲め、味覺がきかなくなつてしまつたから、五官の中四官が失はれ殘る所は僅に唯觸官のみになつた。

然るに此の人の先生は、此の唯一つの觸官を利用して、社會と交通する道を開いたのである。彼女は之れに依つて大學教育迄受け、卒業後は更に進んで種々研究を重ね只今では多くの著書もあり、又雜誌などにも屢々寄書してゐて、確かに學者として世界に紹介せらるゝ婦人となつた。

此人の先生の經驗を聞いて見たが、ヘレン、ケラーは七歳になつても、まだ我れと云ふ考へが出來なか

非常なる喜が輝き。

つた、夫れから世界の凡てのものには、名があると云ふ事も知らなかつたのである。然るに或る冷めたい朝、此の先生が水を汲み上げた時、彼女は例の觸官に依て、或る感じに打たれたのである。

そこで先生は直ちに此の感じに結び付けて Water と云ふ名を彼女の肩に書いて教へた處が、ヘレン、ケラーは此の時始めて世界の物には皆或る符號があると云ふ事を知つてきて、其の顏には非常なる喜びが輝き、夫れからは大いに希望が現はれて、其の日の中に忽ち數十の名詞を覺え、之れが端緒となつて、段々に知識品性が發達し、遂に今日あるに至つたと云ふ事である。

ヘレン、ケラーに若しも此の社會との交通を苦心して開いて呉れた所の、親切な先生がなかつたならば、彼女は只一個の白痴者とて、生涯暗黑の裡に終つたに相違ない、之れに依ても社會的關係、境遇と云ふ事が、如何に我れ我れの進歩に大切なものであるかと云ふ事が、解るのである。

そこで我れ〳〵が進歩發達を願ふならば、人と交はり、社會と交通して刺戟を受け、種々善き暗示を受ける事が大切であるが、もう一つ缺くべからざる働きは、此の受けた刺戟を一つの知識に纏め、多くの暗示の中から善き必要なものを撰んで、一つの理想、一つの信仰にすると云ふ事である。此の働きがなかつたなれば、多くの刺戟を受けても、只個々の事を知り、衝動的に活動するに過ぎないので、餘り發達の上に効果はないのである。故に自分の考へを以て知識を構成し、原理を見出し、信仰を作ると云ふ事が甚だ大切なことである。

近世哲學の開祖デカルトは「我れ思ふ、故に我れ在り」と云ふて居る。然し彼の考へる、知識を構成すると云ふ事は、矢張り自分一人の勢力では出來ないものである、何故ならば我れ〳〵には斯かる働きを起させる所の刺戟がなければならぬ。而して此の刺戟は人と考へを交換し、社會と交通する事に依て、多く

與へられるものである。

もう一つ其の例をいふと、今日の世界に於ける弱國、或は保護國と云ふ樣な國、譬へば印度、埃及、近くは支那、朝鮮の如きは、奈何して獨立の體面を保つ事が出來ない樣になつたかと云ふと、一言で云へば外國文明の輸入を排斥し、又世界の文明にも何等の貢献もしない、つまり世界との交通を斷つて、孤立したからであつて、之れは我れ〳〵個人の間で進む事が出來ない弱者も、其の境遇は一つである。

之れに反して英國とか、米國とか、獨逸とか云ふ樣な强國は奈何かと云ふと、最も廣い境遇に立つて、盛に世界的交通をして居るのである、近頃新進の勢を以て進んで參つたところの獨逸は、孜々として國力の發達に力を盡して居るのにも拘らず、猶英國に及ばないものがあるのは、今日に於ける世界の交通機關である海上の支配權を持つてゐないからであると云ふ事に氣がつき、四五年前から十年計畫を以て、毎年盛に大船巨船を建造し、國内の運河を開きなどして、海上權を掌握し、世界の交通機關を支配する權力を得やうとして、非常に焦慮して居る。

國力の發達を計る爲に、斯く世界の强國が交通機關の完備に全力を注いで居るのは何故であるか、其の意味は茲にいふ迄もなく、了解されしことゝ思ふ。

國力の發達を計る交通機關。

夫れから丁度我が國に於ける昨今の經濟狀態も、此の適例である、凡ての銀行には金が餘つて居るが、銀行家は之れを思ふ樣に融通させる事が出來ない、工業家は一生懸命製造し、商業家は之を仕入れても買手がない、農業をする人は今年非常な豊作であつたが、此の産物を買ふ人がないので、大いに不自由を感じて居る。つまり資本も、物品も澤山あるのであるが、其の間の交通が閉されて居る爲に、各方面の事業が皆蹉跌を來して居る、若しも此の儘で、何時迄も交通の道が開けないならば、我が國の進歩は、之れが

婦人の世界。

爲に大いに害はれるに相違ないのである。

そこで一言で云へば進歩發達、或は文明と云ふものは社會的交通に依て出來たもので、最も廣く、最も頻繁に交通したものが、最も多く進歩すると云ふ事が、出來るのである。

然るに我が國の婦人は如何であるかと云ふと、少しも交通の道が開けて居ないのみならず、婦人自身が餘り其の必要を感じて居らない爲に、自ら其の交通を斷つて居る。我が國に於て家庭内の事が最もおくれて居るのは矢張り家庭を支配する婦人と婦人との間に、交通がないからである。

今迄の日本の婦人は、唯自分で考へた事、行つた事の外は知らないので、婦人の世界は實に狹かつたのである。そこで自然品性も、頭腦も少さく、偏頗で、感情的主觀的になり、人の嫌ふ婦人の五病などに、囚はれ易い樣になつたのである。

今日私が我が國の婦人に望む所は、婦人も今後は社會的協同的の生活を開く爲に、大いに力を注ぐ事である。此の交通機關を作らないで、孤立して居つては、到底進歩する事も修養すると云ふ事も不可能であると云ふ事を眞に解して戴きたいと云ふ事である。

此の交通機關とは奈何云ふものであるかと云ふと、之れはいろ〳〵あるが、今日我が國婦人の境遇として最も開き易い機關は讀書であらうと思ふ。然し讀書と云ふ事も、唯多くの本を讀みさへすれば宜しいと云ふ事ではない、今日迄の我が國の教育は、分量的であり、注入的であつた爲に、其の効果が少ないのである、學校で注入した知識は、今日ではもう古びて居る、今日の如く世界の交通が頻繁に行はれる時に於ては、昨日の新知識はもう今日は古びて居る、今日は又其れ以上の發見があるのである、故に今日は今日の知識を養はなければならぬ、まして昨年注入して置いた知識、四五年前に注入した知識のみで、其の上

婦人の組合組織。

に新要素を加へる事がなければ、其の人の頭腦は古び、進歩は後れて、大なる損害を蒙らなければならぬのである。

そこで我れ〳〵は生涯世界と盛に交通して、益々新たにならなければならぬ、卽ち思想の世界の交通機關を支配する力である讀書力、思考力、研究力と云ふ樣なものを養ふ事は、婦人の目下の急務である。

然し眞に婦人の世界の交通を盛にするには、新聞雜誌、圖書館、講演會、其の他種々の機關が必要である、又もう一つ物質的經濟的方面の交通を開く爲には、婦人の組合と云ふ樣な組織も出來なければならぬ、斯う云ふ事が出來る樣にならなければ、我が國婦人の發達は到底不可能であると言つても宜しいのである。

第二の此の客觀的原因に就ては、未だ種々說もあらうが、客觀、主觀の何れにしても、其の根本は一つである。

今日迄婦人の進歩が、甚だ遲々として居る原因は、慥かに婦人が自己と云ふものに就て根本的に考へる事が出來ないで、自己と云ふものゝ解釋が誤つて居つた爲に、交通機關の必要を認めず、一致協同の働きを起さなかつたと云ふ所にあるのである。故にどうか婦人と婦人と、家庭と家庭と、婦人と國家社會、婦人と世界及宇宙の精神的境遇の交通を開く事に力を注ぎ、自己を進め婦人全體の發達を計ることを希望する。

吾人の使命

我が國家が開國以來五十年、卽ち半世紀を經過し、去る四十二年開國五十年の記念として米國艦隊を迎

へ、また同時に開國の志士吉田松蔭の五十年祭を行ひ、或はまた憲法制定後二十年の記念日を祝ひ、國民をして波瀾多かりし開國の五十年を追想せしむると共に、今や我が國家は第一維新の偉業を成就して少年時代を去り、後年世紀に於て第二維新を營み、壯年時代に入らなければならないといふ自覺を促された、殊に去る四十二年十月煥發せられたる戊申の詔勅によりて、國民は一層その自覺を明らかにせられたのである。

外國からの刺戟。

我れ我れは何故今迄を第一維新といひ、少年時代といひ、今後を第二維新、或は壯年時代と云ふのであらうか。

第一、今迄の日本の運動は多くは他の刺戟をうけ餘儀なくせられたといふ傾きが見える、卽ち鎖國の禁を解いたのも外國の壓迫に因つてゞあるし、日清、日露の戰鬪を開いたものも外よりの刺戟により、寧ろ自衛上に決心して、活動したのであつた。其の他憲法を布き、法律を編み、條約を結び、或はあらゆる文物制度を整へたのは、皆外國の刺戟と指導とによるので、一言以て之れを覆へば他動的に動いて來た時代である、今や國家自らが自分の位置を認め國民性を自覺し、世界の大勢に精通して當に自動的運動を開始せんとする時代に至つた。個人で云へば始めて自己を知つた時で、これから一個の人間として立ち得べき時である。故に國家もこれより壯年時代といふのである。第二、從來の活動は自營の爲めであり、自修の爲めであつたが、今後は世界の爲めに使命を感じ自己の天職の爲めに盡さんとする意志が出來た。これ所謂第二維新を營むといふ所以である。

然らば今後我が日本は如何なる責任を果さなければならぬであらうか。

第一、今後我が國が東西の調和者となり、世界各國の人種と人種との一致協力を計る媒介者とならなけ

人種的偏見。

ればならぬ、稍之れを詳說すれば

（一）通商外交の中心となり媒介者となり、これ等の利害問題の中に立つて、世界平和の爲めに盡さなければならぬといふ事が大切である。

（二）世界から人種的偏見をとる事に就いての先覺者とならなければならぬ。卽ち世界の感情を融和して眞に四海兄弟主義を鼓吹し、またこれを實現するの衝に當る事を務めなければならない。

（三）世界的宗教の調和者とならなければならない。卽ち人道の爲めに盡さなければならない。

第二、第一維新は舊習を破つて、進歩の障害を除いたのに過ぎなかつた。卽ち凡ての制度を改め、憲法を布き、法律を制定し、條約を改正し、國家を成立せしむるに必要なるあらゆる組織が定つた、第二維新はその內容を充實する事に務めなければならない。また破壞せられたものに代つて、新らしきものが、建設さるゝやうにならなければならない。その他政治でも、教育、宗教、貿易、商工業等、凡ての改善發達を計つて、大に國力の充實を計らなければならぬ。

第三、第一維新は模倣時代、飜譯時代、文物輸入時代であつたが、第二維新は發明、發見の時代、創作の時代、研究の時代である。

第四、第一維新は書物的知識時代、知識蒐集の時代であつたが、第二維新は社會實現の時代、國民的運動の時代、家庭、國家、社會を有機化して行く時代である。

第五、第一維新は思想混亂の時代であつたが、今後第二維新によつて、世界の思想を統一して、新世界的大理想の眞理を日本で行はなければならない。日本は今後世界の運動の統一さるゝ所、また實現さるゝ所といふ責任がある。またその責任は果されるであらうと思ふ。前半世紀に於て米國が世界各國の發見し

たる眞理を應用し、其の實驗場となつて、遂に米國今日の富裕をなし、その文化も歐羅巴に追ひ付いたといふ計りではなく、今やこれを凌駕せんとする勢を示して居る。今後は日本がその理想の實驗場となり歐米に於て發見された眞理や理想が日本に於て試みられ、實現せられなければならぬ。また必ずさうなるのであらうといふ理由がある。卽ち

東西の思想が集る

（一）地理から云つても、我が國は東西の中央に位し、東西の思想が集り、またその有志者が會合するに適當な地位を占めて居る。

（二）我が日本は昔から世界の長所を調和統一してこれを同化する品性を持つて居る、卽ち神道も儒教も基督教も、我が國に於ては速やかに調和せられて、現にこれ等が共在して居るが、敢へて爭鬪も起らない。これ等を見ても我が國民は宗教的偏見强からず、餘程寬大なる度量があり、調和統一する能力を持つて居る事が解る。

（三）日本の宗教とも見るべき國民の信仰が、元來人道を基として居るから、他宗より憎まれない。

（四）日本には大和魂といふ武士氣質がある、事に處して亂麻を一刀の下に斷つが如き、果斷力がある。今後の社會に立つて行くには、個人としても、國家としても、斯くの如き一つの强い力は實に必要である。

第六、第一維新は男子の働らきによつて出來た。從つて男子の社會の革新が行はれた。今後は女子が中心になつて、家庭の中より內部的の改革を行はなければならない。從つて婦人の價値、婦人の人格を現はす時である。卽ち婦人の世紀とも見るべきであらうか。

以上の如き責任ありとすれば、我れ我れは如何なる覺悟が必要であらうか、

日本人排斥の聲

第一、商工業の競爭をする覺悟がなくてはならぬ、元來國家も個人と同じく生存するに就ては國民の衣食が足りて後、科學、哲學、文學、宗教が起つて來るのである。今後の生存競爭は國家的であり、國體的であるといふ事は世界の大勢を見ても明かである。而して今後の衝突も、今後の一致協力如何も、その根本は食物問題卽經濟問題である。その形を變じたものが、宗教の衝突及び人種間の爭鬪になるのである。我日本が過去五十年間に二度迄大戰爭に勝利を得て、列强の仲間入をしたからとて、まだ安心は決して出來ぬ。最も親交を有する米國すらも、人種的宗教的偏見に於ては、往々慘忍酷薄の處置に出るではないか、かの米國西部海岸に行はるゝ排斥問題の如きは中々その聲が收まりさうにもないのである。又我が同盟國として最も信賴するに足る英國も亦其の凡ての植民地に於ては日本人排斥が行はれて居る。其他獨逸國の如きは言ふ迄もない、此人種的、宗教的競爭場裡に何を以て戰かうて行かねばならぬか。矢張先づ之れに向ふ重なる武器は財力である。然るに我が國の富力は如何。米國の十三分の一にも及ばないといふ哀れな有樣である。境遇を開拓するに必要な頭腦の力も誇るに足らぬ。さればとて商業信用も列强に比して遙に劣つて居り、年々の貿易は敗北しつゝあるといふ有樣ではないか。之を如何にしたらば救ふ事が出來るであらうか。

（一）貿易を盛んにして、輸出が輸入に勝つ差が增加するやうに務むるより外仕方がない。然らば我が國家は如何なる貿易の方針を取らねばならぬか。英國の如く自由貿易でゆけるであらうか。米、獨、佛の如く保護貿易が必要であらうか、これは國の事情と時の必要によつて其政策が定まるのである。英國の如きは世界の製作を以て任じ、外國や植民地から未製品を入て、之に製造を加へて各國に輸出して居る。斯の如く世界的の商業をして成功した。米、獨、佛は國の事情から保護貿易を必要とし、又其の政策をとつて

成功した。例へば獨、佛の如きは自國の商工業を保護する爲めに、外國の輸入品を禁止し、これによつて國民の發明力を激發せしめ奮鬪力を起さしめて居る。かのナポレオンが植民地のケンの砂糖輸入を禁止したので、國民は必要に迫られて、遂にビートの砂糖を發明し、今日では米、獨、佛にも輸出する樣になり、遂にケンを壓倒する有樣に至つた。又一方に於ては獨佛の婦人迄が、國家經濟を慮り、輸入を防ぐ爲めに、日常多くの自國製のものを用ひて、外國製のものを用ひないといふ事等は、不言不語の同盟の如く一般に行はれ、自國の商工業を尊重するといふ、國風をなして居る。我が國を省れば、國民の常食として用ゆる米や玉子迄も外國の輸出を仰いで居といふ有樣である。その他衣服の原料から裝飾品、建築材料、書物、諸器械等凡のものを輸入して居る。殊に婦人の贅澤品等の輸入も尠なからざる有樣である。斯くの如く多額の輸入を防ぎ、輸出を勝たせるには、どうしても一般に保護貿易の精神がなくてはならぬ。

不言不語の同盟。

(二)然し單に輸入を防ぎ、國民が質素儉約するのみでは足らぬ。益々殖產を盛んにする途を考へなければならない。之れに就いて種々望を屬する事が出來るのは國民の半數を占むる二千五百萬の婦人の覺醒である。是等の婦人が不經濟なる生活を改め、經濟を重んじ、且つ殖產的になつて行く事が出來たならば、國家の富力に良結果を來す事は多大であらう。今後の婦人はどうしても依賴心を去り、無益なる消費は假令一厘たりとも謹しみ同じく金錢の消費を掌るにしても、これを有用に働かせる事に心掛け、また一方に於ては、家庭に化學を應用して、其の生活を豊富にすると共に國內に發明發見の頭腦を作る事に注意しなければならない。而して能ふべくば副業を營んで積極的に其の經濟を助けなければならない。

財源が狹隘なり。

(三)今一は國家が盛に殖民を奬勵しなければならぬ。今の日本は其の範圍其の財源が狹隘である。今後は世界を働らき場として活動する樣にならねばならぬ。

眞に四海兄弟主義。

第二、以上の如き運動は團結で營まれなければならない。卽ち人道宗教義俠心犧牲の精神の發動が大切である。今日世界の發達を來した原因を調らべて見れば多くは團結の力にある。英國もスコツトランド、アイルランド、ウエルスを合せ一國を成してから、其の國力は頓に發展した。米國も諸邦の聯合により、獨逸も聯邦をなして、勢力の統一を計り、國力の增進を促して居る。商買上でも組合組織が出來、次でユニオンが出來、シンジゲートとなり、遂に一大ツラストを結ぶ樣になつた。今後我が國家も完全なる組織と精神とを以て、百般の事業が國體的に行はれてゆかなければならない。この國風を育つるには、殆ど宗教ともいふべき引力が國民の間に起らなければならない。これ犧牲義俠の精神であつて、卽ち人の爲めに喜んで犧牲になり天職を信じて進むといふ樣な美しい、精神の普及である。此の精神こそ我新婦人によつて發揮せらるゝであらうといふ事は、私かに望みを屬する所である。

第三、今後世界は如何なる宗教によつて統一せらるゝであらうかといふに、

(一)從來の歷史によると國家の統一は第一侵略的であつた、第二は貢稅政策であつた。第三は貿易であつた、貿易も所謂弱肉强食であつたが、今後は商業競爭に於て世界が互に有無を交換し、强弱相助け、眞に四海兄弟主義を保つて行かねばならぬ。

(二)次に人道的の宗教によらなければならぬ。今日既に世界の有識者、先覺者は皆この宗教を認めて居る。例へば歐米で最も擯折し、人類が虐待して居つた猶太人、飽く迄孤立を貫いたその猶太人の中にも世界的人道宗教の鼓吹者が現はれ、目下私かに我が日本にも來遊して、その主義を實現しやうと試みて居るものがある。其の他世界の富家有數の學者、教育家、政治家等にもこの理想に傾いて來た者が多い。而してこれ等の識者が日本に着目して、此に於て必ず世界的宗教が最も速やかに實現せらるゝであらうと期待

して居る。卽ち我が國は古來宗教的偏見少く人道的宗教に傾いた信仰を持つて居るからである。我が國民は今後益々人種的、宗教的偏見を除き各國の期待に反かぬやうにしなければならぬ。

第四、今や日本の擔ふて居る天職を果さんが爲めには、大に婦人の力に俟たなければならぬ。而して婦人によつて社會風教の根本的改良が促されなくてはならぬ、卽ち婦人が從來の柔順の德に加ふるに、强き意志と至誠とがなければならぬ。一言以て是を云へば人格ある眞に婦人らしき婦人がなければならぬ。我が日本には古來文學的に、または政治的に武力的に傑出した婦人は尠くはないが、眞に母らしき、妻らしき、教育家らしい婦人は少ない。西洋にては婦人が天使とか平和とか慈愛とかいふ象徵（シンボル）に用ひられて居るが、日本では夜叉とか、汚穢とか、罪惡とかいふ象徵に用ひられて居るのは、誠に嘆はしき極みである、今後は婦人の一大革命が行はれ、その理想が變り、價値が進まなければ、國家、社會の調和統一を來す根本となる家庭の調和は行れない。婦人が中心となつて營まなければならない第二維新の偉業の成就は覺束ない。

斯の如く觀じ來れば、今から半世紀の大勢は實に我が日本が興つて大なる力をなすと共に、從來國家、社會の責任を餘り負はずに過して居つた婦人が重大なる使命を兩肩に擔はなければならぬ、此に於て男子はもとより婦人も、此大なる使命に捧げんが爲めに非常なる決心を固めなくてはならぬ。

各國の歷史を見ると。

紀元節

各國の歷史を見ると何れの國もその國の運命をして之を豫言の形にあらはし、或は之により國民を勵まし、或は之れによつて國民を反省せしめ、警戒せしむると云ふ事が、往々現はれて居る。そして其の豫言

不吉な豫言。

には積極的と消極的卽ち樂天的豫言と悲觀的豫言との區別がある。しかも現今諸强國の多くの豫言は悲觀的に傾いて居るのに反して我が國の豫言は樂天的であると云ふ事が出來やうと思ふ。一例を擧ぐれば今日歐洲に於て日の出の勢を以て繁榮せる獨逸帝國に、昔一人の豫言者が現はれ、國の運命を卜して、國民の警戒を促した。其の豫言に曰く「將來一年の中に三人の帝王が王位に昇らるゝであらう、その中の最も若き王は七人の皇子を擧げ、而して彼れは祖國滅亡を齎す者である」と。千八百八十八年三月三日（今より二十四年前獨逸の皇帝ウヰルヘルム一世が薨去され。皇太子フレデリツク病を犯して王位を繼がれたが、七月廿七日卽位の日より僅かに三ケ月を出でずして逝かれたのでウヰルヘルム二世が次いで王位をうけらるゝに至つた。豫言の如く果して一年に三人の帝王が王位に昇られたのである。なほ不思議にも卽位後三ケ月にして第五皇子の御誕生があり、三年にして第六皇子の御誕生があつた。萬一なほ第七皇子の御誕生があらば、この國は亡び、皇室は崩反るであらうと、かの豫言を記憶して居つた國民は、非常に憂慮したのである。これは迷信ではあるが、一方國民をして大に反省せしめて斯くの如き禍の國家に來ないやうに希望させたのである。然るに天は國民の反省と希望とに報い以て其の國家を祝し給ふたのであらうか、幸にも第七番目は皇子にあらずして皇女であつた。卽ちルイスチエンと名づけられたる御方で此の時の皇室、國民の喜びは非常なものであつた。これは消極的豫言の例であるが、之れに類した豫言が歐洲に一般に行はれて居る、卽ち「金持ちは三代續かず」と云ふやうなのがそれである。金持ちとは貴族、富豪等上流社會を指して居るのである。かゝる不吉、消極の豫言は人間を悲觀に陷らしめ、恐怖に陷らしむるものであるがしかもこの豫言は彼れ等の豪奢となり、安逸に流るゝの弱點を反省させ大に子弟の教育に改善を加ふるの資となり、歐米を救ふ力となつたことはたしかである。斯くの如く消極的豫言もとりやうによつ

ては、國民を反省せしめ、覺醒せしむる事が多いので、國家にとつて有効であると云ふ事が出來る。消極的豫言すらなほかつ然り、況んや積極的豫言はこれにも增して國民の理想を向上せしめ、元氣を鼓舞するに有力なるものであると云ふ事は明かで且つ歷史がこれを證明して居る。我が太古に於て天照皇太神がその皇孫に對して永久の祝福を垂れ給ひ、且つ大和國の將來を卜して「寶祚の隆なる事、天壤と共に窮り無かるべし。」と詔らせたまへる豫言の如きはいかに我が國運の發展に與つて力あるものであつたのであらうか、我が國が屢々外患を蒙つたにも拘らず、一度も其の神聖を犯された事が無い。これを國民は天祐と信じて居る如く我が國の此の豫言は國民に計るべからざる集中力をあらはさしめて、偉大なる活動に堪へさしめたのである。勅語にも「吾が皇祖皇宗國を肇むる事宏遠に、德を樹つる事深厚なり、我が臣民克く忠に、克く孝に億兆心を一にして、世々厥の美を濟せるは、これ我が國體の精華にして教育の淵源亦實に玆に存す。」と仰せられてあるが、この國體卽ち國家の國風と云ふものゝ中に、教育の淵源はあるのである。我が國民はこの豫言を二千五百七十餘年間實現しつゝ今日に至り、そして益々この信仰は深くなつて居る。この信仰あるによつて、今日世界の厭迫を受ても我れ〳〵に非常なる自信と勇氣とが出づるのである。併し我が國民は斯くの如き樂天觀を以て、現狀に安んずるものではない、また我が國は天祐によつて、各國の豫言にあらはれたる國家の滅亡と云ふやうな危急存亡に遭遇した事がなかつたかと云ふに、決してさうでない。教育勅語の中にも明らかに此の兩方面があらはれて居る。我れ〳〵はこの紀元節に於て「寶祚の隆なる事、天壤と共に窮り無かるべし。」と云ふ事、を深く印象すると同時に、また國家の運命のかゝる所を察しなければならぬ。余は今朝奉讀せる勅語の中、殊に深く感じた所は、「一旦緩急あれば義勇公に奉じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし。」といふ所である。今日我が日本は太平の世であらうか、

社會の現象を觀察せよ。

我が國の運命は果して何れの所に掛つて居るであらうか、其の實際を見なければならぬ。余は日露兩國間に、戰端を開ける當時、之れ獨り日露開戰にあらずして、世界各國と戰端を開いたのである、世界各國の競爭場裡に立ち入つて、五大戰爭を開始するものであると述べた。これは決して一私言ではない、天下の豫言である。その通りに今日は第二の戰爭當に酣である。余は日露戰爭當時、兩國の戰鬪力を比較した表を壁に掛けて、日夜その增減に注意する事を忘れなかつた。そして今日は是に代るに各國の富力表を掲げて居る。今後の我國の運命は何うなるであらうか。思ふに私心を捨て、名利に捉はれたる頭を破つて、國家の爲め、公に奉ずる事が出來たならば、國小なりと雖も、經濟力薄弱なりと雖も外國の厭迫に打ち勝つ事は容易であると思ふ。只恐る可きは內憂卽ち兄弟垣に鬩ぐやうな事である。今日の如き、國家が諸强國と競爭するやうな場合に際し、何ぜ我が國家は一致協力、私心を拋つ事をしないか。名利を脫する事が出來ないであらうか。

彼れが口に唱ふる如く忠君愛國の精神が眞にあるならば、何故大度量を以て人に對し、廣く人氣を容れる事が出來ないであらうか。實例は少しく注意して社會の現象を觀察したならば、明らかに了解する事が出來やう。これは我が政治家、我が有識者が、必ずしも氣付かぬのでもなければ拋つて居るのでもない、然し至誠が乏しいのであらう。其の方法が目的に適はぬといふ事は事實である。戰後の國力發展に際して之れに相當した事業勃興を計る事は、大切であると云ふ事は何人も氣付いた所である、然し其の方法は國家永遠の繁榮を計るに足るものではなかつた。卽ち投機心を鼓舞し、人の弱點に乘じて虛榮心をおだて、或は空元氣を付けんとするやうなやり方であつた。其の結果は覿面今日の經濟難を齎して居る。かくの如くにして果して何時世界の競爭場裡に起つに足る實力を養成する事が出來るであらうか。また一つ憂ふべ

き事は、我が國は大國の列に加つたが、國民は未だ大國民の度量を缺いて居る。人々の頭が未だ甚だ狹い。故に、心ある者が眞實の事をしやうとすると、中傷離間を試みやうとし、しかも其のやり方が甚だ卑劣である。丁度畑に人の眠つて居る間に、そつと惡魔が烏麥を蒔くやうにこそ〳〵と惡事をするのである。然らば我れ〳〵は如何なる態度を持つべきであらうか。

舉國一致と云ふ事。

第一、舉國一致といふことは勿論、時勢を憂慮すると共に、之れを救ふに足る方法をひつさげて努力せねばならぬ。これはひとり男子のみでなく苟しくも高等教育をうけて國民の一員として教育されてある女子も大に國風を養ふ事に努めなければならない責任を有して居るのである。昔幕府の或る時代に國民の奢侈を禁ずるに當り、奢侈は多く婦人の衣服裝飾に費えるものであると云ふので、一切金銀の裝飾を用ゆることを禁じ、衣服も絹布を用ゆる事を嚴禁した。然し掟によらずとも婦人自身の國體の方針によつて、大に國の經濟の維持が出來るのである。近くは和蘭の皇后陛下は宮中で常に更紗を召されてゐる。之は一方質素を御奬勵になると共に他方では自國のものを御用ひになつて、輸入を防がるゝ思召に出でたのであると承つて居る。故に高貴の人々が參内する時には必ず更紗を用ひられる。また獨逸皇后は軍人の夜會では、いつも白い綿服を着けらるゝ故にその餘の婦人は皆綿服を着て行くとの事である。余は必ずしも我が國の婦人に金銀の裝飾を廢せよとか、錦服に改めよとか云ふ嚴命を傳へ、また規則を設けるものではない。然し、男子の產み出した財產を消費する任にある婦人が、質素儉約を旨とし、體力も能力も金力も、勉めて有効に用ひ、無益の費は之を省く事に心掛けなければならないと思ふ。金持ちが綿服に甘んじて、ダイヤモンドを公共の爲めに捧ぐる事は、却つて美である。婦人は國家の經濟を知ると共に家庭の經濟を知らねばならぬ。健康と便利との妨げとならぬ限りは節儉を重んじ、一文でも冗費を省く事を務めねばな

家運の挽回。

らぬ。

第二、は積極的の方針をとるべきである。女子と雖、一朝家産の傾いた時は、相當の職業を營んで、家運の挽回を計らなければならぬ。現今の如き國家の經濟難に遭遇して、なほ女子であるからとて傍觀して居る事が出來るであらうか。あらん限りの力を出して幾分なりとも國家の危急を救ふの覺悟がなくてはならぬ。

且つ在來我が國貿易の十分の七は、婦人の手によつて出來て居るのである。微力であるからとて、決して侮るべきものでない。今日益々一般婦人の副業を盛んにしたならば國家經濟を助くる事も、蓋し少くはないであらう。副業とは我女子大學に聊か試みて居るが如き、消費組合、信用組合の如き、或は實業部、私蓄部、園藝部の如きものを、個人的に、或は團體的に營む事である。殊に農藝の如きは、地方婦人の副業として、益々奬勵する事が必要である。而してかくの如く女子が國民として捧ぐる事によつて、女子の力を著しく發展せしむる事が出來るものであると信ずる。

この紀元節に當り、祖先以來深く腦種に印象せられたる我が國の豫言とも云ふべき皇祖の詔を再びくりかへして、各自の責任ある所を悟り、眞に私を捨てゝ義勇公に奉ずるの覺悟を定めなくてはならぬ。

（明治四十四年十一月出版）